六供中京安寺遺跡·六供下堂木Ⅲ遺跡

前橋都市計画事業六供土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調查団

六供中京安寺遺跡・六供下堂木Ⅲ遺跡

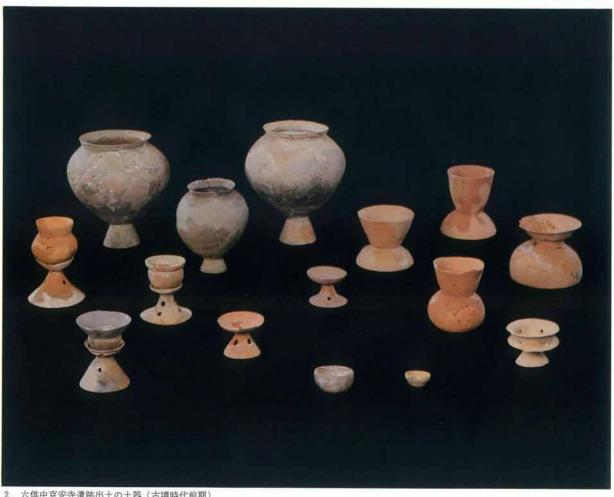
前橋都市計画事業六供土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



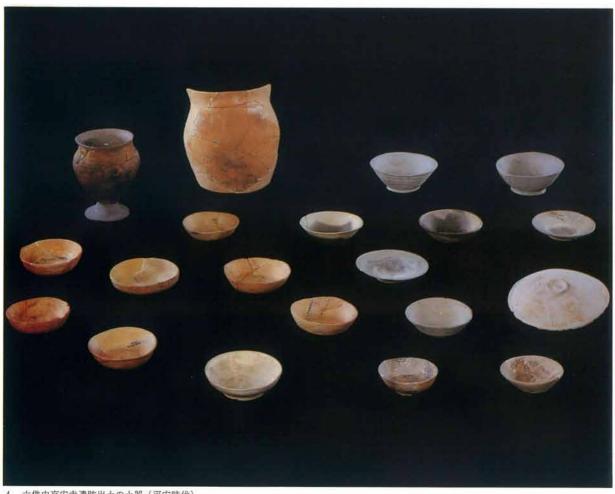
1. 六供中京安寺遺跡 B 区全景 (西から)



2. 六供中京安寺遺跡出土の土器 (古墳時代前期)



3. 六供中京安寺遺跡M-1号墳出土遺物



4. 六供中京安寺遺跡出土の土器(平安時代)

前橋台地に広がる穀倉地帯。そんな表現がピッタリの前橋南部地帯。ここにも例外なく都市化の波が押し寄せ、豊かな穀倉地帯がコンクリートジャングルに変わろうとしています。古代も現代も水が得やすく平坦な土地は水田に利用され、昔から稲穂が波をうっていました。人々は僅かな高地に住居を、低地には水田と区分けをし、現在まで生活が継続されてきました。そんな地域で昨年度に引き続き前橋都市計画事業六供土地区画整理事業が行われることになりました。区画整理に先立って発掘調査が行われ、多数の遺構の発見がなされました。

付近には中京安寺、南京安寺、中大門、市之坪の地名も見え、寺院跡や条里制が施行されたとみられる遺跡が推定され、昨年度に引き続き発掘調査の成果に期待を持って行いました。

発掘調査の結果は住居跡15軒、古墳・周溝墓3基、水田跡18枚、溝跡16条、土坑13基、井戸跡5基と 古墳時代前期から近世まで多様な遺跡が確認されました。特に住居跡は4世紀代のものと、周溝墓との 関係が考えられます。

7世紀前半の古墳に直接結びつく住居は発見されませんでしたが、調査により同時代の遺物が発見されており、付近に集落があることが推定されます。また、平安時代中期の住居跡や平安時代末期の水田跡と直接結びつくものの発見はなされていませんが、市之坪の地名と条里制との関連が考える資料の一つになろうと思います。

溝、土坑、井戸等に関しましては多くは性格がハッキリしませんが、中・近世までと時代幅も大きく、 これからの課題となると思います。

ご一読いただきまして、ご指導、ご助言をいただければ幸いです。

平成10年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団 長 中 西 誠 一

- 1. 本書は、前橋都市計画事業六供土地区画整理事業に伴う六供中京安寺(ろっくなかきょうあんじ)遺跡並び に六供下堂木(ろっくしもどうぎ)Ⅲ遺跡発掘調査報告書である。
- 2. 遺跡は、群馬県前橋市六供町936-3番地ほかに所在する。
- 3. 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 中西誠一が、前橋市長 萩原弥惣治と委託契約を締結し実施した。

調査担当および調査期間は以下の通りである。

発 掘 · 整 理 担 当 者 井野誠一(前橋市埋蔵文化財発掘調査団 発掘調査係)

吉田聖二 (同上)

林 信也(

同 上)

発 掘 調 査 期 間 平成9年5月20日 \sim 平成9年12月22日

整理·報告書作成期間 平成9年12月23日~平成10年3月25日

- 4. 本書の原稿執筆・編集は吉田・林が行った。整理作業をはじめ図版作成には、大島きく江・小池智美・鈴木 民江・高橋公代・多田啓子・塚本富江・中林美智子・堀込とよ江・森田純子・綿貫綾子・栗岡エミ子・大塚 美智子・松田富美子・戸丸澄江・鬼塚成子・柴崎まさ子・生形かほる・赤城美代子・佐野貴恵子・舩津明美・ 岩田敏子の協力があった。
- 5. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財 保護課で保管している。

凡

- 1. 挿図中に使用した北は座標北である。
- 2. 挿図に建設省国土地理院発行の1/20万地形図(長野・宇都宮)と1/2.5万地形図(前橋)を使用した。
- 3. 本遺跡の略称は9H26並びに9H27である。
- 4. 各遺構及び遺構施設の略称は次のとおりである。

M…古墳 C…周溝墓 H…古墳・奈良・平安時代の住居址

D…土坑 W…溝址 P…柱穴(ピット) O…落ち込み

5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構 住居址·土坑…1/60 竈断面図…1/30 溝址…1/120 全体図…1/400

6. スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構断面図 構築面…斜線

遺物実測図 施釉範囲…あられ、黒色処理…網、炭化物(スス付着など)…斑

須恵器断面…黒塗り、灰釉陶器断面…濃点、擦痕…淡色

目

	序	•••••		i
Ι	調査に至る	経 緯		1
Ш,	遺跡の位置と	環境		
	1	遺跡の立地		1
	2	歴 史 的 環 境		3
	3			
Ш	調査の経	圣 過		
	1	調查方針		5
	2	調査経過		5
IV	六供中京安寺	遺跡		
	1	遺構と遺物		
		(1) 住 居 址		10
		(3) 古 墳	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	11
		(5) 井 戸 址		12
		(6) 溝 址		13
		(7) 落ち込み址		14
	2	成果と問題点		15
	3	付 編		20
V	六供下堂木Ⅲ	遺跡		
	. 1	遺構と遺物		
		(1) 住 居 址		42
		(2) 土 坑		42
		(3) 溝 址		43
		(4) 水 田 址		43
	2 .	成果と問題点		44
	9	4 炉		40

図 版

- 口絵 1 六供中京安寺遺跡 B 区全景(西から)
 - 2 六供中京安寺遺跡出土の土器(古墳時代前期)
 - 3 六供中京安寺遺跡M-1号墳出土遺物
 - 4 六供中京安寺遺跡出土の土器(平安時代)
- PL. 1 六供中京安寺遺跡A·B区全景
 - 2 C-1·2号周溝墓
 - 3 M-1号墳
 - 4 H-1・3・4・6・7号住居址
 - 5 H-8~10号住居址
 - 6 $H-11 \cdot 12$, $D-1 \cdot 3 \cdot 5$, $I-3 \cdot 5$
 - 7 W-2~5·10·11·14号溝址
 - 8 H-3・6・7号住居址出土の土器
 - 9 H-7・8・10, D-1・3, W-12, M-1出土の土器
 - 10 M-1, C-1・2, O-1, グリッド出土の土器
 - 11 グリッド、表採の土器・石器、M-1出土の石製品
 - 12 石器・縄文土器

PΤ	13	去供下骨	木 m 清跡 Δ	 B区全長

- 14 H-1・2号住居址
- 15 H-3号住居址, W-2号溝址
- 16 D-1~4号土坑,W-1~4号溝址
- 17 A区水田址他
- 18 六供下堂木Ⅲ遺跡出土の土器

挿 図

			頁				頁
Fig.	1	遺跡の位置	\mathbf{v}	Fig.	16	H-3・6・7号住居址出土の土器	32
	2	位置図と周辺遺跡図	2		17	$H - 7 \cdot 8 \cdot 10 \cdot 12, W - 3 \cdot 12 \cdot 14,$	
	3	標準土層図	4			D-1・3, M-1出土の土器	33
	4	調査区設定図	6		18	M-1, C-1·2, O-1, グリッド出土の土器 …	34
	5	六供中京安寺遺跡A · B区全体図 ············	8		19	グリッド出土の土器	35
	6	M-1号墳遺物分布図 ······	16		20	グリッド等出土の土器	36
	7	H-1 · 3 号住居址 ······	23		21	縄文土器・石器	37
	8	H-4・6・7・10号住居址	24		22	石器・石製品	38
	9	H-8・9・11・12号住居址	25		23	石器・石製品	39
	10	C-1・2号周溝墓	26		24	六供下堂木Ⅲ遺跡A区全体図 ······	40
	11	M-1号墳,D-1~9·11号土坑 ···········	27		25	六供下堂木Ⅲ遺跡B区全体図 ·····	41
	12	$I-1\sim5$ 井戸址, $O-1\cdot2$ 落ち込み址	28		26	水田址(1)	58
	13	W-2~5·7号溝址 ······	29		27	水田址(2)	59
	14	₩-1・8~10号溝址	30		28	水田址(3)	60
	15	W-11~14号溝址 ·····	31		29	$H-1\sim3$ 号住居址, $D-1\sim4$ 号土坑	61
					30	₩-1~4号溝址	62
					31	六供下堂木Ⅲ遺跡出土の土器	63
-							
表							
			頁				頁
Tab.	1	六供中京安寺遺跡土器観察表	18	Tab.	4	六供下堂木Ⅲ遺跡土器観察表	47
	2	縄文土器観察表	19		5	水田址計測表	48

3 石器·石製品観察表 ······· 19 6 畦畔計測表 ······ 48

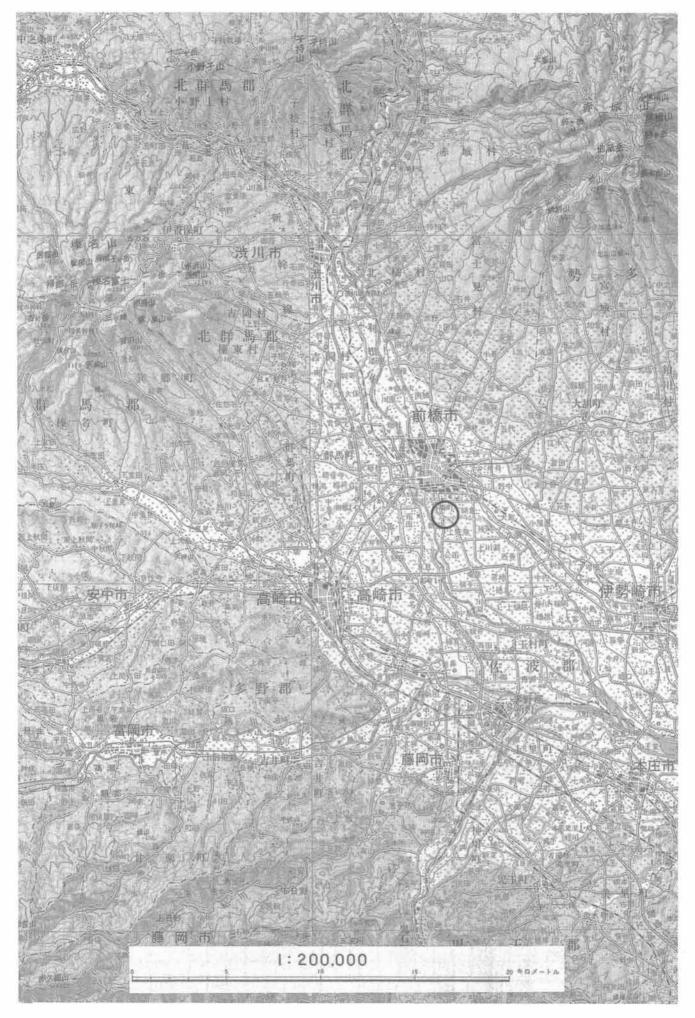


Fig. 1 遺跡の位置

Ⅰ 調査に至る経緯

本書に記載する発掘調査は、いずれも前橋都市計画事業六供土地区画整理事業に伴い実施したものである。

1 六供中京安寺遺跡

平成8年12月25日、前橋市区画整理第一課と同市教育委員会文化財保護課により本調査地での土木工事実施について協議がなされた。これを受け、9年3月6日同文化財保護課で試掘調査を実施したところ、本調査地は遺跡地であることが判明した。そこで、3月7日の協議を経て、5月20日前橋市長 萩原 弥惣治と同市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 中西 誠一との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結の運びとなり、5月29日に現地での発掘調査を開始するに至った。また、7月18日同区画整理第一課より、調査対象面積の増加に伴う契約変更について協議があり、8月18日に道路を挟んだ調査区の西側部分4,300㎡を加えた変更契約を締結した。これにより、調査区の総面積は6,800㎡となり、当初の調査区をA区、追加調査区をB区と呼称することとした。なお、遺跡名称「六供中京安寺遺跡(遺跡略称9H26)」の「中京安寺」は旧地籍の小字名を採用している。

2 六供下堂木Ⅲ遺跡

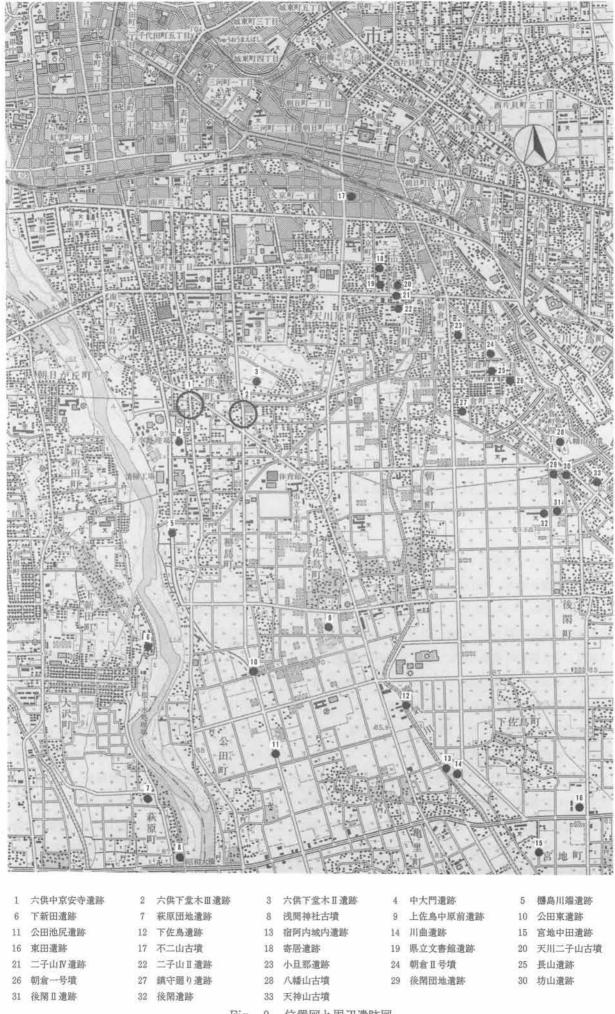
平成9年6月20日、前橋市区画整理第一課より本調査地における埋蔵文化財確認調査依頼が同市教育委員会へ提出された。これを受け、6月27・30日に同教育委員会文化財保護課で試掘調査を実施したところ、本調査地の道路を挟んだ東側部分は遺跡地であること、また西側部分は遺跡地である可能性が極めて高いことが判明した。そこで、10月24日の協議により、先に前橋市長 萩原 弥惣治と前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 中西 誠一との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した「六供中京安寺遺跡」発掘調査に調査区の面積増加という形で本調査地1,700㎡を加え、10月31日変更契約を締結する運びとなった。そして、「六供中京安寺遺跡」発掘調査終了後の11月6日に現地での調査を開始するに至った。なお、遺跡名称は平成8年度に実施した「六供下堂木Ⅱ遺跡」にならい旧地籍の小字名を用い「六供下堂木Ⅲ遺跡(遺跡略称9H27)」とし、各調査区をA、B区と呼称することとした。

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

六供中京安寺遺跡並びに六供下堂木Ⅲ遺跡は前橋市街地の南方にあり、JR前橋駅の南約1.5~2kmに位置する。遺跡地の地番は前橋市六供町936-3番地(六供中京安寺遺跡)、同840-3番地(六供下堂木Ⅲ遺跡)ほかである。両遺跡の所在する六供町周辺には、利根川左岸に橳島町、上佐鳥町、公田町、朝倉町、後閑町、南町などの町々が点在している。また遺跡地の周囲には、前橋・玉村線をはじめ主要な幹線道が縦横に走っている。これらの幹線に沿って市街化・開発が進み、前橋市立工科大学、前橋市六供清掃工場、下水処理場などの施設や住宅街が遺跡地を取り巻くように立ち並んでいる。しかし、ところどころに水田・畑作地も点在している。

遺跡地の立地は、前橋市の南部及び西部を北東から南東に広がる前橋台地の東方、利根川左岸に位置する標高約96~97mの平坦な土地である。前橋台地は、火山泥流堆積物とそれを被覆する水性ローム層から成り立つ洪積台地で、東は広瀬川低地帯と直線的な崖で画され、西は榛名山東南麓に広がる相馬ケ原扇状地へと続いている。なお、遺跡地のすぐ西側を流れる利根川は広瀬川低地帯を流れていたと考えられており、現在の位置に変流したのは中世末期とされている。



- 4 中大門遺跡
- 9 上佐鳥中原前遺跡 10 公田東遺跡
- 14 川曲遺跡
- 19 県立文書館遺跡 20 天川二子 24 朝倉Ⅱ号墳 25 長山遺跡 29 後閑団地遺跡 30 坊山遺跡
- 5 棚島川端遺跡
- 15 宮地中田遺跡
 - 20 天川二子山古墳
 - 25 長山遺跡

Fig. 2 位置図と周辺遺跡図

2 歴史的環境

今回の調査によって、検出された主な遺構は古墳時代から中・近世にかけてであるが、遺跡地の出土遺物のなかには縄文時代の遺物もわずかではあるが検出されているので、ここでは本遺跡地周辺の歴史的環境を縄文時代から順に概観していくこととする。

棚島川端遺跡では上部ローム層に被覆された泥流丘上(赤城山起源の流れ山の一つが前橋泥流によって運ばれたものとみられる。)で縄文時代草創期後半の「撚糸文式土器」が2点発見され、本地域の歴史を一挙に数千年さかのぼらせた。このことはこの時期すでにこの地域が生活の舞台となっていたことを示している。また、同遺跡で弥生時代後期前半の集落と中期後半の再葬墓一か所が発見された。住居は炉址や柱穴などが明確に残っているものは2軒のみであり、再葬墓はほぼ完形の甕に胴下半の一部をかぶせた状態で出土していた。いずれも縄文系の土器を使用している。また、後閑町の広瀬団地付近で宅地造成中に「樽式土器」の甕棺が出土している。さらに、隣接する高崎市においては、日高遺跡、新保遺跡、大八木水田遺跡、中尾村前遺跡、新保田中遺跡、西島遺跡群、西横手遺跡等からAs-C軽石(浅間山起源:4世紀中葉)下の弥生時代水田址が検出されている。

古墳時代に入ると、市内でも有数の古墳地帯を見ることができる。広瀬川右岸の低い崖上には、旧市域から旧上陽村の東善にかけて、約5.5kmにわたり、幅約70mの帯状に連なる古墳群が存在した。昭和10年の県下一斉調査では、前橋市15基、旧上川淵村113基、隣接する旧上陽村41基を数えた。しかし、戦前、戦中、戦後の開墾や昭和30年以降顕著になった宅地造成事業等により、大半は未調査のまま削平されてしまった。現在、八幡山古墳(国指定史跡、4世紀後半、前方後方墳、全長約130m)、天神山古墳(県指定史跡、4世紀後半、前方後円墳、全長約129m)、亀塚山古墳(市指定史跡、6世紀前半、帆立貝式古墳、推定全長約60m)、金冠塚古墳(市指定史跡、7世紀前半、前方後円墳、全長52.5m、宝珠型の金銅製の冠が出土)、経塚古墳(市指定史跡、7世紀、円墳、現状径25m)等に当時の古墳群の片鱗を窺うことができる。これらの古墳群が形成された背景には、有力な豪族とそれを支えた人々の存在が想起され、当地域が古墳時代の初期から継続的な発展をしていたことは明らかである。

また、住居址関連遺跡では古墳時代前期(石田川期)の後閑団地遺跡、六供下堂木Ⅱ遺跡、古墳時代後期(鬼高期)の後閑Ⅱ遺跡、坊山遺跡、川曲遺跡、下新田遺跡などが挙げられる。さらに、水田址関連のものとしてはHr-FA(榛名二ツ岳火山灰:6世紀初頭)下の水田が、橳島川端遺跡、公田池尻遺跡、公田東遺跡、六供下堂木Ⅱ遺跡などで確認されている。これらの水田はいずれも地形の傾斜に沿った小区画のものである。

奈良・平安時代の遺跡については、後閑団地遺跡、後閑Ⅱ遺跡で奈良・平安の住居址や掘立柱建物遺構が検出されているほか、最新の調査成果としては、本遺跡に最も近い六供下堂木Ⅱ遺跡においても、奈良~平安期の住居址数軒の検出が報告されている。水田址については、まず利根川西岸に目を向けると、五反田Ⅱ遺跡(箱田町)や柳橋遺跡(川曲町)でAs-B軽石(浅間山起源:1108年)下から条里制に起因する一定の規則性をもつとみられる平安時代末期の水田が検出されている。一方、利根川東岸においても、中大門遺跡(六供町)や後閑Ⅱ遺跡(後閑町)を先駆けとして、条里制の面影を残す水田址を検出する遺跡が相次いでいる。昨年度から今年度にかけて行われた宮地中田遺跡(宮地町)、六供下堂木Ⅱ遺跡(六供町)、上佐鳥中原前遺跡(上佐鳥町)などの最新の周辺遺跡調査もその一部である。中でも宮地中田遺跡では、As-B下より平安時代後期の水田址92枚が検出された。ここで特筆すべきは、東西に3本、南北に1本検出された坪境畦畔によって、方格に区画(8の坪)された条里制水田址であることが確認されたという点である。このことは、今まで条里制水田址の中心であった高崎東部・北部から利根川を挟み前橋南部にまで律令制(条里制)による土地制度がより広範囲に及んでいたことを示すものにほかならない。

本遺跡の所在する前橋台地周辺は、1970年代から1980年代にかけて上越新幹線や関越自動車道の建設に伴い、 高崎市域を中心に大規模な古代水田の発掘が盛んに行われてきた地域である。特に利根川以西の前橋台地上においては、元総社を中心とした上野国府域に接していることもあり、条里水田の復元を目標にした平安時代水田址 の調査が活発に行われてきた。本遺跡も隣接する南町に市之坪、一町田という地名が残り、南の公田町には三公田という地名が残っており、周辺には律令制(条里制)にかかわる水田址が存在する可能性を示唆している。先に述べたとおり、現に最寄りの六供下堂木田遺跡では、畦畔の走行性等に条里的地割の可能性をもつ平安期の水田址が確認されている。そして今後も調査例の増加が予想される前橋台地上のAs-B下水田址の分析とともに各地域にも目を向け、818年(弘仁元年)の地震に伴う洪水に埋没した水田址等、本地区の条里制が明らかになるような発掘調査による成果が期待される。

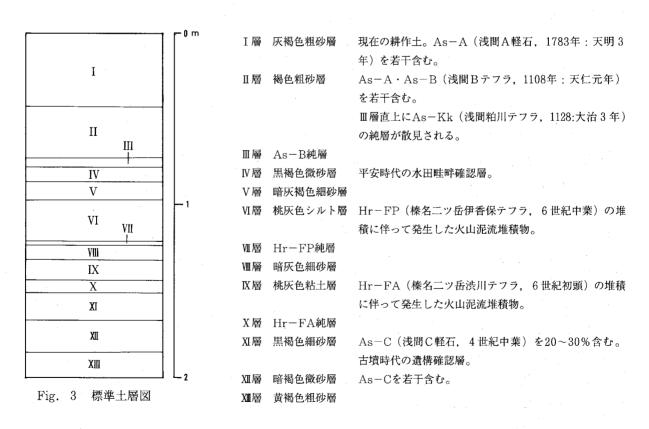
最後に、本遺跡地の所在する六供町における寺院に係る遺跡存在の可能性についてふれておきたい。同町には、その小字名に中京安寺、南京安寺、東京安寺、北大門、中大門、下堂木など、寺院に係る名称が残されており、かつて「京安寺」と呼ばれる寺院が存在していたことを窺わせる。今後の発掘調査の進展による究明が待たれるところである。

3 層 序

六供中京安寺遺跡並びに六供下堂木Ⅲ遺跡は、前橋台地のほぼ中央部に位置している。前橋台地は洪積台地で、約2万4千年前に形成された厚さ10m程の前橋泥流層と1万3千年前の泥炭層を挟んだ水性上部ローム層により形成されている。その後、榛名山二ッ岳や浅間山等の火山活動によるテフラや、それに伴う泥流堆積物の堆積を経て現在に至っている。

両遺跡の土層は、地形差によりテフラ等の堆積状況に若干の違いがあるが、代表的な層序として六供中京安寺 遺跡B区北壁中央地点を標準土層とした。

遺構は、成層する浅間Bテフラ直下から水田址をはじめとする遺構が、浅間C軽石を含む黒褐色土層から古墳 時代の遺構が検出された。



Ⅲ 調査の経過

1 調査方針

委託された調査箇所は六供中京安寺遺跡が幅30mの計画道路部分を中心とした6,800㎡、六供下堂木皿遺跡が幅6mの計画道路部分を中心とした1,700㎡である。調査範囲の形状から各遺跡をA・B区の2調査区(計4調査区)に区分した。

グリッドについては、4 mピッチで西から東へ $X 1 \text{ } X 2 \text{ } X 3 \cdots$ と、北から南へ $Y 1 \text{ } Y 2 \text{ } Y 3 \cdots$ と付番し、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。

六供中京安寺遺跡のX45・Y8の公共座標は、

第IX系 +40848.0m (X)

-67840.0 (Y)

緯度

36°21′56″.9098

経度

139°04′38″.1294

子午線収差角 26′54″.0

増大率

0.999957

六供下堂木Ⅲ遺跡のX43·Y24の公共座標は、

第IX系 +40904.0m (X)

-67528.0 (Y)

緯度

36° 21′ 58″.8058

経度

139° 04′ 50″.6289

子午線収差角 26′46″.6

増大率

0.999956 である。

調査方法については、各遺跡ともA区から表土掘削・遺構確認・杭打設・遺構掘下・遺構精査・測量・全景写 真撮影の手順で行うこととした。

図面作成は、平板・簡易遣り方測量を用い、水田址は1/40、住居址は1/20、住居址竃は1/10の縮尺で作成した。遺構の遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録を記載しながら収納した。包含層の遺物はグリッド単位で収納したが、重要遺物については分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。また、プラン確認の段階で1/100の現況図を作成し、その後の調査に活用した。

2 調査経過

5月29日より、六供中京安寺遺跡A区の調査に着手した。まず重機(バックフォー0.7㎡)による表土掘削を行いプラン確認を試みた。しかし、掘削面にはAs-C(浅間C軽石:4世紀中葉)を含む黒色土が一様に広がり、遺構の確認は困難を極めた。そこで区内に4本のテストトレンチを設定することとし、6月中は区西端部に集中して出土した石田川式土器(古墳時代前期)等の遺物をとりあげつつ、重機及び人力による遺構確認作業を継続した。その結果、区西寄りの遺物包含層下より周溝墓をはじめ、住居址、土坑、溝址等が確認された。うち周溝墓は、後世の削平により大部分を破壊されており周溝の底部をわずかに残すのみであったが、その後の精査により西側にブリッジ状の部分が認められるに至った。一方、区東寄りからは、覆土にAs-B(浅間Bテフラ:1108年)を含む溝址が検出された。溝は、6月の段階では2条が確認されているが、7月に入っての調査で5条であることが判明した。東西、南北へ走り、途中でほぼ直角に曲がっている。切り合い状態や出土遺物から年代差があることも分かった。うち最も大きな溝は幅約2mを有し、内耳鍋の破片等が出土した。調査はちょうど梅雨時期にさしかかり、度々の降雨と湧水に悩まされ滞りがちであったが、梅雨明けとともに遅れを取り戻し8月7日には終了の運びとなった。

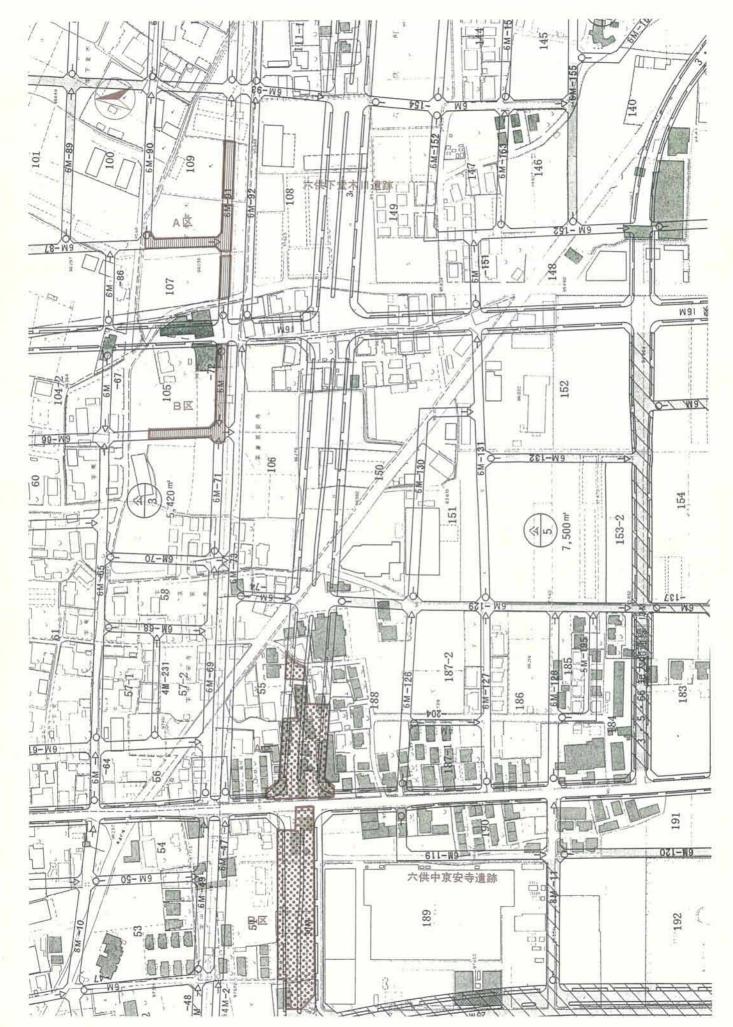


Fig. 4 六供中京安寺遺跡·六供下堂木Ⅲ遺跡調査区設定図

8月18日、調査面積増加に伴う変更契約の締結後、翌19日より同遺跡B区の表土掘削を開始した。プラン確認もA区からみると円滑に進み、区中央から東端部にかけて古墳、住居址をはじめ、土坑、溝址等多数の遺構が確認された。うち古墳は墳丘部がすでに無く、また周堀も一部を残すのみであったが、精査の結果、南側の堀底部から古墳時代後期の土器、勾玉が検出された。さらに10月初旬からの2回目の表土掘削により、区南西寄り傾斜地に周溝墓が確認された。A区の周溝墓同様、台状部等はすでに無く周溝のみが認められるにとどまった。北側の周溝覆土からは石田川式土器が検出された。9~10月は天候にも恵まれ、当初の予定どおり10月17日には同区における調査を終了した。

六供下堂木Ⅲ遺跡A・B区の調査を開始したのは、面積増加に伴う第2回変更契約締結後の11月6日であった。中旬には両区の表土掘削、プラン確認をひととおり済ませ、19日にはA区の遺構精査に着手した。掘削の結果、As-B直下から、残存状態が比較的良好な畦畔が全域にわたり東西に4本、南北に9本検出された。水田の検出は16枚であった。その後の測量等も順調にはかどり、11月27日には同区の調査を完了した。

翌28日からは同遺跡B区の遺構掘下・精査に着手した。同区東部にはAs-Bの純層は認められず、黒褐色土層に埋没して区東寄りに住居址、溝址などが、南側に溝址、土坑等が確認された。寒さが厳しくなる中、幾度か霜の被害を受け遺構の保護に気を配りつつの調査となったが、12月22日には委託業者による地質調査を以て無事現地におけるすべての調査を終了することができた。

その後、年明けの1月6日より遺物・図面・写真等の整理作業を行い、3月25日すべての作業を完了する運びとなった。

N 六供中京安寺遺跡



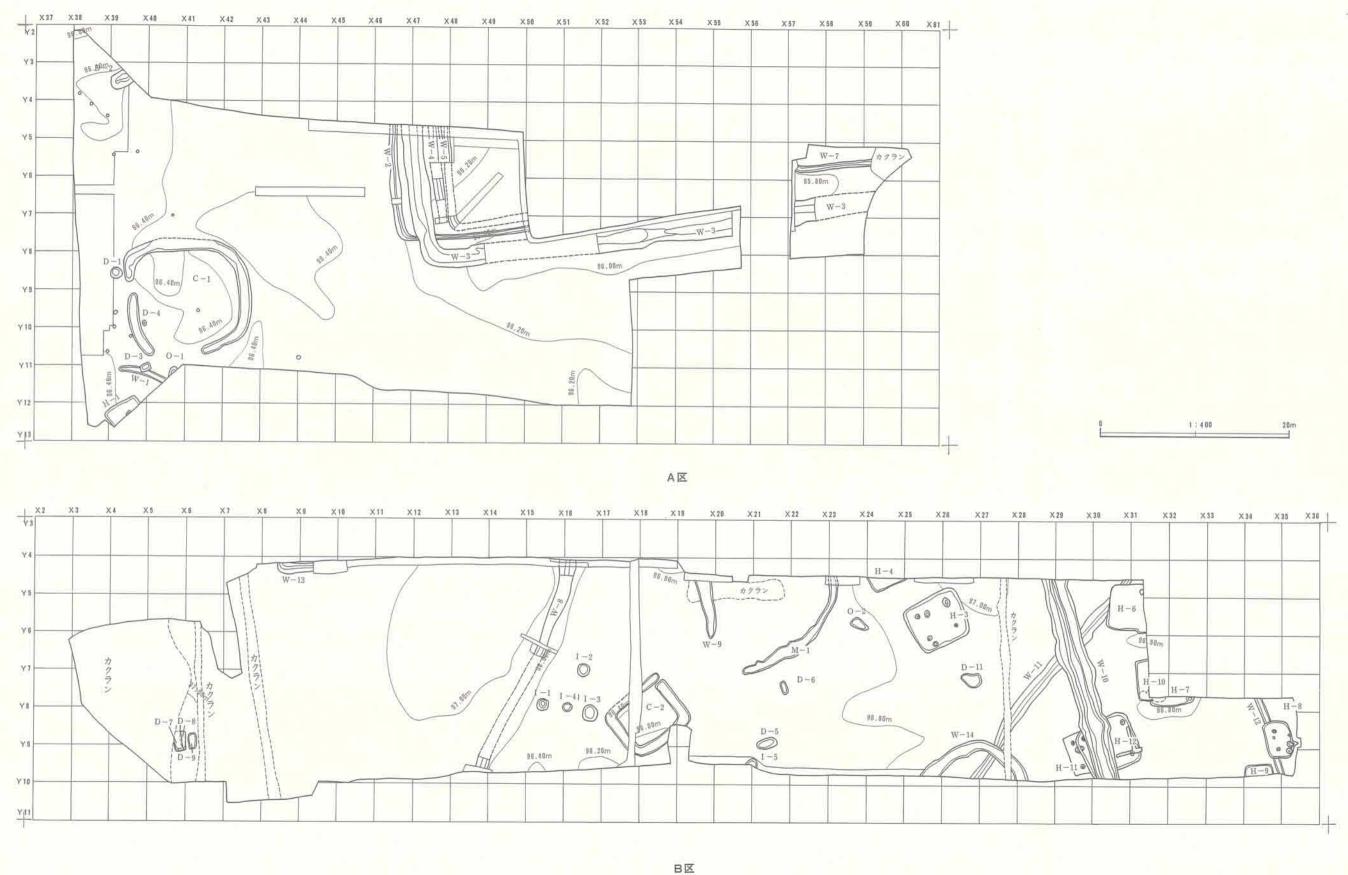


Fig. 5 六供中京安寺遺跡A(上)·B(下)区全体図

1 遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は、古墳(古墳時代終末期)1基、周溝墓(古墳時代前期)2基、竪穴住居址10軒 (古墳時代前期5軒、平安時代5軒)、溝址14条、土坑10基、落ち込み2基、井戸址5基等である。

縄文時代の土器片や石器も数点出土したが、住居址等の遺構は検出されなかった。

調査地は住宅密集地にあり、後世の開発による攪乱のため遺構確認は困難をきわめた。特にA区は、かつて宅地として使用されてきた場所のため、表土掘削での遺物の出土状況から多数の住居址を想定したが、最終的に住居址として確認できたものは1軒のみであった。B区でも調査区西側部分は開発による攪乱を受けていたが、畑作地や空き地であった部分もあり、少なからぬ遺構を検出できたことは幸いであった。以下は、各遺構の概要である。

(※H-2・5号住居址、W-6号溝址は最終的に遺構として確認できず欠番)

(1) 住 居 址

H-1号住居址(A区、Fig. 7、PL. 4)

位置 X38~39・Y11~12グリッド **面積** [5.29] m² 方位 N-35°-W 形状 住居の大部分が調査区外のため不明。北端部のみ検出。東西3.65m、南北 [2.14] m、壁現高33cm。 床面 ほぼ平坦な床面。堅緻面は認められず。 炉址 地床炉を検出。 遺物 総数169点。 備考 覆土や出土遺物から本住居址は4世紀中葉~後半と考えられる。

H-2号住居址 欠番

H-3号住居址(B区、Fig. 7·16、PL. 4·8)

位置 X24~26・Y4~6グリッド **面積** 31.27㎡ **方位** N-64°-E **形状** 方形。東西5.45m、南北6.26mを測る。壁現高16㎝。 **床面** ほぼ平坦で堅緻な床面。柱穴 6 基を検出。 **炉址** 検出されず。 **遺物** 総数 90点。うち土器 1 点を図示した。 **備考** 覆土や出土遺物から本住居址は 4 世紀後半と考えられる。

H-4号住居址(B区、Fig. 8、PL. 4)

位置 X24~25・Y4グリッド 面積 [3.40] ㎡ 方位 N-19°-W 形状 住居の大部分が調査区外のため不明。南西部のみ検出。東西3.77m、南北[1.75] m、壁現高 3 cm。 床面 ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。 炉址 検出されず。 遺物 総数11点。 備考 覆土や出土遺物から本住居址は4世紀後半と考えられる。

H-5号住居址 欠番

H-6号住居址(B区、Fig. 8·16、PL. 4·8)

位置 X4~5・Y30~31グリッド 面積 [17.76] ㎡ 方位 N-89°-E 形状 住居の東側が調査区外のため不明。東西 [4.04] m、南北4.90 m、壁現高22cm。 電 東壁南寄り袖部のみ検出。 遺物 総数323点。うち土器4点を図示した。 備考 覆土や出土遺物から本住居址は9世紀中葉と考えられる。

H-7号住居址 (B区、Fig. 8·16·17、PL. 4·8·9)

位置 X31~32・Y7グリッド 面積 [3.49] ㎡ 方位 N-5°-W 形状 住居の北側が調査区外のため不明。東西4.68m、南北 [0.91] m、壁現高23㎝。 床面 平坦な床面。貯蔵穴を検出。 竈 検出されず。 遺物 総数723点。うち土器20点を図示した。 備考 覆土や出土遺物及び重複関係から本住居址は9世紀後半~10世紀前半と考えられる。

H-8号住居址(B区、Fig. 9·17、PL. 5·9)

位置 X34~35・Y8・9 グリッド 面積 10.42㎡ 方位 N-77°-E 形状 長方形。東西2.84m、南北 4.10m、壁現高19㎝。 床面 ほぼ平坦な床面。5 個の柱穴を検出。うち1 個は貯蔵穴である。 電 東壁南寄

りに設置。全長113cm、焚口部幅47cmを測る。 遺物 総数947点。うち土器 3 点を図示した。 備考 覆土や出 土遺物から本住居址は11世紀前半と考えられる。

H-9号住居址(B区、Fig. 9、PL. 5)

位置 X34・Y9グリッド 面積 [3.21] m² 方位 N-3°-W 形状 住居の南側が調査区外のため不明。東西3.03m、南北 [1.11] m、壁現高14cmを測る。 床面 ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。 電 検出されず。 遺物 総数117点。 備考 覆土や出土遺物から本住居址は9世紀後半~10世紀前半と考えられる。

H-10号住居址 (B区、Fig. 8・17、PL. 5・9)

位置 X31・Y6~7グリッド 面積 [5.85] ㎡ 方位 N-85°-E 形状 住居の東側が調査区外のため不明。東西 [1.58] m、南北4.49 m。 電 検出されず。 遺物 総数565点。うち4点を図示した。 備考 覆土や出土遺物から本住居址は10世紀後半と考えられる。

H-11号住居址(B区、Fig. 9、PL. 6)

位置 X29~30・Y8~9グリッド 面積 [11.27] ㎡ 方位 N-70°-E 形状 住居の東側が新しい遺構に壊されているため不明。東西 [2.78] m、南北4.79m、壁現高7.5cmを測る。 床面 堅緻な床面。2個の柱穴を検出。 炉址 地床炉を検出。 重複 H-12、W-10と重複しており本遺構が最も古い。 遺物 総数49点。 備考 覆土や出土遺物から本住居址は4世紀中葉~4世紀後半と考えられる。

H-12号住居址(B区、Fig. 9·17、PL. 6)

位置 X29~30・Y8~9 グリッド **面積** [31.64] m³ **方位** N-64°-E **形状** 方形。東西6.00m、南北5.78m、壁現高 7 cmを測る。 **床面** ほぼ平坦で堅緻な床面。3 個の柱穴を検出。

炉址 検出されず。 **重複** H−11、W−10と重複しており、本遺構はH−11より新しくW−10より古い。 **遺物** 総数105点。うち土器 1 点を図示した。 **備考** 覆土や出土遺物から本住居址は 4 世紀中葉~ 4 世紀後半と考えられる。

(2) 周 溝 墓

C-1号周溝墓(A区、Fig. 10·18、PL. 2·10)

位置 X39~42・Y7~10グリッド 形状 長軸を東西にもち、ほぼ方形を呈する。 規模 台部;長径10.97 ×短径10.17m。全形;長径13.34×短径12.08m。 方位 N-89°-E **周溝** 断面は緩やかなU字形を呈し、 上幅0.71~1.58m、下幅0.42~0.98m、深さ1~15cmを測る。周溝の南側と西側の残存状態は悪く断言はできないが、西側南寄りで周溝が途切れておりブリッジの可能性がある。 主体部 後世の削平を受けており検出されず。 遺物 総数421点。うち土器 2 点を図示した。 備考 覆土や出土遺物から 4 世紀中葉と考えられる。

C-2号周溝墓(B区、Fig. 10·18、PL. 2·10)

位置 $X17\sim19\cdot Y7\sim9$ グリッド 形状 長軸を東西にもち、長方形を呈する。 規模 台部;長径5.46×短径4.63m。全形;長径7.78×短径6.56m。 方位 $N-52^\circ-E$ 周溝 断面は緩やかなU字形を呈し、上幅0.54 $\sim1.38\,\mathrm{m}$ 、下幅 $0.39\sim0.98\,\mathrm{m}$ 、深さ $2\sim23\,\mathrm{cm}$ を測る。 主体部 後世の削平を受けており検出されず。 遺物 総数83点。うち土器 1点を図示した。 備考 覆土や出土遺物から 4 世紀後半と考えられる。

(3) 古 墳

M−1号墳(B区、Fig. 6 · 11 · 17 · 18、PL. 3 · 9 ~ 11)

位置 $X20\sim23\cdot Y4\sim7$ グリッド 墳丘 耕作による削平を受け、盛土は現存しない。また古墳の南側半分ほどは調査区外で古墳の全体を確かめる術はないが、一部残存する周堀の形状等から円墳と思われる。墳丘規模は推定で約18m。周堀を含めた総長は推定で約21mである。 周堀 古墳の南東側約4分の1程度を検出。残存するのは底部のみで、上幅 $0.57\sim1.67$ m、下幅 $0.10\sim0.88$ m、深さ $6\sim20$ cmを測る。 主体部 削平を受けてお

り現存せず。 遺物 南側の周堀底部から、祭祀に使われた可能性のある7世紀前半代の須恵器などが出土した。 総数166点。うち土器16点を図示した。 備考 出土遺物や周堀の覆土等から年代は7世紀前半と考えられる。

(4) 土 坑

D-1号土坑(A区、Fig. 11·17、PL. 6·9)

位置 X39・Y8グリッド 形状等 長径136cm、短径125cmの楕円形。深さは70cmを測る。 遺物 総数122 点。うち土器2点を図示した。 備考 覆土や出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

D-2号土坑 (A区、Fig. 11)

位置 X39・Y3グリッド 形状等 東側が調査区外のため形状は不明。長径 [212] cm、短径157cm、深さ63 cmを測る。 遺物 総数171点。 備考 As-C純層が入るため4世紀代と考えられる。

D-3号土坑 (A区、Fig. 11·17、PL. 6·9)

位置 X39~40・Y10~11グリッド **形状等** 長径101cm、短径63cmの長方形。深さ36cmを測る。 **遺物** 総数103点。うち土器1点を図示した。 **備考** 覆土や出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

D-4号土坑(A区、Fig. 11)

位置 X39・Y9グリッド 形状等 長径58cm、短径52cmの円形。深さは20cmを測る。 遺物 総数3点。 備考 覆土や出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

D-5号土坑(B区、Fig. 11、PL. 6)

位置 X21・Y8~9グリッド 形状等 長径210cm、短径106cmの楕円形。深さは32cmを測る。 **遺物** 総数13点。 **備考** 覆土や出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

D-6号土坑(B区、Fig. 11)

位置 X21・Y7グリッド 形状等 長径138cm、短径60cmの長方形。深さは17cmを測る。 遺物 総数3点。 備考 覆土や出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

D-7号土坑(B区、Fig. 11)

位置 X5・Y8~9グリッド 形状等 長径308cm、短径76cmの長方形。深さは10cmを測る。 遺物 なし。 備考 層位からAs-B降下以降と考えられる。

D-8号土坑(B区、Fig. 11)

位置 $X5\sim6\cdot Y8\sim9$ グリッド 形状等 長径216cm、短径116cmの長方形。深さは4cmを測る。 遺物なし。 備考 層位からAs-B降下以降と考えられる。

D-9号土坑(B区、Fig. 11)

位置 X6・Y8~9グリッド 形状等 長径173cm、短径86cmの長方形。深さは9cmを測る。 遺物 なし。 備考 層位からAs-B降下以降と考えられる。

D-10号土坑 欠番

D-11号土坑(B区、Fig. 11)

位置 X25~26・Y7グリッド 形状等 長径227cm、短径160cmの不整形。深さは17cmを測る。 **遺物** 総数 129点。 **備考** 覆土や出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

(5) 井 戸 址

Ⅰ - 1 号井戸址(B区、Fig. 12)

位置 X15・Y7~8グリッド 形状等 長径125cm、短径118cmの円形。深さは124cmを測る。

I **- 2** 号井戸址 (B区、Fig. 12)

位置 X16・Y6~7グリッド 形状等 長径134cm、短径126cmの円形。深さは178cmを測る。

I-3号井戸址(B区、Fig. 12、PL. 6)

位置 X16・Y7~8グリッド 形状等 長径173cm、短径165cmの円形。深さは143cmを測る。

1-4号井戸址(B区、Fig. 12)

位置 X15~16・Y7~8グリッド 形状等 長径94cm、短径86cmの円形。深さは171cmを測る。

Ⅰ-**5**号井戸址(B区、Fig. 12、PL. 6)

位置 X20~21·Y9グリッド **形状等** 長径111cm、短径 (68) cm、深さ111cmを測る。形状は南側が調査区外のため不明。 **備考** 覆土や出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

(6) 溝 址

W-1号溝址(A区、Fig. 14)

位置 $X38\sim40\cdot Y10\sim11$ グリッド 形状等 A区西端部の南側に位置し、東西に走る。東側は調査区外で、西側は削平のため残存しない。断面はU字形を呈し、幅 $0.50\sim1.16\,\mathrm{m}$ 、深さ $9\sim18\,\mathrm{cm}$ 、長さ $8.03\,\mathrm{m}$ を測る。

遺物 総数133点。 備考 覆土や出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

W-2号溝址(A区、Fig. 13、PL. 7)

位置 $X46\sim49\cdot Y4\sim7$ グリッド 重複 W-3に切られる。 形状等 A区中央部の北壁から南下し、途中で東へほぼ直角に曲がり、調査区外へ出る。断面はU字形を呈し、幅 $0.42\sim0.97\,\mathrm{m}$ 、深さ $4\sim41\,\mathrm{cm}$ 、長さ $(24.96)\,\mathrm{m}$ を測る。 遺物 総数5点。 備考 覆土や出土遺物から $\mathrm{As-B}$ 降下以降と考えられる。

W-3号溝址(A区、Fig. 13·17、PL. 7)

位置 $X46\sim59\cdot Y4\sim8$ グリッド 重複 W-2 を切る。 形状等 A 区中央部の北壁から南下し、途中で東へほぼ直角に曲がり、調査区外へ出る。断面はU字形を呈し、幅 $1.89\sim2.63$ m、深さ $47\sim106$ cm、長さ(60.63) mを測る。 遺物 総数137点。うち土器1点を図示した。 備考 覆土や出土遺物からAs-B降下以降と考えられる。中世の環濠か。

W-4号溝址(A区、Fig. 13、PL. 7)

位置 $X47\sim48\cdot Y4\sim7$ グリッド 形状等 A区中央部の北壁から南下し、W-2 に接する手前で削平のため途切れる。断面はU字形を呈し、幅 $0.74\sim1.33\,\mathrm{m}$ 、深さ $11\sim26\,\mathrm{cm}$ 、長さ(11.54)mを測る。 **遺物** 総数14点。 備考 覆土や出土遺物からAs-B降下以降と考えられる。

W-5号溝址(A区、Fig. 13、PL. 7)

位置 $X47\sim50$ ・ $Y4\sim7$ グリッド 形状等 A区中央部の北壁から南下し、W-2 に接する手前で東へ直角に曲がり調査区外へ出る。断面はU字形を呈し、幅 $0.70\sim1.02\,\mathrm{m}$ 、深さ $20\sim55\,\mathrm{cm}$ 、長さ(18.60)mを測る。 遺物 なし。 備考 覆土からAs-B降下以降と考えられる。

W-6号溝址 欠番

W-7号溝址(A区、Fig. 13)

位置 X57~59・Y5グリッド 形状等 A区東端部に位置し、調査区を東西に走る。溝の両端は調査区外に出る。断面はU字形を呈し、幅0.71~1.22m、深さ11~21cm、長さ(8.08)mを測る。 遺物 なし。 備考 覆土からAs-B降下以降と考えられる。

W-8号溝址(B区、Fig. 14)

位置 X13~16・Y4~9グリッド 形状等 B区東部に位置し、調査区を南北に横切る。溝の両端は調査区外に出る。断面はU字形を呈し、幅1.30~1.90m、深さ42~55cm、長さ(24.68)mを測る。 遺物 なし。 備考 As-B降下以前と考えられる。

W-9号溝址(B区、Fig. 14)

位置 $X19\sim20\cdot Y4\sim6$ グリッド 形状等 B区中央に位置し、調査区北壁から南下するが、削平のため溝の南端は途切れる。断面はU字形を呈し、幅 $0.40\sim1.60\,\mathrm{m}$ 、深さ $11\sim20\,\mathrm{cm}$ 、長さ $(6.72)\,\mathrm{m}$ を測る。 遺物 総

数13点。 備考 覆土や出土遺物から平安時代と考えられる。

W-10号溝址(B区、Fig. 14、PL. 7)

位置 X28~30・Y4~9グリッド 重複 H-11·12、W-11を切る。 形状等 B区東部に位置し、調査 区を南北に横切る。断面は逆台形を呈し、幅2.28~3.10m、深さ41~54cm、長さ (21.63) mを測る。 遺物 総数492点。 備考 覆土や出土遺物からAs-B降下以降と考えられる。

W-11号溝址(B区、Fig. 15、PL. 7)

位置 $X26\sim31\cdot Y4\sim9$ グリッド 重複 H-6、 $W-14\cdot10$ に切られる。 **形状等** B区東部に位置し、調査区を東北から南西に横切る。断面はV字形を呈し、幅 $0.76\sim1.65\,\mathrm{m}$ 、深さ $51\sim74\,\mathrm{cm}$ 、長さ(26.52) m を測る。 **遺物** 総数 $108\,\mathrm{h}$ 。 **備考** 覆土や出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

W-12号溝址(B区、Fig. 15·17、PL. 9)

位置 $X34\sim35\cdot Y7\sim9$ グリッド 重複 H-8 に切られる。 形状等 B区に東端部に位置し、調査区を南北に横切る。断面はU字形を呈し、幅 $0.56\sim0.75\,\mathrm{m}$ 、深さ $8\sim16\,\mathrm{cm}$ 、長さ $(8.09)\,\mathrm{m}$ を測る。 遺物 総数34点。うち土器1点を図示した。 備考 覆土や出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

W-13号溝址(B区、Fig. 15)

位置 $X8\sim9\cdot Y4$ グリッド 形状等 B区西部に位置し、調査区北壁から南に出るとすぐに東へ直角にまがりトレンチまで伸びる。断面はV字形を呈し、幅 $0.71\sim1.22\,\mathrm{m}$ 、深さ $36\sim44\,\mathrm{cm}$ 、長さ $(3.90)\,\mathrm{m}$ を測る。 遺物 なし。

W-14号溝址(B区、Fig. 15·17、PL. 7)

位置 $X25\sim28\cdot Y8\sim9$ グリッド 重複 W-11を切る。 形状等 B区東部に位置し、調査区南壁際に半円を描く様に走る。断面はU字形を呈し、幅 $1.08\sim1.56$ m、深さ $2\sim20$ cm、長さ(12.33)mを測る。 遺物 総数197点。うち土器1点を図示した。 備考 覆土や出土遺物から平安時代と考えられる。

(7) 落ち込み址

O-1号落ち込み址(A区、Fig. 12·18、PL. 10)

位置 X40・Y11グリッド 形状等 長径 (84) cm、短径 (32) cm、深さ17cmを測る。形状は南側が調査区外のため不明。 遺物 総数8点。うち土器1点を図示した。 備考 覆土や出土遺物から平安時代と考えられる。 O-2号落ち込み址 (B区、Fig. 12)

位置 X23~24・Y5グリッド 形状等 長径175cm、短径112cmの不整形。深さ13cmを測る。 **遺物** 総数25 点。 **備考** 覆土や出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

2 成果と問題点

1. 縄文時代

本発掘調査では遺構の検出こそなかったが、若干の土器片、石器等の遺物が古墳時代の遺物に混じり出土している。土器では早期の鵜ケ島台式もしくは田戸上層式、前期の諸磯b式、中期の加曽利E3もしくは4式が、石器では中期~後期にかけての打製石斧、石鏃等が確認されている。遺跡地周辺の該期遺物検出例として、橳島川端遺跡で縄文時代草創期後半の撚糸文土器や打製石斧、石鏃が、公田東遺跡で後期の土器片が、公田池尻遺跡では有舌尖頭器が出土したと言う報告がなされている。本遺跡でも遺構は検出されなかったが、早期の遺物が出土していることから、当地が該期に生活の場とされていた可能性がより濃厚になったと言える。

2. 古墳時代

古墳時代の遺構は前期と終末期の二つの時期に分類できる。そのうち遺構の大部分は前期に属する。前期遺構には、周溝墓、住居址、土坑、井戸址、溝址などがあり、それぞれが近接しつつも空間的余裕をもって配置されており、居住域と墓域を画そうとする意図も感じられる。

周溝墓は2基検出されており、どちらも著しく削平を受け、台状部や主体部は既に無く、周溝の底部が残存するのみであった。形状は双方ともほぼ方形である。年代的については、いずれも周溝の覆土はAs-C(浅間 C軽石,4世紀中葉)を含む黒色土であることからAs-C降下以降であることが、出土遺物の形態からはC-1号周溝墓が4世紀中葉、C-2号周溝墓が4世紀後半であることが判明した。

B区で検出されたW-11号溝址の年代は、覆土の下層にAs-Cが混入する黒色土が、上層に二次堆積のHr-FA(榛名二ツ岳起源、6世紀初頭)が流れ込んでいることからAs-C降下以降、Hr-FA降下以前であることがわかる。溝の形状はV字形を呈し、清里・庚申塚遺跡で検出された弥生時代の環濠集落を取り囲む濠と類似するものである。用途は何らかの区画溝であったと想像される。このような環濠集落の形態は、弥生時代から古墳時代にかけ連綿と続くものと考えられる。遺物はすべて石田川式土器で、S字状口縁や刷毛目を特徴とする甕形土器や器台等が確認されている。

石田川式土器は周知のとおり、東海地方西部からもたらされたというのが通説となっている古墳時代前期の土器である。古墳時代までほとんど生活の場とされなかった本地域に、石田川式土器文化を持つ集団が定着し、その優れた農業生産力を背景に大規模な八幡山古墳(前方後方墳)や前橋天神山古墳(前方後円墳)が造られる。この従来とは異質な文化を持つ集団が、遠く東海地方など外地から来たものか、それとも従来から本地域周辺の丘陵部に居住していた樽式土器や赤井戸式土器を使用していた集団なのかの議論はおくとして、丘陵地帯から利根川や広瀬川流域の低地帯へとその生活の場を移していったことは明らかである。その背景には低地における水田開発を中心とした農耕文化の進展があったであろう。4世紀代になると本遺跡地周辺には、八幡山古墳や前橋天神山古墳など、本県における初期古墳を代表する大型古墳がつくられる。また、近年の調査では文殊山古墳が同時期のものとして注目されている。これら古墳文化の担い手として浮上してくるのが本地域を初めとする石田川式土器文化を持つ集団である。本遺跡にみられる周溝墓は単位集落の長を葬ったものとみられ、前記の古墳はさらに広範囲を統括する首長を葬ったものであることが想像できる。

前期の住居址はA区西端部で1軒、B区中央部東寄りから東端部にかけて4軒が確認された。この住居検出範囲は微高地となっており、最も遺構が集中する地点であり、集落を形成する一部と考えられる。これらの住居は石田川式土器を伴い、覆土はAs-Cの混入した黒色土であり、4世紀中葉~後半に位置付けられる。集落と周溝墓や溝等の年代は一致する。住居の形状は確認可能な $H-3\cdot12$ でほぼ正方形を呈する。規模は住居の一辺が3m後半のものと $5\sim6$ mのものとに大別できる。竈の設置された住居は無く、全て炉が設置されていたと考えられるが、残存するのは $H-1\cdot3\cdot11$ の3軒のみであった。柱穴は $H-3\cdot11\cdot12$ の大型の住居で検出された。また、 $H-1\cdot3\cdot12$ で壁下周溝が確認された。近い年代で重複関係にある住居は $H-11\cdot12$ の一例のみで比較的余裕を持った集落配置がされているといえる。集落の西側と東側には周溝墓が存在し、生活

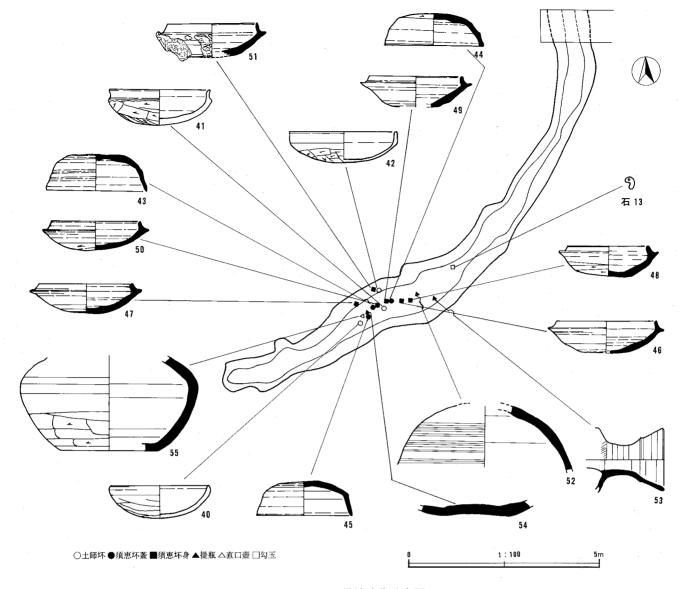


Fig. 6 M-1号墳遺物分布図

域と墓域を区分して集落が形成されていることが観察される。

古墳時代終末期の遺構はM-1号墳のみである。後世の削平により墳丘及び主体部は現存せず、周堀の一部が検出された。南側の周堀の底部からは、祭祀用と思われる須恵器蓋坏や提瓶、直口壺、土師器坏などが列状に出土した。特徴のある遺物として天井部裏側に十字状の線刻のある坏蓋や夥しく焼き滓の付着した坏身などがある。須恵器については陶邑編年型式におけるTK217号窯式に該当する形態のものと言える。本遺構は埴輪が認められないことから、本県における前方後円墳消滅後の時期のものであり、遺物や土層などから、年代は7世紀前半~中葉に位置付けられる。また、周堀からは和泉期のものと考えられる滑石製勾玉が1点検出されたが、土器類との年代的較差が大きく、疑問点として残る。これまで六供町周辺において古墳が確認されたという例はあまり聞かず、本遺跡の検出例は断片的ではあるが、当地域の古墳文化を考えるうえで貴重な一例と言うことができる。

全体的には、現地形には多少の起伏があり、微高地上には集落、周溝墓、古墳が、低地には水田が開かれていた様相を見て取ることができる。

3. 奈良・平安時代

B区東側の微高地上において5軒の住居址が確認されている。年代は遺物などから9世紀中葉から11世紀前半までに収まるものであることが判明した。奈良時代の遺構・遺物等は認められなかった。

本発掘調査は計画道路部分の限られた範囲のため、住居全体がほぼ完全に検出されたものは僅かH-8号住

居址一例のみで、集落の全体像を明確に把握することは困難である。住居の形態は不明なものが多いため全体の傾向はつかめないがH-8の場合は長方形であった。規模は一辺が約 $3m\sim5m$ の範囲に収まり、竃はH-8の東壁に検出されている他、H-6の東壁断面に竃のものと考えられる焼土や粘土が確認されている。

年代的には9世紀中葉のH-6号住居址が最も古く、口径と底径の差が少ない須恵器の坏や偏平な摘まみをもつ須恵器蓋などが、11世紀前半の最も新しいH-8からはカワラケ等が出土した。それ以降の住居址は確認することができなかった。9世紀以前の住居址遺構は4世紀代まで皆無で、その間に何らかの理由で居住域が移動したことが指摘できる。

特筆すべき遺物としては、H-7号住居址出土の須恵坏の内面底部とW-14号溝址出土の須恵坏の口縁部内面に解読はできないが墨書が確認されている。他にはO-1号落ち込み址出土の完形の灰釉高台碗があり、土器観察により虎渓山1号窯式の範疇に属するものと判明した。実年代は10世紀後半に位置付けられる。この土器は東濃窯で生産されたものと考えられ、上野と美濃との交流の一端が垣間見られる。

本地域は推定上野国府域からは外れていることや、住居に適する微高地が少ないことなどから大集落などは認められず、周辺遺跡で多く見られる水田を基盤とした生産体制を担う小集団の居住域として位置付けることが妥当と考えられる。

4. 中·近世

B区中央部から東端部にかけてW-3号溝址を中心とした環濠屋敷の濠と考えられる遺構が検出された。

環濠屋敷は前橋台地南部平坦地に集中して認められる。特に利根川左岸では旧上川渕村、下川渕村、上陽村 などに分布している。本遺跡の南方に所在する橳島川端遺跡では、大規模な館址が検出されている。この館址 は周囲に堀を巡らした環濠屋敷で数棟の掘立柱建物址が検出された。公田東遺跡、公田池尻遺跡でも同様な遺 構が確認されている。前橋市南部地域において、このような環濠を伴う屋敷址の検出例は非常に多い。環濠屋 敷は中世以降の防禦排水施設であると言われており、一般的に濠の規模は幅約2~5m、深さ約1.5~3mで ありW-3号溝址はこの規格にほぼ合致すると言える。また、濠の内側には土居が巡らされるのが通例であり、 W-3の場合、後世の削平のため土居の起伏等の痕跡は認められず、わずかに濠の内側に黄褐色を帯びた部分 が散見されるのみであった。濠は西辺と南辺の一部が検出され、長さ約60mまで確認された南辺のほぼ中央部 と想定される地点では、他より濠幅が狭くなり、底が浅くなっている。この付近からは人頭大前後の河原石が 多量に出土しており、本地点が屋敷へ入る橋状施設の跡であったことを窺わせるものである。出土遺物は流れ 込みのものが多く遺物の年代はまちまちであるが、濠の底部で砥沢石製の砥石、内耳鍋の破片が、付近では宝 篋印塔の相輪部分が検出されている。これらの遺物の年代や覆土にAs-Bテフラが若干含まれることなどから 本遺構は中世のものと思われる。Wー3と平行して走る溝にW-2・4・5・7があり、年代は覆土や切り合 い関係からW-5 → W-4 → W-2 → W-3の順に構築されていると考えられる。W-7については部 分的な確認しかされておらず、切り合いなども無いため年代的順位は不明であるが、覆土はW-2と近似して おりほぼ同年代のものと考えられる。環濠内側の屋敷部分については大部分が調査区外のため、掘立柱建物等 の遺構は確認できなかった。環濠には条里区画を利用し造られる例があり、周辺には古代水田址も多いところ から本遺跡の例も条里と関連する可能性が残ると言える。

《主要参考文献及び引用文献》

前橋市	『前橋市史 第1巻』前橋市史編さん委員会	1971
群馬県	『群馬県史 通史編1 原始古代1』群馬県史編纂室	1988
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業	業団 『清里・庚申塚遺跡』	1981
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業	業団 『年報』	1996
前橋市埋蔵文化財発掘調査団	『大屋敷遺跡I~V』	$1993 \sim 1997$
前橋市埋蔵文化財発掘調査団	『六供下堂木Ⅱ遺跡』	1997
前橋市埋蔵文化財発掘調査団	『中大門遺跡』	1983

Tab. 1 六供中京安寺遺跡土器観察表

	<u>. </u>								
番号	出土位置	器形	大径		①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 整 形 才	i 法 底 部	備考	Fig
\Box	H - 3	土師坩			①中粒②良好③橙④3/4	外領。刷毛目。	篦削り。		16
		土師坏			①中粒②良好③にぶい赤褐④3/4	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。	□ □縁部にスス付着。	16
		1 恵蓋			①細粒②良好③黄灰④完形	機 を を を を を を を を を を を を を を を を を を	偏平な円形つまみ。	口縁部に返りの痕跡。	16
		土 師 蹇				秋程。大井部園転見削り。 外反。横撫で。篦削り。	ケ損。 欠損。	口豚即に怒りの派頭。	16
								<u> </u>	16
		須 恵 坏			①細粒②良好③灰④1/8	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		_
		土師坏			①中粒②良好③橙④1/2	外傾。横撫で。	篦削り。		16
		土師坏			①細粒②良好③橙④3/4	外傾。横撫で。	篦削り。		16
		土師坏			①中粒②良好③にぶい橙④3/4	外傾。横撫で。	篦削り。		16
		土師坏			①中粒②良好③にぶい橙④3/4	外傾。横撫で。	篦削り。		16
		土師坏	_		①細粒②良好③にぶい褐④1/2	外傾。横撫で。篦削り。	飽削り。		16
		土 師 坏			①中粒②良好③にぶい赤褐④ほぽ完形		篦削り。		16
		土 師 坏		3.3	①中粒②良好③にぶい赤褐④ほぼ完形		篦削り 。	_	16
13	H - 7	土 師 坏	11.4	3.0	①中粒②良好③にぶい橙④ほぱ完形	外傾。横撫で。	篦削り。		16
14	H - 7	須 恵 坏	[13.4]	4.2	①中粒②良好③灰④1/5	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		16
15	H - 7	須 恵 坏	12.8	4.0	①中粒②良好③黒褐④ほぼ完形	端部外反。轆轤。	回転糸切り未調整。	炭化物付着。	16
		須 恵 坏			①中粒②良好③灰④1/4	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		16
		須 恵 坏			①細粒②良好③灰④1/4	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		16
		須恵坏		4.0	①細粒②極良③暗灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		16
		須恵坏			①中粒②良好③黄灰④完形	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。	 内面に墨書あり。	16
		須恵高台碗			①中粒②良好③黄灰④1/4	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。	高台後付け。	16
									16
		須恵高台皿			①中粒②良好③褐灰④ほぼ完形	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。	高台後付け。	
		須恵高台皿			①細粒②良好③黄灰④1/2	外領。轆轤。	回転糸切り未調整。	高台後付け。	16
		土師台付賽			①細粒②不良③にぶい橙④3/4	外反。横撫で。篦削り。	欠損。		17
		土 師 甕			①中粒②良好③橙④1/4	外反。横撫で。篦削り。	欠損。		17
		土師台付養			①中粒②良好③にぶい赤褐④脚部2/3	欠損。	脚部横撫で。		16
26	Н - 8	カワラケ	10.0	3.0	①中粒②不良③褐④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		17
		カワラケ		3,7	①中粒②不良③褐灰④3/4	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		17
28	H - 8	カワラケ	[11.4]	(3.0)	①中粒②良好③にぶい淡橙④1/4	外傾。轆轤。	欠損。		17
		須 恵 坏			①細粒②良好③灰④1/12	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		17
		須恵坏			①細粒②良好③灰白④完形	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		17
		須恵高台碗			①中粒②極良③灰白④1/5	外傾。轆轤。	欠損。	高台後付け。	17
		土 師 坏			①中粒②良好③にぶい橙④1/2	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	PI LI IX 13 */ 0.	17
		土師注口			①細粒②良好③赤褐④-	大損。 (根無く。 尾削り。 大損。	欠損。		17
		土師壺			①粗粒②良好③にぶい橙④1/5	外反。頸部刷毛目、篦削り。	欠損。		17
		土師台付養			①中粒②良好③橙④-	欠損。	脚部撫で調整。		17
-		土師器台		9.1	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	横撫で。刷毛目。	脚部篦調整。	脚部に透かし孔あり。	17
		土 師 坏			①中粒②良好③橙④1/6	直立。篦磨き。	欠損。	_	17
		₩:=チュア±		2.7	①中粒②良好③褐④3/4	直立。横撫で。	篦起こし。		17
		須恵切			①細粒②良好③灰黄④-	外傾。轆轤。	欠損。	墨書あり。	17
40	M - 1	土師坏	10.6	3.5	①細粒②良好③橙④3/4	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。	:	17
41	M - 1	土師均	11.4	3.3	①中粒②良好③にぶい橙④2/3	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		17
		土師切		3.8	①中粒②良好③にぶい赤褐④2/3	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。	ゆるやかな外稜。	17
43	M - 1	須恵坏蓋	10.8	3.9	①細粒②良好③灰④完形	轆轤。天井部回転篦切り。	20117 7 0	7 0 1 1 0 071120	17
		須恵坏蓋			①細粒②良好③暗灰④完形	轆轤。天井部回転篦削り。			17
		須恵坏蓋			①細粒②良好③灰④3/4	轆轤。天井部回転篦削り。			17
							同転解制力		
_		須恵坏身			①中粒②良好③灰白④ほぱ完形	内領。轆轤。回転篦削り。	回転篦削り。	鋭い外稜。	17
		須恵坏身	_		①中粒②良好③灰④完形	内傾。轆轤。	回転篦削り。		-
		須恵坏身		_ <u> </u>	①中粒②良好③灰④完形	内傾。轆轤。明確な外稜。	回転篦削り。	内面に十字の線刻。	17
		須恵坏身			①中粒②良好③灰白④1/5	内傾。轆轤。	回転篦削り。	AV 17.55	18
-		須恵坏身		3.2	①中粒②良好③褐灰④ほぼ完形	内傾。轆轤。	回転篦削り。	鋭い外稜。	18
51		須恵坏身		3.6	①粗粒②良好③黄灰④1/2	内傾。轆轤。		焼淬付着。	18
	M - 1		(18.5)	(6.5)	①中粒②良好③褐灰④-	轆轤。表側に同心円状の櫛目施文。内面撫で。	·	閉寒部欠損。	18
	M - 1			(10.1)	①中粒②良好③褐灰④-	外傾。二段口縁。沈線あり。斜方向の櫛施文。		口縁から頸部のみ残存。	18
	M - 1		(11.5)	(1.2)	①中粒②良好③褐灰④-	表側に同心円状の櫛目施文。内面撫で。		閉寒部円形粘土板による。	18
		直口雪			①細粒②良好③灰白④1/4	口縁欠損。轆轤。篦削り。	欠損。	胴部に最大径。	18
56		土師量			①中粒②良好③灰黄褐④-	外傾。端部直立。横撫で。刷毛目。	欠損。		18
57		土師器台			①細粒②良好③橙④1/4	撫で。 篦磨き。	脚部に透かし口あり。		18
58		土師器台			①中粒②不良③明褐灰④3/4	口縁部篦調整。撫で。篦削り。	刷毛目あり。二段の透かし口。	-	18
		灰釉高台			①中粒②良好③灰白④完形	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。高台後付け。	走 沒山 1 早 空 子	18
—		-						ル1大円 1 ケ黒八0	18
60		土師切		· — —	① 網粒②良好③橙④2/3	外傾。横撫で。	篦削り。 ムがに刷ぎり だりをしまり		_
		土師台付養			①中粒②良好③にぶい橙④2/3	S字口縁。篦削り。刷毛目。	台部に刷毛目。折り返しあり。		18
62		土師台付養			①細粒②良好③浅黄④1/10	欠損。	台部に刷毛目。		18
63		土師台付養		_	①中粒②良好③橙①1/8	欠損。篦削り。刷毛目。	脚部欠損。		18
64		土師坩			①粗粒②不良③にぶい黄褐④1/10	欠損。	篦削り。		18
65	X38Y8	土師台付養	12.5	(21.9)	①中粒②良好③褐灰①1/2	S字口縁。刷毛目。篦削り。	台部欠損。		19
66	X38 Y 8	土師台付養	13.4	(23.0)	①中粒②良好③にぶい橙④8/9	S字口縁。篦削り。刷毛目。	脚部欠損。		19
67	X 38 Y 8	土師台付養	13.2	-	①中粒②良好③にぶい橙④-	S字口縁。篦削り。刷毛目。	欠損。		19
68		土師台付養		19.1	①中粒②良好③橙④1/2	S字口縁。篦削り。刷毛目。	台部欠損。		19
69		土師園			①中粒②良好③灰白④-	外傾。横撫で。刷毛目(縦方向)。胴部欠損。	欠損。		19
70		土師量			①中粒②良好③橙④-	二段口縁。頸部に泥紐縄飾り。横撫で。	欠損。		19
-		土師雪			①細粒②良好③橙④-	外反。二段。横撫で。嗣毛目。	欠損。		19
1/1	N 30 I 12	一下 崩 3	1.61	(0.0)	心相似心及灯心性化	//以。一段。惧揺じ。桐七日。	八块。	I	19

番号	出土位置	器形	大きさ		①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形	備考	Fig	
留万		裔 形	口径	器高	. 电超上 医兔属 电光杆	口縁・胴部	底 部	州 专	rig
72	X39Y3	土師台付甕	16.4	31.6	①中粒②良好③にぶい橙④3/5	S字口縁。篦削り。刷毛目。	刷毛目。台部折り返し。		19
73	X39Y3	土師台付甕	[16.5]	(26.0)	①中粒②良好③にぶい橙④1/2	S字口縁。篦削り。刷毛目。	台部欠損。		19
74	X39Y8	土 師 坩	13.0	(17.0)	①細粒②良好③にぶい橙④1/3	外傾。篦磨き。	欠損。		19
75	X39Y8	土師器台	[10.1]	10.4	①中粒②良好③にぶい赤褐④3/4	撫で。篦磨き。	台部に透かし孔あり。		19
76	X39Y8	土 師 壺		(8.5)	①中粒②良好③明赤褐④-	口縁欠損。篦磨き。	欠損。	頸部に装飾帯。	20
77	X39Y9	天目茶碗	_	(1.9)	①細粒②極良③灰白④1/10	欠損。轆轤。	回転未調整。高台後付け。		19
78	X39Y9	土師短頸壺	4.5	(6.7)	①細粒②良好③にぶい橙④-	短く直立。横撫で。篦磨き。	欠損。		19
79	X 39 Y 10	土 師 壺	15.2	(13.4)	①粗粒②不良③橙④1/2	外反。二段口縁。横撫で。篦磨き。	欠損。		20
80	X40Y7	搬斗7播	[8.6]	4.0	①中粒②不良③浅橙④2/3	内湾。篦磨き。	篦削り。		20
81	X40Y7	土 師 壺	17.5	(7.9)	①粗粒②不良③にぶい黄橙④-	外反。横撫で。頸部篦削り。刷毛目。	欠損。		20
82	X41Y5	土師器台	[9.7]	(5.8)	①細粒②良好③明赤褐④1/3	外傾。篦磨き。	脚部透かし孔あり。		20
83	X 41 Y 10	土師小瓷	[8.0]	(4.2)	①中粒②不良③浅黄橙④-	外傾。横撫で。	欠損。		20
84	X41Y10	土師高坏	14.5	(5.2)	①細粒②良好③明赤褐④1/2	外傾。篦磨き。	欠損。		20
85	X 41 Y 10	土 師 壺	14.4	(5.0)	①中粒②不良③にぶい褐④-	短く外傾。横撫で。篦削り。刷毛目。	欠損。		20
86	X41Y10	土師台付甕	[13.4]	(19.1)	①中粒②良好③にぶい橙④1/8	S字口縁。篦削り。刷毛目。	欠損。		20
87	X43Y8	土師坩	[11.9]	16.6	①中粒②良好③橙④2/3	外傾。篦削り。	篦削り。		20
88	X46Y11	土 師 坩	[8.3]	10.9	①中粒②良好③橙④3/4	外傾。篦削り。	篦調整。		20
89	X46Y11	土 師 坩	14.4	(12.0)	①細粒②良好③橙①1/5	外傾。刷毛目。	欠損。	· .	20
90	B区表採	土師坩	[12.0]	7.1	①中粒②不良③にぶい橙④2/3	外傾。刷毛目。篦削り。	篦調整。		20
91	B区表採	土師装飾器台	(10.6)	(7.0)	①中粒②良好③にぶい橙④1/5	受部・脚部に透かし孔。受部に水平の鍔。	欠損。	-	20

注)表の記載は以下の基準で行った。

- ①胎土は、細粒 (0.9mm以下)、中粒 (1.0mm~1.9mm以下)、粗粒 (2.0mm以上) とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。
- ②焼成は、極良・良好・不良の三段階。
- ③色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帳(小山・竹原1976)によった。

Tab. 2 縄 文 土 器 観 察 表

番号	出土位置	①胎 土 ②焼 成 ③色 調 ④残 存	文 様 要 素・文 様 構 成・器 形 の 特 徴	備考
1	B区表採	①粗粒②良好③純い赤褐④胴部	刺突文。口唇部に刺突。結晶片岩を含む。	早期鵜ケ島台、もしくは田戸上層式深鉢。
2	W - 11	①細粒②良好③純い赤褐④口縁部	半截竹管による平行沈線。地文は縄文(RL)。	前期諸磯b式深鉢。
3	W - 11	①中粒②良好③淡黄橙④口縁部	半截竹管による連続爪形文。	前期諸磯b式深鉢。
4	W - 14	①細粒②良好③純い赤褐④胴部	綾繰文。	前期諸磯b式深鉢。
5	W - 14	①細粒②良好③橙④口縁部	半截竹管による連続爪形文。	前期諸磯b式深鉢。
6	W - 14	①細粒②良好③純い赤褐④胴部	綾繰文 。	前期諸磯b式深鉢。
7	B区表採	①細粒②良好③純い赤褐④胴部	綾繰文。	前期諸磯 b 式深鉢。
8	B区表採	①中粒②良好③純い赤褐④胴部	縄文(RL)。	前期諸磯b式深鉢。
9	W - 11	①中粒②良好③純い橙④胴部	磨消縄文。縄文(RL)。	中期加曽利E3、もしくは4式深鉢。
10	W - 14	①中粒②良好③純い黄橙④胴部	磨消縄文。縄文(LR)。	中期加曽利E3、もしくは4式深鉢。
11	B区表採	①中粒②良好③純い黄橙④胴部	条線文。	中期加曽利E3、もしくは4式深鉢。
12	B区表採	①中粒②良好③純い赤褐④胴部	縄文(LR)。	中期加曽利E3、もしくは4式深鉢。
13	B区表採	①中粒②良好③純い赤褐④口縁部	口縁内部は沈線。有段口縁の縁部に沈線と羽状の刻み。	後期の鉢か。

注) 表の記載は以下の基準で行った。

- ①胎土は、細粒 (0.9 mm以下)、中粒 $(1.0 \text{mm} \sim 1.9 \text{mm} 以下)$ 、粗粒 (2.0 mm 以上) とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。 ②焼成は、極良・良好・不良の三段階。
- ③色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帳(小山・竹原1976)によった。

Tab. 3 石器·石製品観察表

番号	出土位置	器 種	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	備 考
1	X42 · Y 9	石 鏃	2.4	1.7	0.4	1.0	チャート	凹基無茎鏃。縄文時代前期。
2	X43 · Y10	石 鏃	2.2	1.7	0.3	0.8	チャート	凹基無茎鏃。縄文時代前期。
3	B区表採	石 鏃	2.7	1.2	0.3	0.9	黒色安山岩	凹基無茎鏃。縄文時代。
4	B区表採	石 鏃	2.2	1.4	0.6	1.1	チャート	凹基無茎鏃。縄文時代。
5	X40 · Y 8	磨製石鏃	3.1	[2.0]	0.2	1,3	粘 板 岩	せん孔有り。基部欠損。弥生時代後期~古墳時代前期。
6	X39 · Y11	打製石斧	9.0	8.8	2.1	164.0	黒色頁岩	刃部欠損。縄文時代中期後半~後期前半。
7	A区表採	打製石斧	4.7	3.9	1.0	27.0	黒色頁岩	刃部欠損。縄文時代中期。
8	X39 · Y11	削 器	7.1	5.4	1.4	56.5	黒色頁岩	縄文時代。
9	B区表採	削 器	10.6	7.3	2.3	182.0	黒色頁岩	縄文時代。
10	W - 3	砥 石	6.6	3.3	2.9	97.0	砥 沢 石	全ての側面に使用痕が認められる。
11	W - 3	砥 石	9.8	5.9	3.8	262.0	砥 沢 石	全ての側面に使用痕が認められる。
12	A区表採	宝篋印塔	33.5	12.3	12.0	2240.0	粗粒安山岩	相輪部。中世末か。
- 13	M - 1	勾 玉	1.7	1.1	0.5	1.3	滑 石	せん孔有り。
14	W - 1 0	石 器	4.8	3.2	0.4	8.2	粘 板 岩	両面に縦方向の磨き。磨製石鏃の未製品か。
15	B区表採	石 器	6.0	3.7	1.0	23.8	粘 板 岩	両面に縦方向の磨き。磨製石鏃の未製品か。
16	Н — 3	敲 石	15.0	7.0	5.0	790.0	細粒安山岩	両端部に使用痕有り。
17	W - 3	敲 石	11.7	5.7	4.7	540.0	細粒安山岩	上部に使用痕有り。
18	X17 · Y 5	敲 石	17.1	6.2	5.2	900.0	細粒安山岩	両端部に使用痕有り。
19	D - 1	敲 石	15.0	6.8	5.0	760.0	細粒安山岩	表側に使用痕有り。

注)表の記載で大きさと重さについての単位はcmとgである。[] は現存値。

3 付編 六供中京安寺遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

六供中京安寺遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

群馬県域の完新世に形成された火山灰土中には、浅間火山や榛名火山をはじめとする関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の鬼界カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出時代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な土層が認められた六供中京安寺遺跡において、地質調査を行って、土層の層序と示標テフラの層位を記載することになった。調査の対象とした地点は、B区西地点北壁および中央地点北壁の2地点である。

2. 土層の層序

(1) B区西地点北壁①

ここでは、微高地部の土層をよく観察することができた。(図1)。この地点の土層は、下位より黒褐灰色砂質土(層厚14cm)、暗褐色土(厚層16cm)、黒色土(層厚19cm)、黄白色軽石層(層厚7cm,軽石の最大径11mm,石質岩片の最大径2mm)、下位の黄白色軽石混じり黒褐色土(層厚7cm,軽石の最大径10mm)からなる。これらのうち、黄白色軽石層は、その層相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C,新井,1979)に同定される。

(2) B区中央地点北壁②

この地点では、埋没谷が認められた(図2)。埋没谷の覆土は、下位より砂混じり暗灰色土(層厚5 cm以上)、黒泥層(層厚0.8cm)、灰色シルト層(層厚0.5cm)、黒泥層(層厚0.1cm)、成層したテフラ(層厚7 cm)、桃灰色粘土層(層厚14cm)、暗灰色土(層厚14cm)、黄白色細粒火山灰層(層厚0.2cm)、暗灰色土(層厚0.1cm)、成層したシルト層(層厚30cm)、暗灰褐色土(層厚7 cm)、黒褐色土(層厚5 cm)、成層したテフラ層(層厚2 cm)、褐色砂質土(層厚7 cm)、灰褐色砂質土(層厚18cm)、褐灰色砂質土(層厚19cm)、盛土(層厚23cm)の連続からなる。

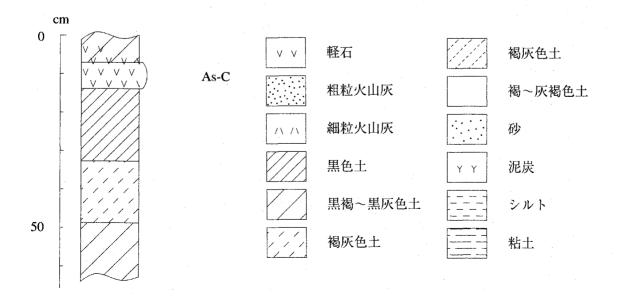


図1 B区西地点北壁の土層柱状図

2層の成層したテフラ層のうち、下位のテフラは、下位より 桃褐色細粒火山灰層(層厚 2 cm)、かすかに成層した淘汰の良 くない黄灰色火山灰層(層厚 3 cm)、淘汰の良い黄灰色粗粒火 山灰層(層厚 2 cm)の連続からなる。このテフラ層は、その層 相から6世紀初頭に榛名山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ 層(Hr-FA,新井,1979,坂口,1986,早田,1989,町田・ 新井,1992)に同定される。したがって、その直上の粘土層は、 Hr-FAの堆積に伴って発生した火山泥流堆積物(早田,1989) に同定される。

その上位の黄白色細粒火山灰層は、その層位や層相から、6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP,新井,1962,坂口,1986,早田,1989,町田・新井,1992)に同定される。その上位の成層したシルト層は、下位より桃色シルト層(層厚7cm)、灰色砂質シルト層(層厚8cm)、桃色シルト層(層厚4cm)、灰色砂質シルト層(層厚3cm)、桃色シルト層(層厚8cm)の連続から構成される。このシルト層は、その層位から、Hr-FPの堆積に伴って発生した火山泥流堆積物(早田,1989)に同定される。

上位の成層したテフラ層は、下位より灰色細粒火山灰層(層厚0.2cm)、褐色軽石混じり褐色粗粒火山灰層(層厚0.3cm,軽石の最大径9mm)、青灰色細粒火山灰層(層厚0.2cm)、黄色粗粒火山灰層(層厚0.2cm)、黄色粗粒火山灰層(層厚0.2cm)、黄色粗粒火山灰層(層厚0.2cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚0.3cm)、桃色粗粒火山灰層(層厚0.8cm)、かすかに成層した黄色粗粒火山灰層(層厚4cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚1cm)、黄色粗粒火山灰層(層厚0.2cm)、桃色細粒火山灰層(層厚2cm)から構成されている。このテフラ層は、その層相から、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B,新井、1979)に同定される。

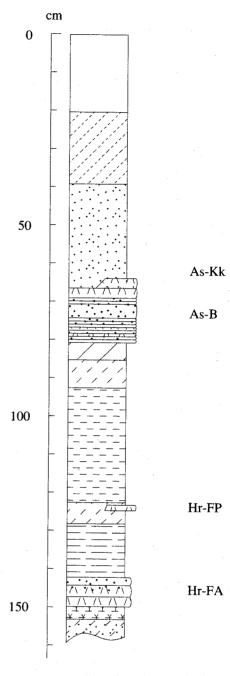
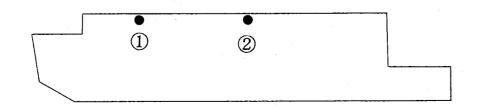


図2 B区中央地点北壁の土層柱状図

3. ま と め

六供中京安寺遺跡の土層を対象として、地質調査を行った。その結果、下位より浅間 C 軽石(As-C, 4世紀中葉)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)、Hr-FAの堆積に伴う火山泥流堆積物、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)、Hr-FPの堆積に伴う火山泥流堆積物、浅間 B テフラ(As-B, 1108年)、浅間粕川テフラ(As-Kk, 1128年)などを検出することができた。

六供中京安寺遺跡B区における調査対象地点①・②



《文献》

新井 房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p1-79.

新井 房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.53, p41-52.

荒牧 重雄 (1968) 浅間火山の地質. 地団研専報, no.14, 45p.

町田 洋・新井 房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

坂口 - (1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器.

群馬県教育委員会編「荒牧北原遺跡・今井神社 古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害, 第四紀研究, 27, p.297-312.

早田 勉 (1991) :浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, 2-7.

早田 勉 (1995) : テフラからさぐる浅間火山の活動史. 御代田町誌, 自然編.

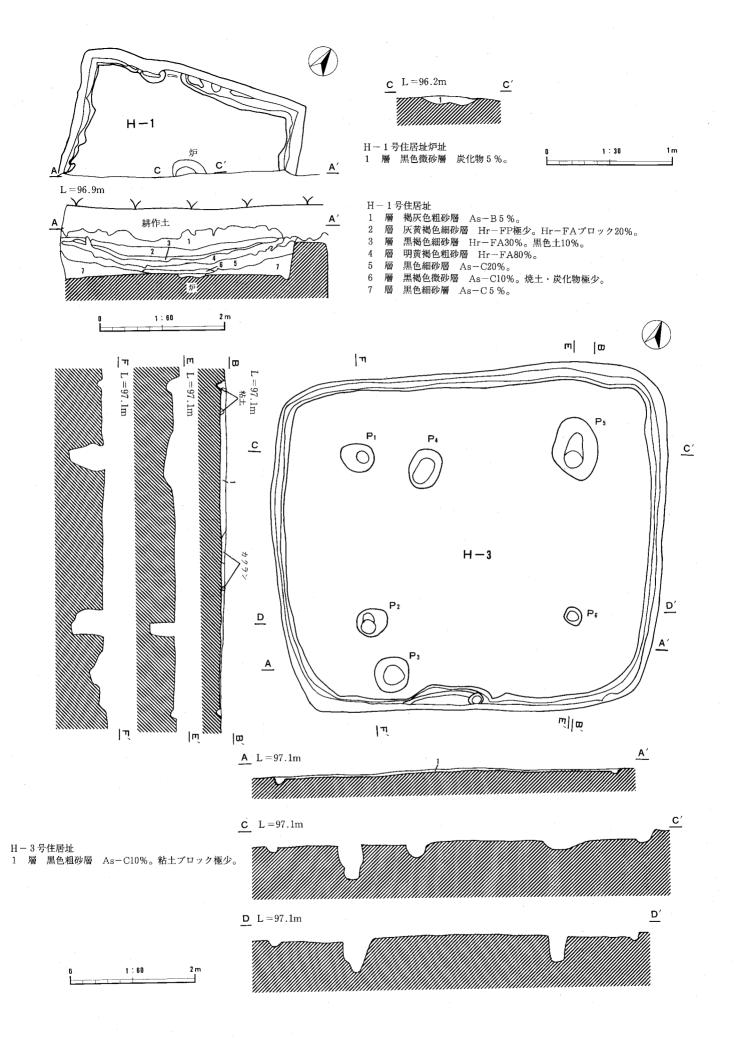


Fig. 7 H-1·3号住居址

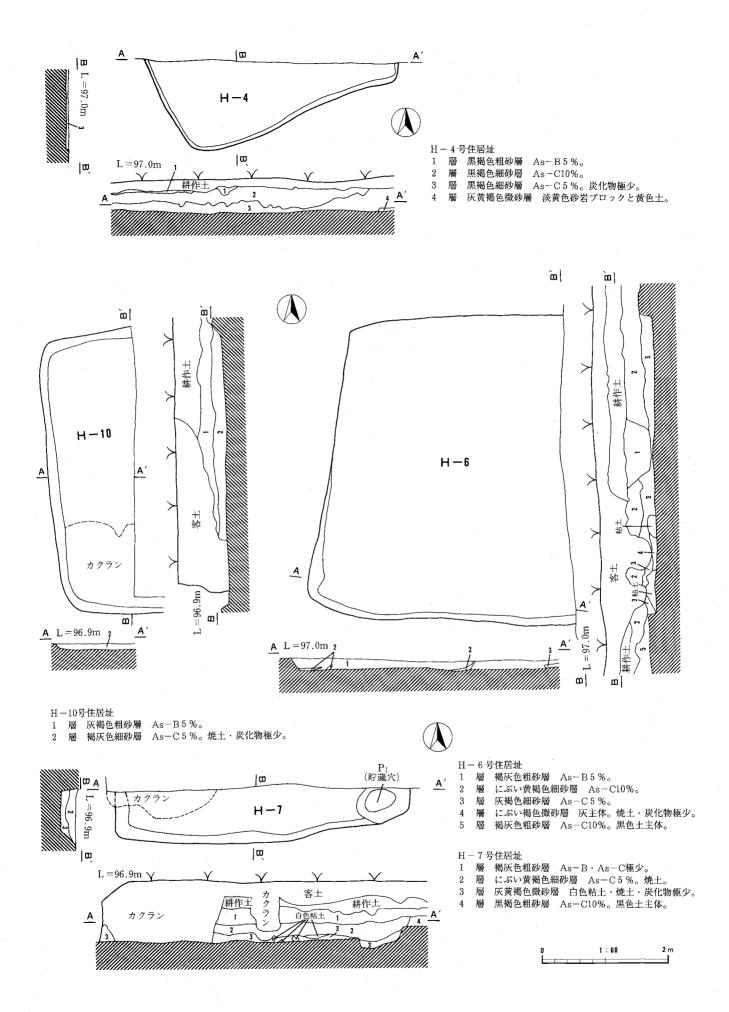


Fig. 8 H-4·6·7·10号住居址

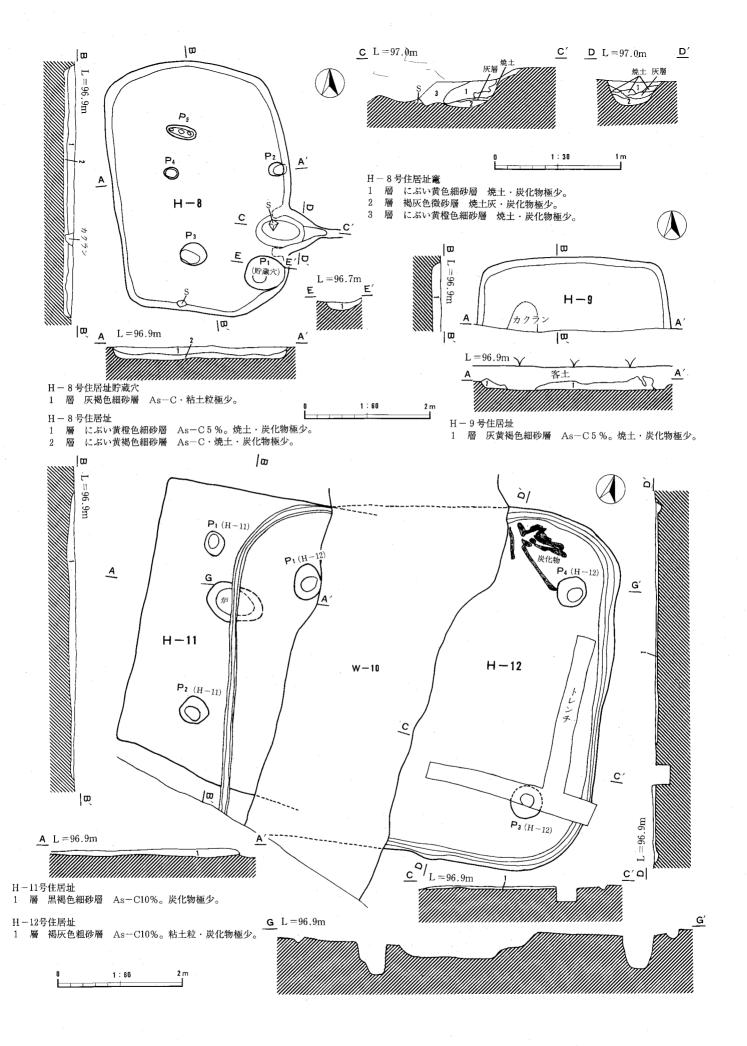


Fig. 9 H-8·9·11·12号住居址

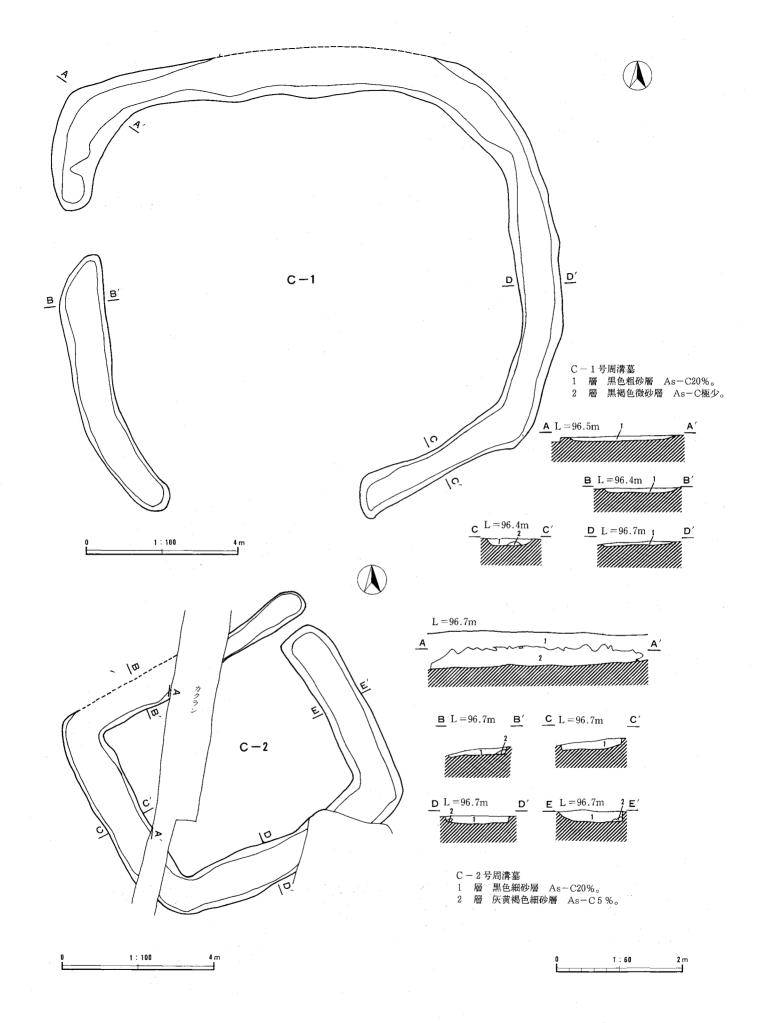


Fig. 10 C-1·2号周溝墓

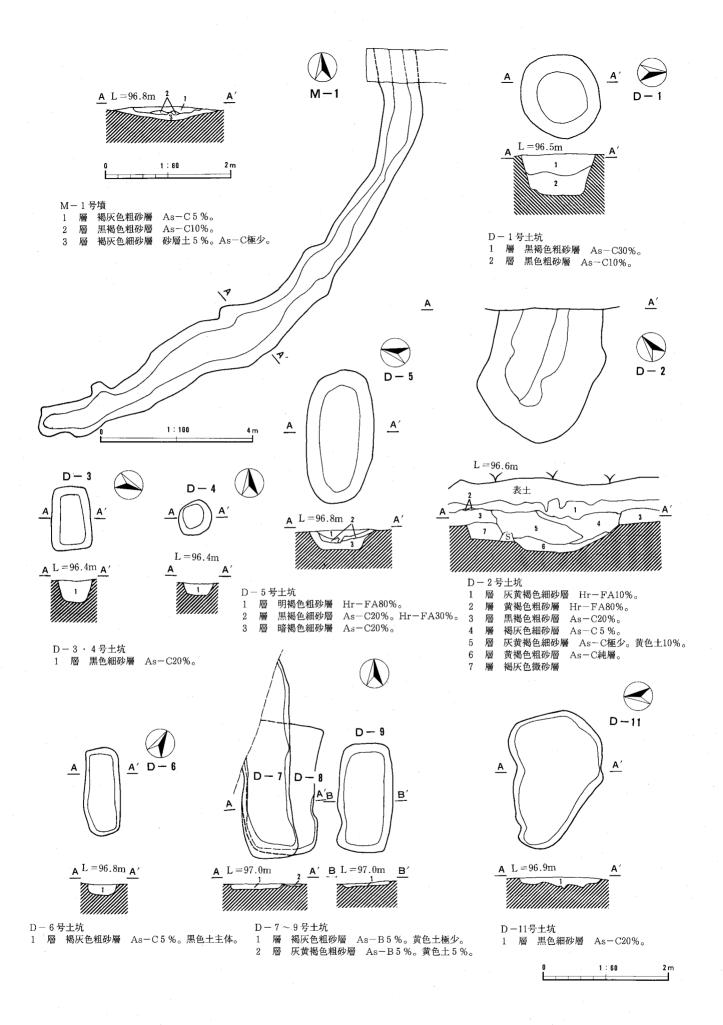


Fig. 11 M-1号墳, D-1~9·11号土坑

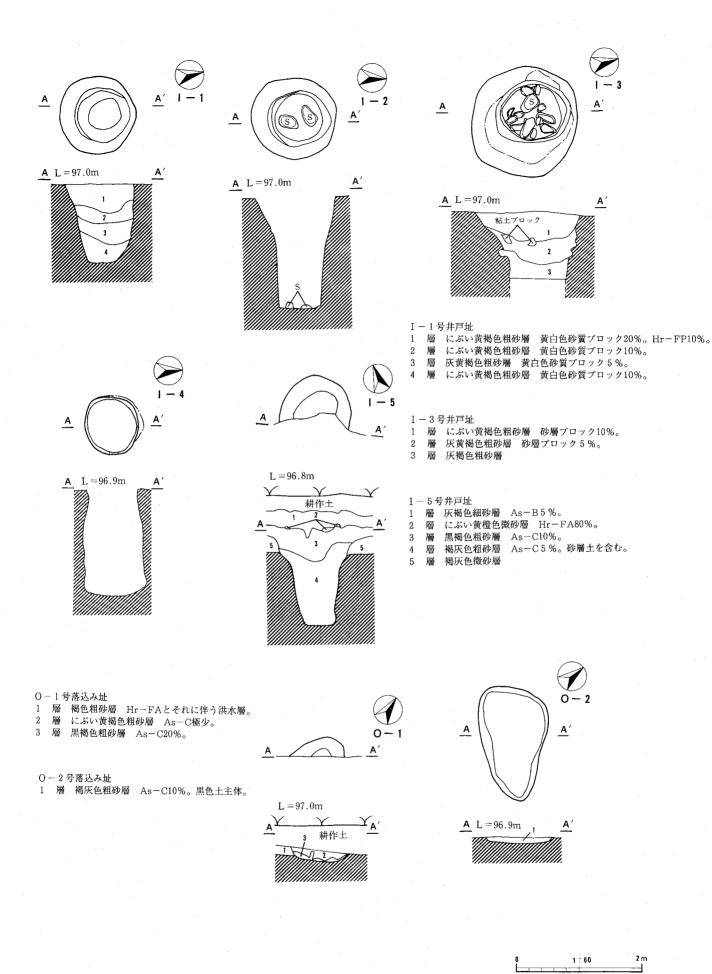


Fig. 12 $I-1\sim5$ 号井戸址, $O-1\cdot2$ 号落ち込み址

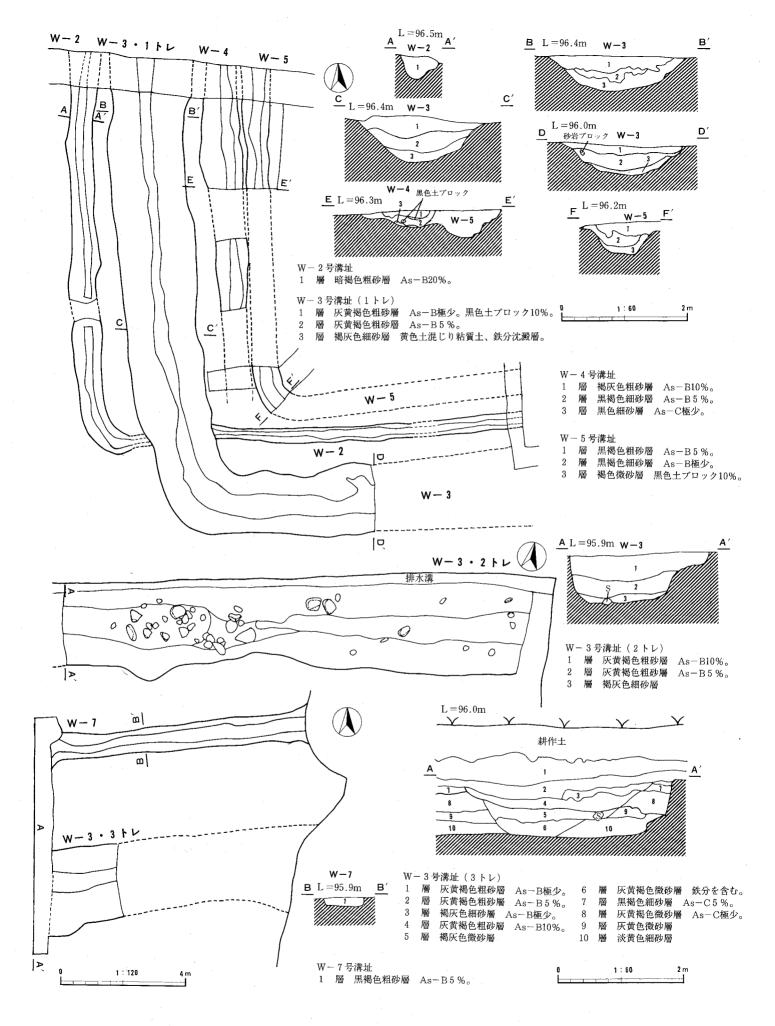


Fig. 13 W-2~5·7号溝址

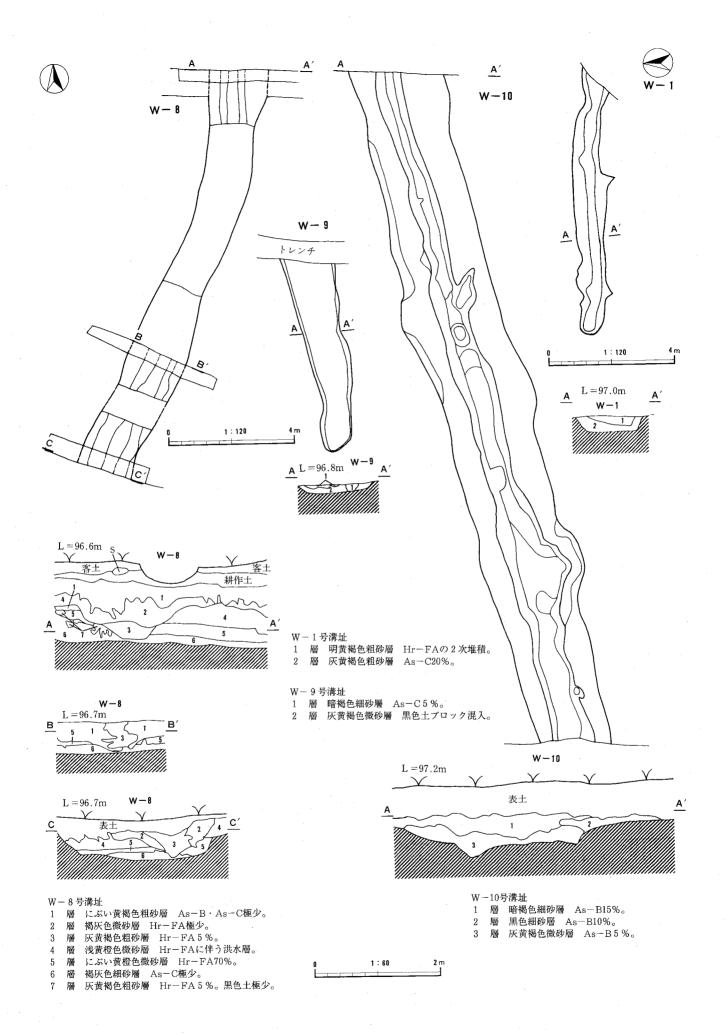


Fig. 14 W-1·8~10号溝址

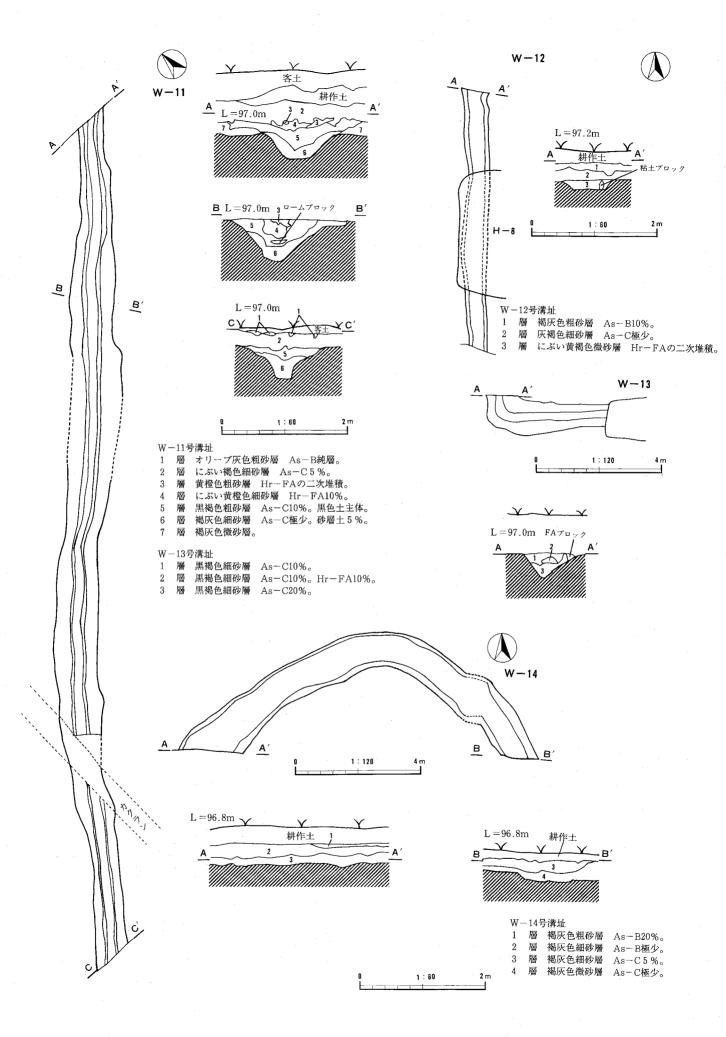


Fig. 15 W-11~14号溝址

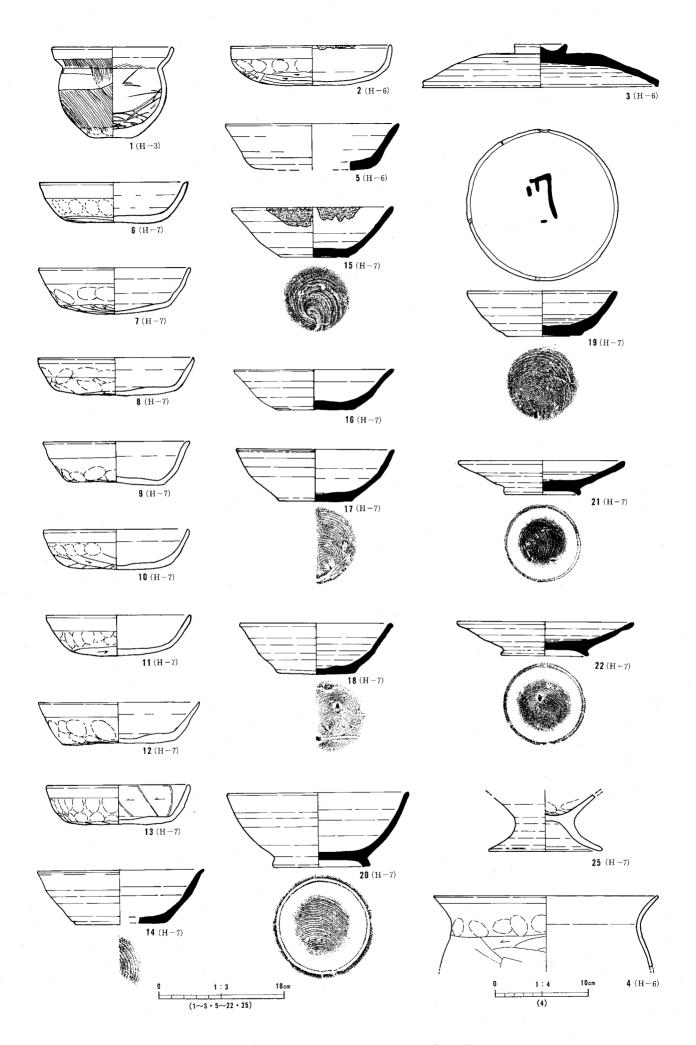


Fig. 16 H-3・6・7号住居址出土の土器

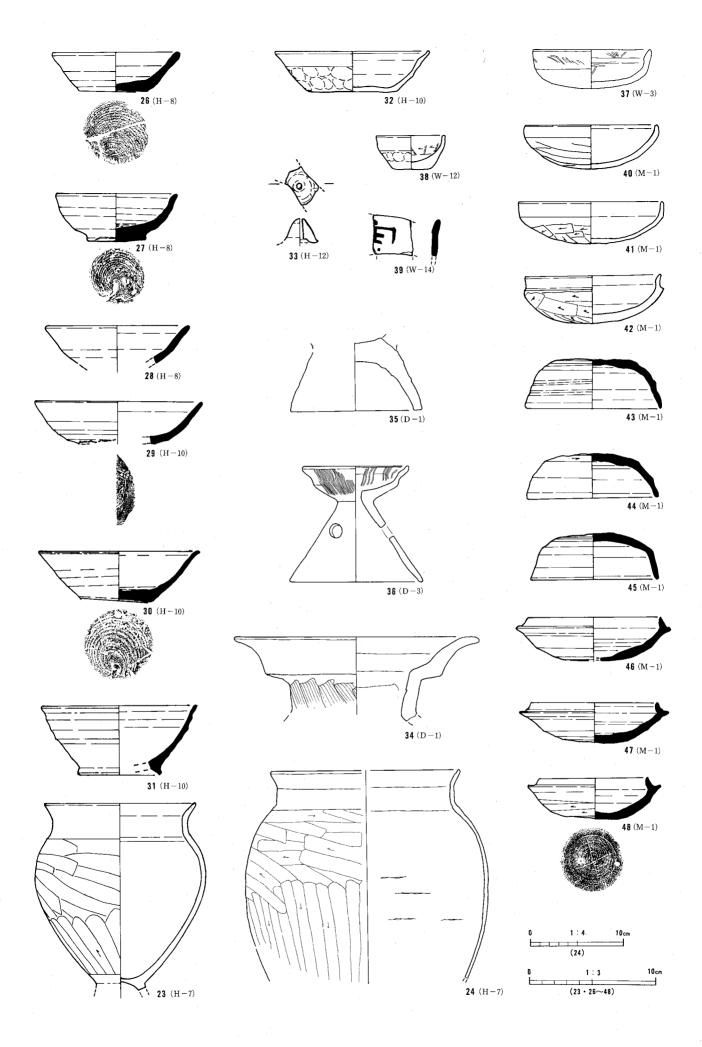


Fig. 17 H-7・8・10・12, W-3・12・14, D-1・3, M-1出土の土器

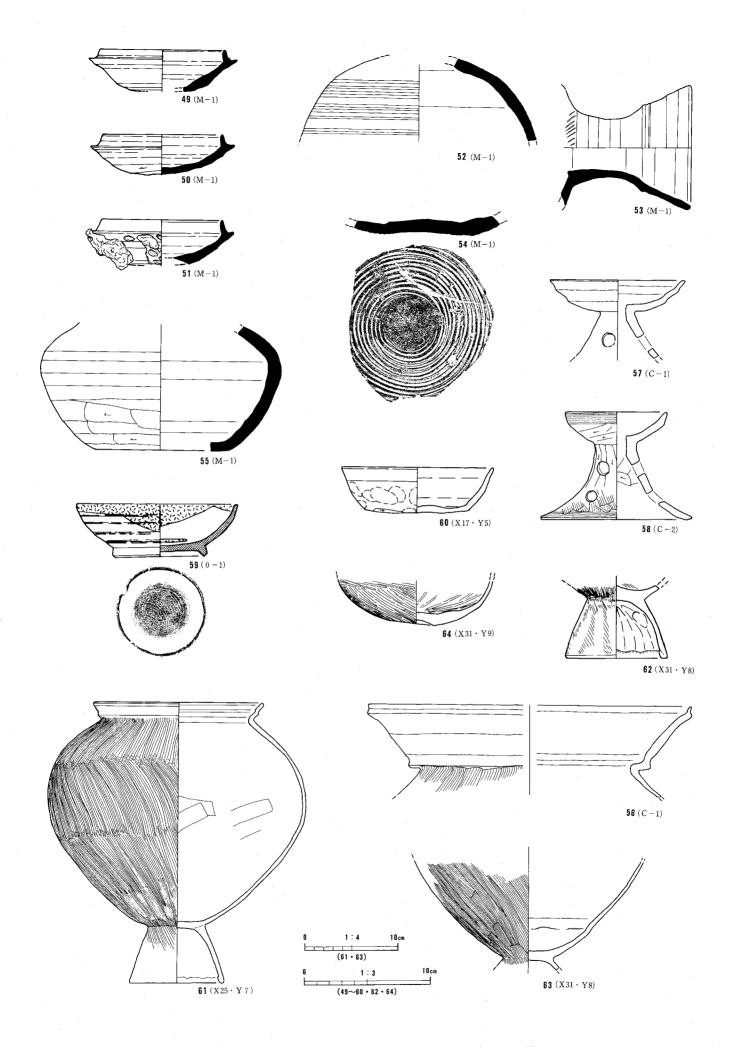


Fig. 18 M-1, C-1・2, O-1, グリッド出土の土器

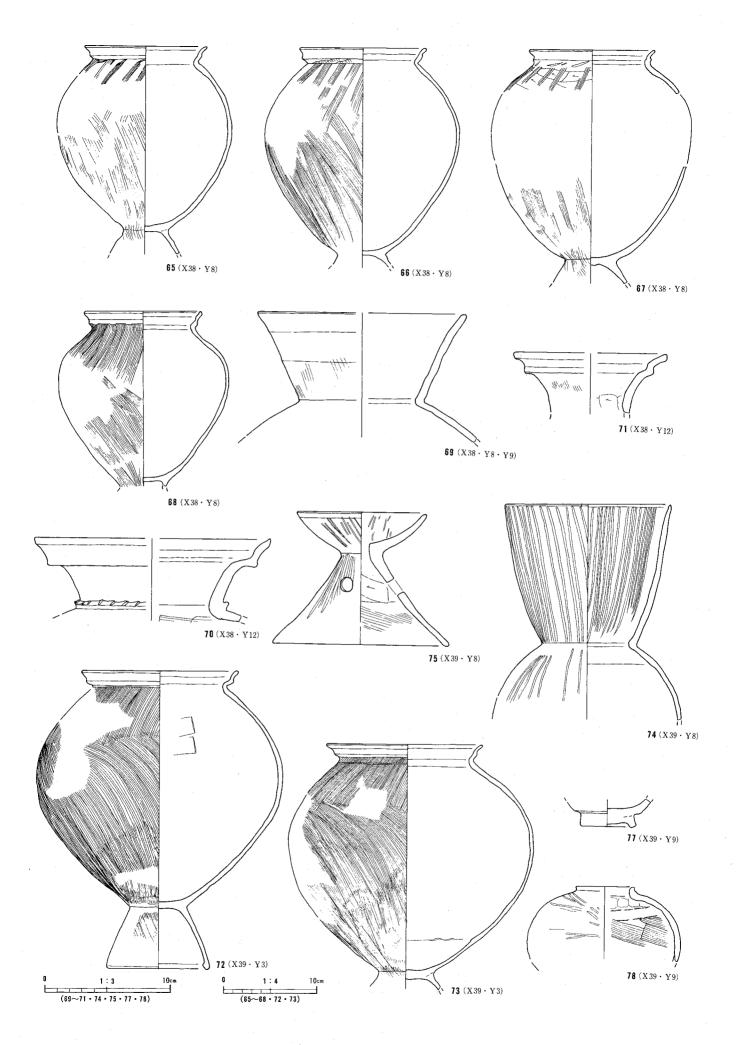


Fig. 19 グリッド出土の土器

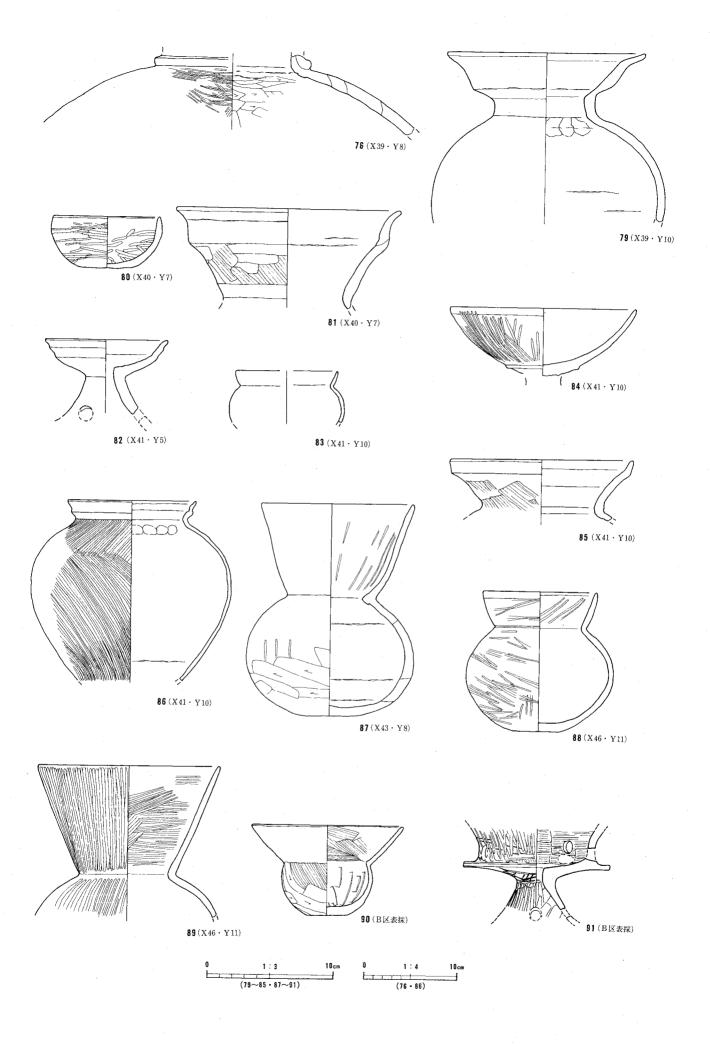


Fig. 20 グリッド等出土の土器

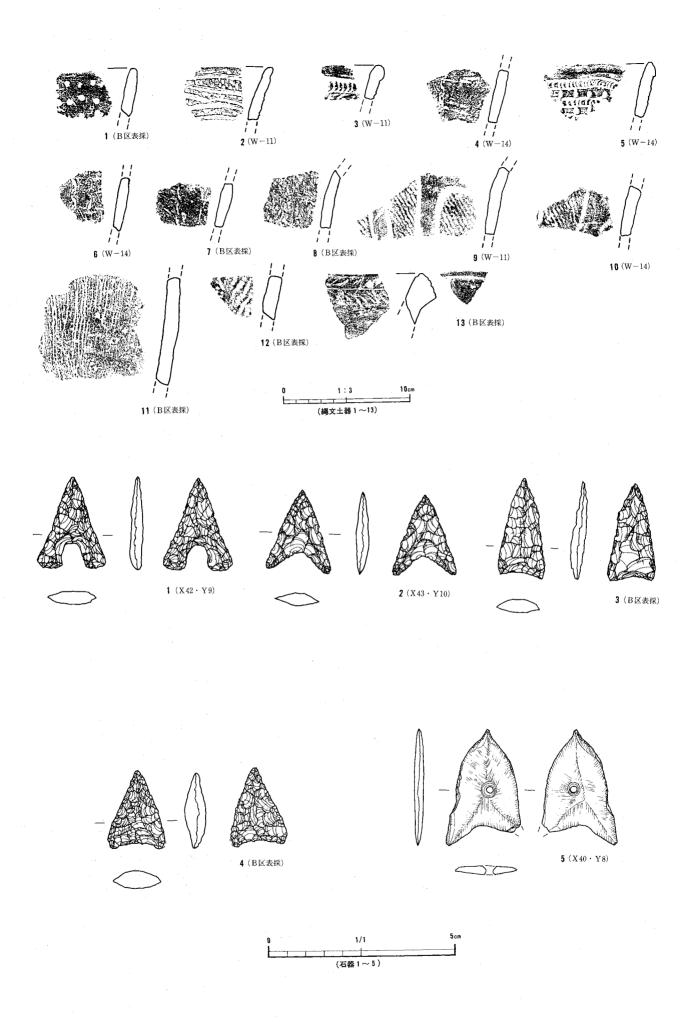


Fig. 21 縄文土器・石器

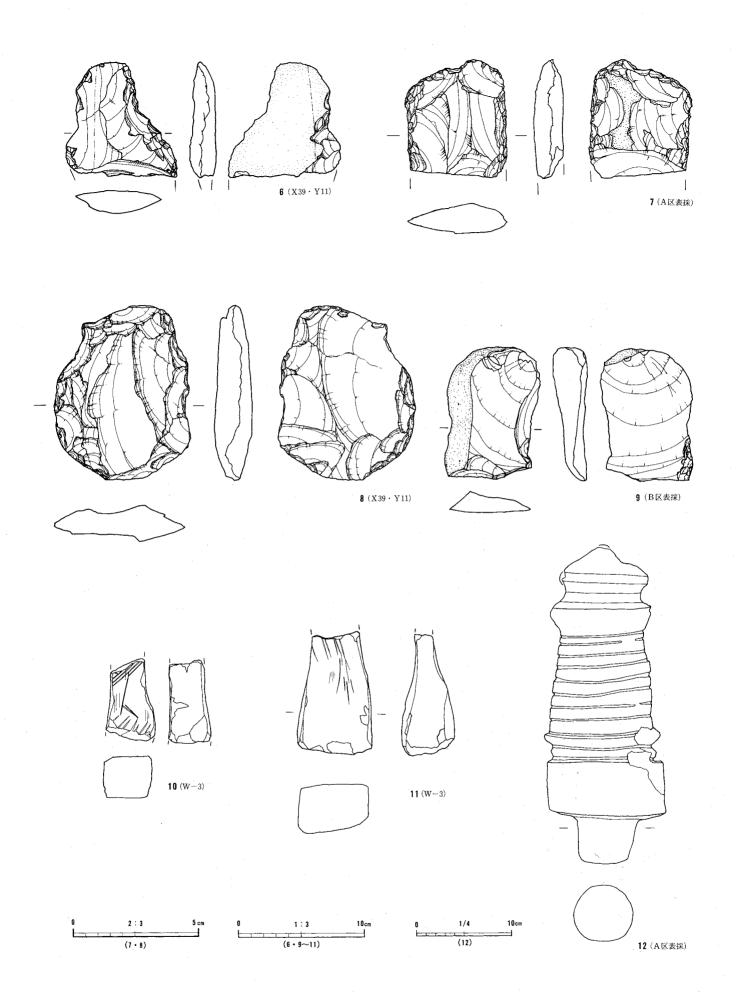


Fig. 22 石器·石製品

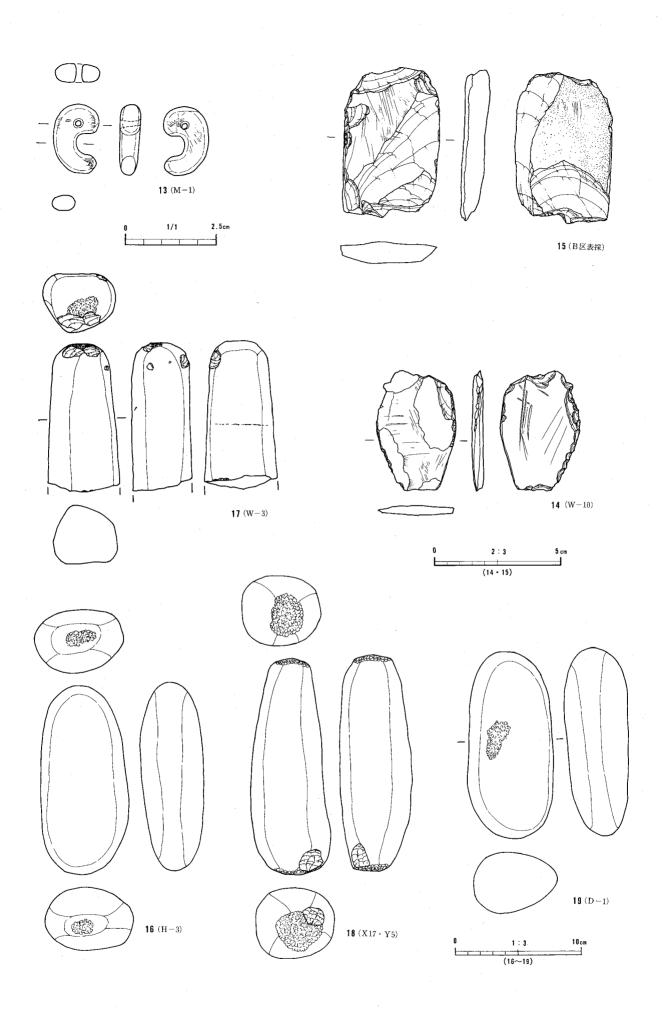
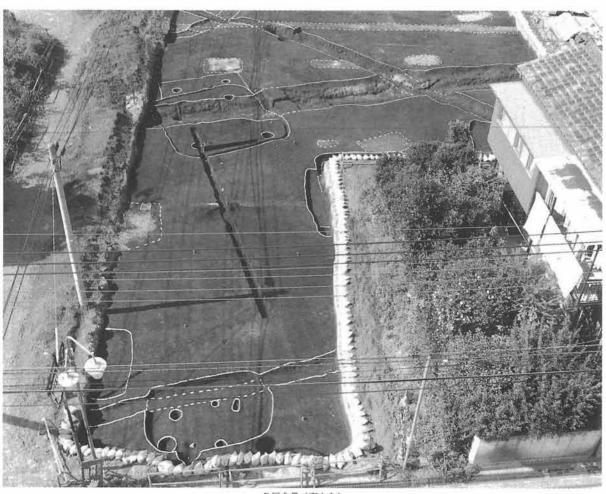


Fig. 23 石器・石製品



A区全景(西から)



B区全景 (東から)

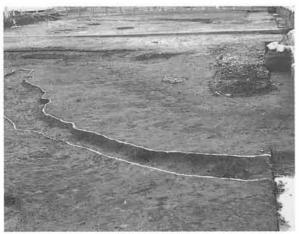


C-1全景(南東から)





M-1遺物出土状態(南から)



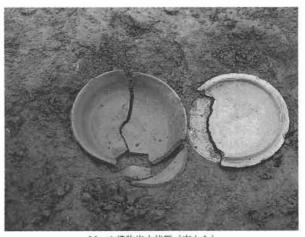
M-1全景 (北東から)



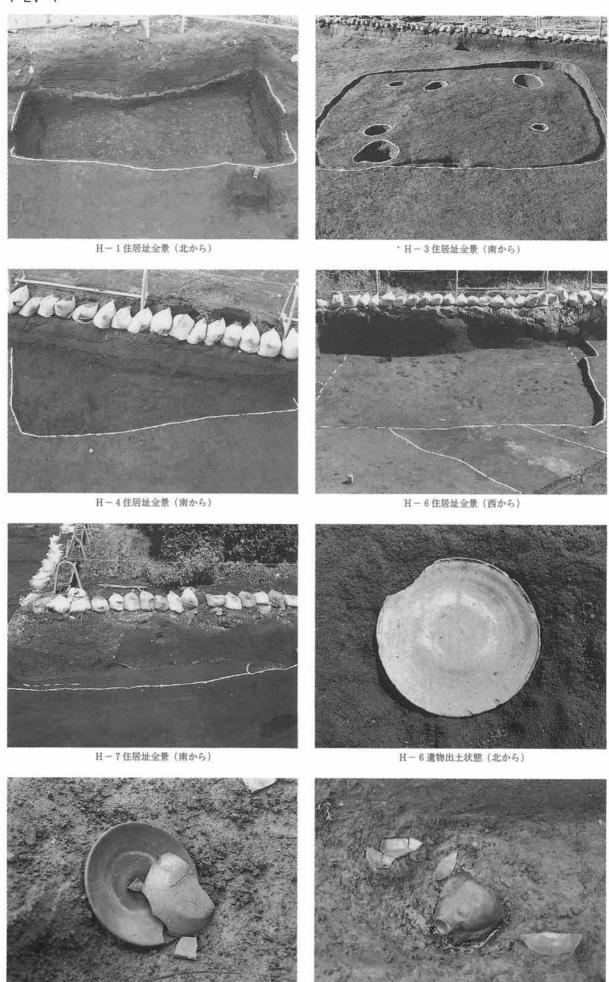
M-1遺物出土状態(東から)



M-1勾玉出土状態(南から)

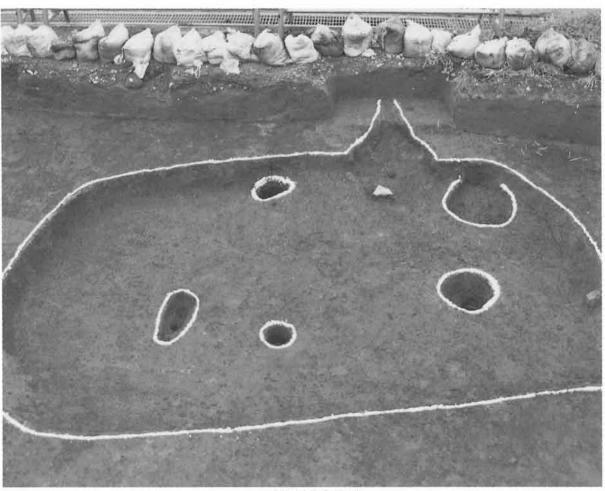


M-1遺物出土状態(南から)

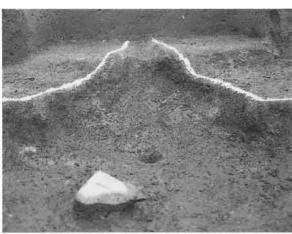


H-7遺物出土状態(東から)

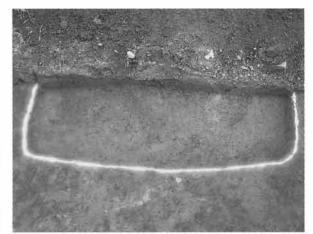
H-7遺物出土状態(東から)



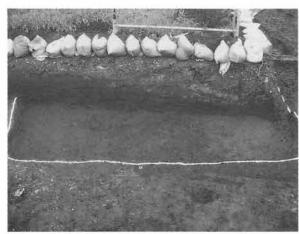
H-8住居址全景(西から)



H-8 竜全景 (西から)



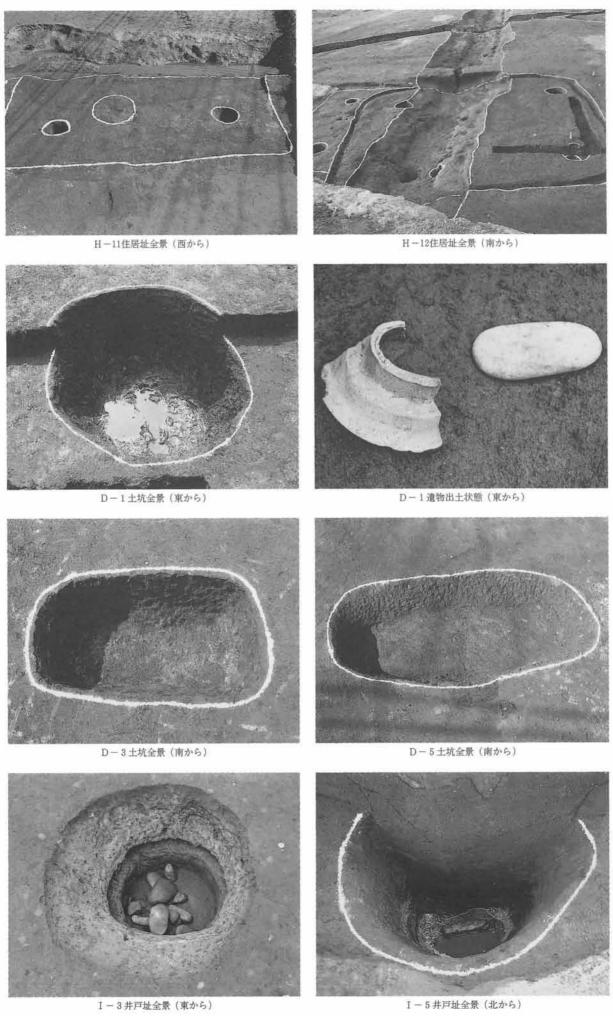
H-9住居址全景(北から)



H-10住居址全景(西から)



H-10遺物出土状態(南から)





W-2・3・4・5溝址全景 (北西から)

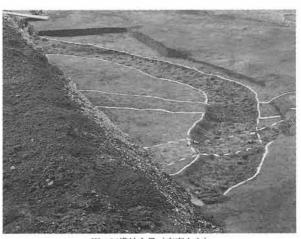


W-3溝址石出土状態(西から)

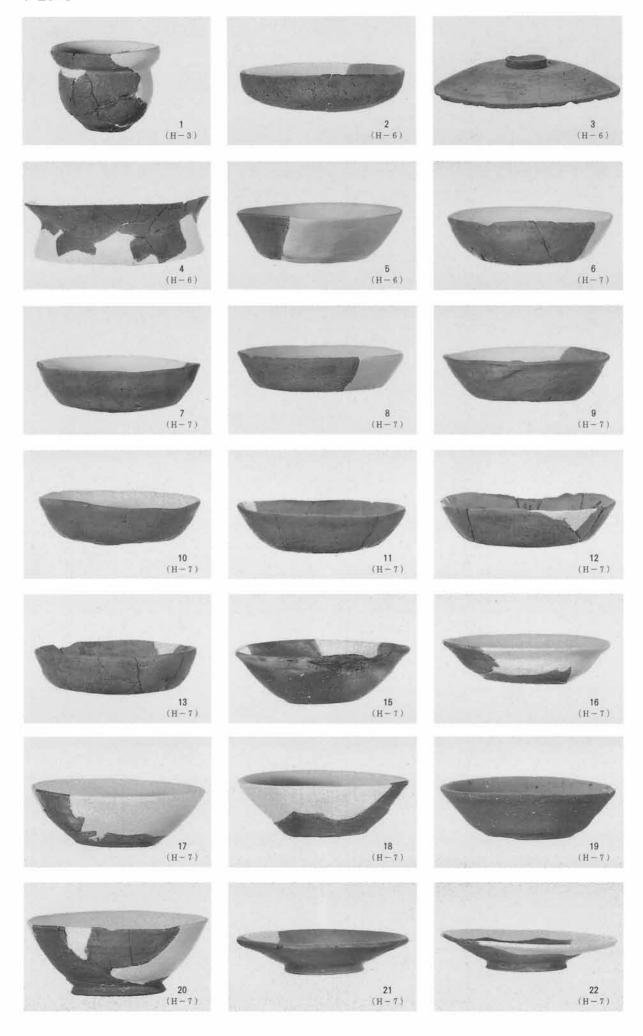


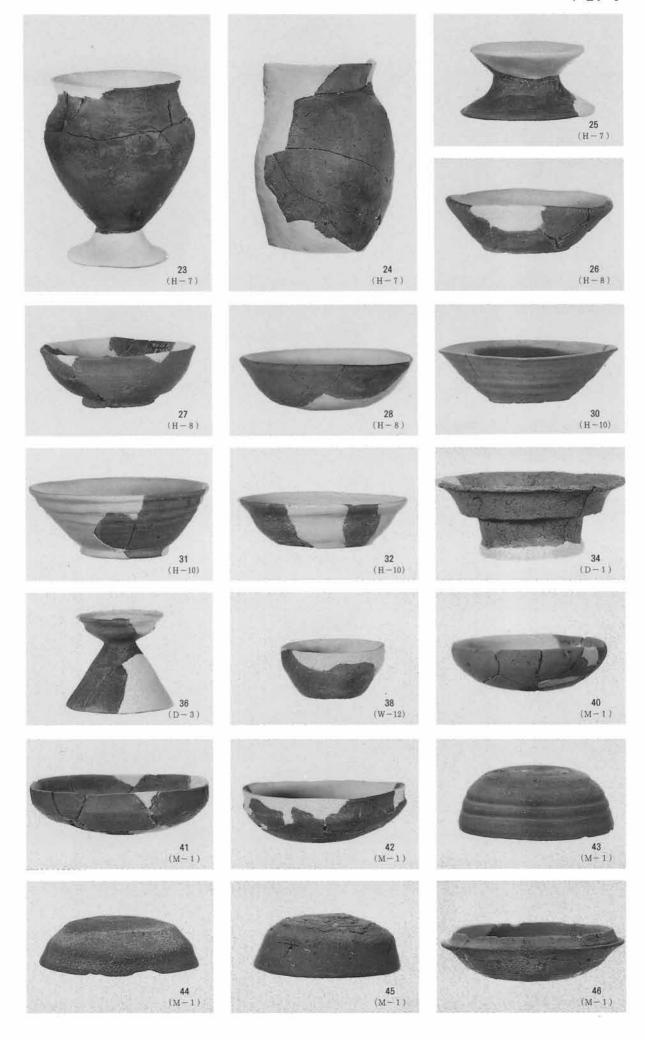


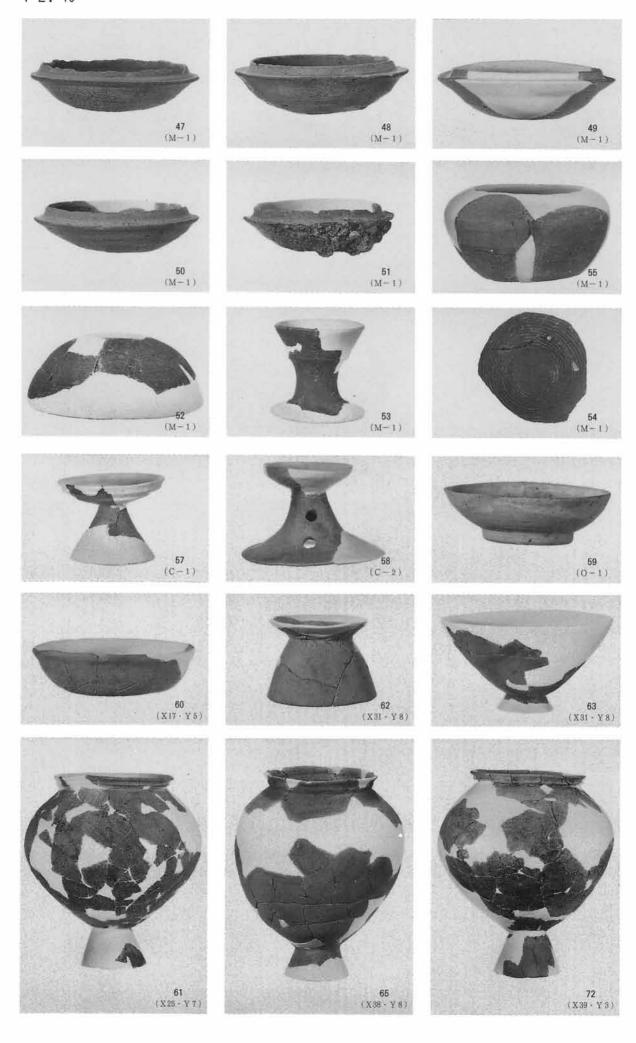
W-11溝址全景(南から)

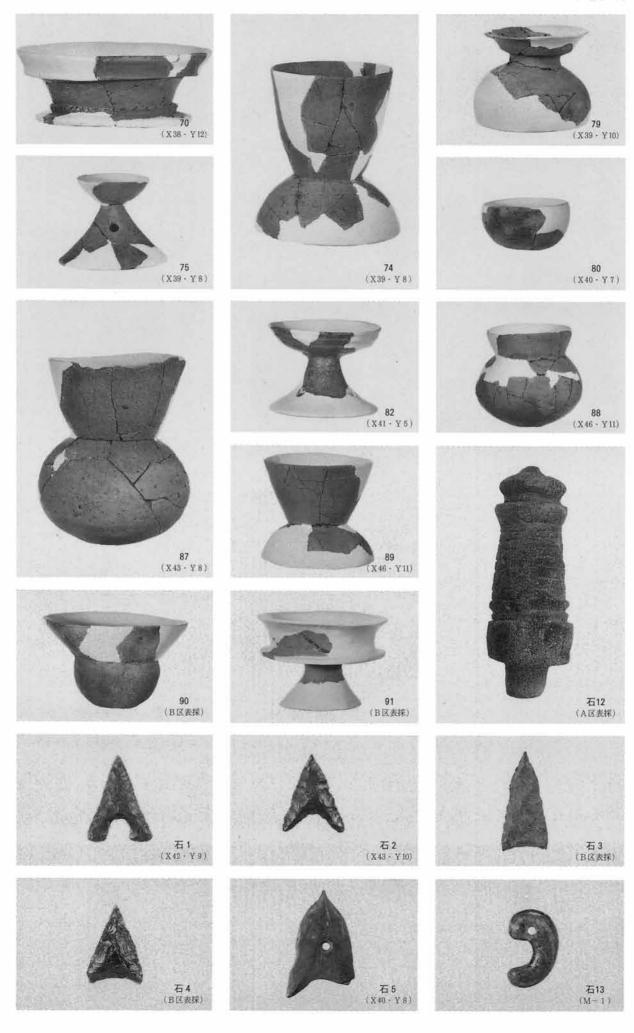


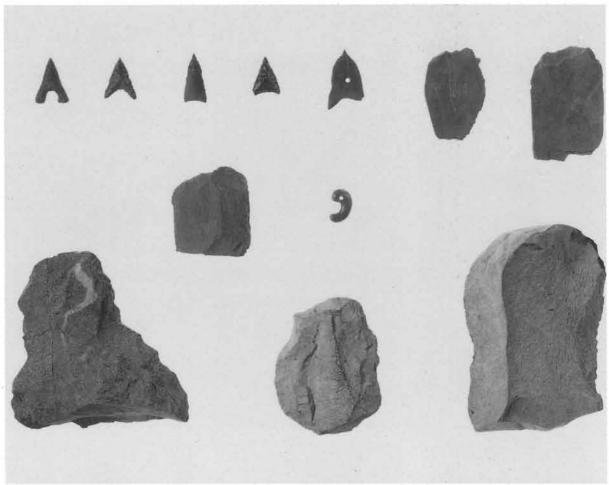
W-14溝址全景(南東から)



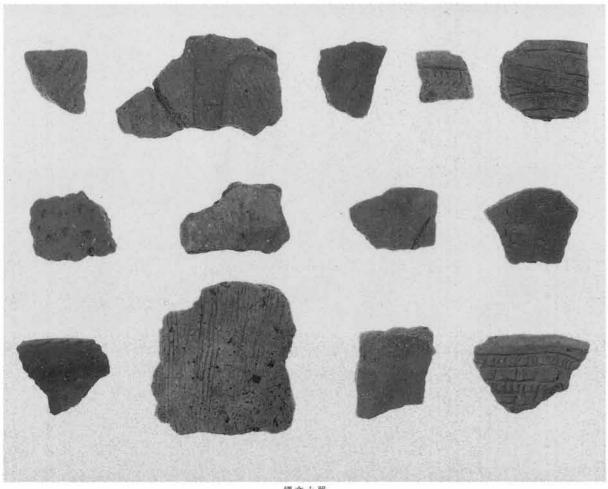








石器・石製品



縄文土器

V 六供下堂木Ⅲ遺跡

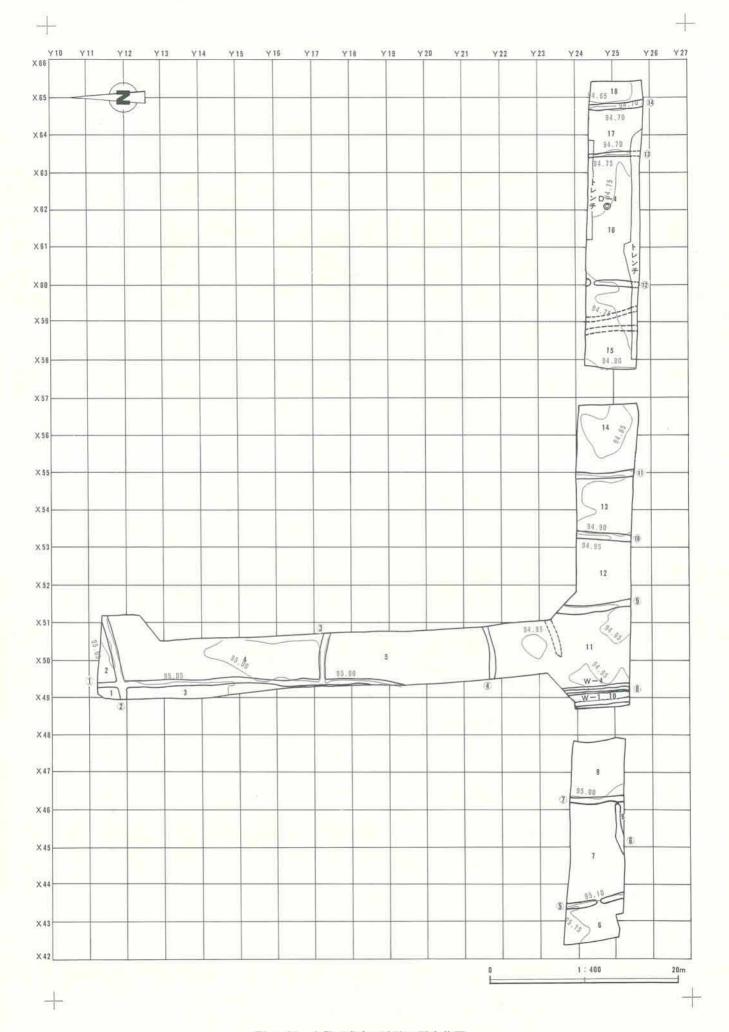


Fig. 24 六供下堂木Ⅲ遺跡A区全体図

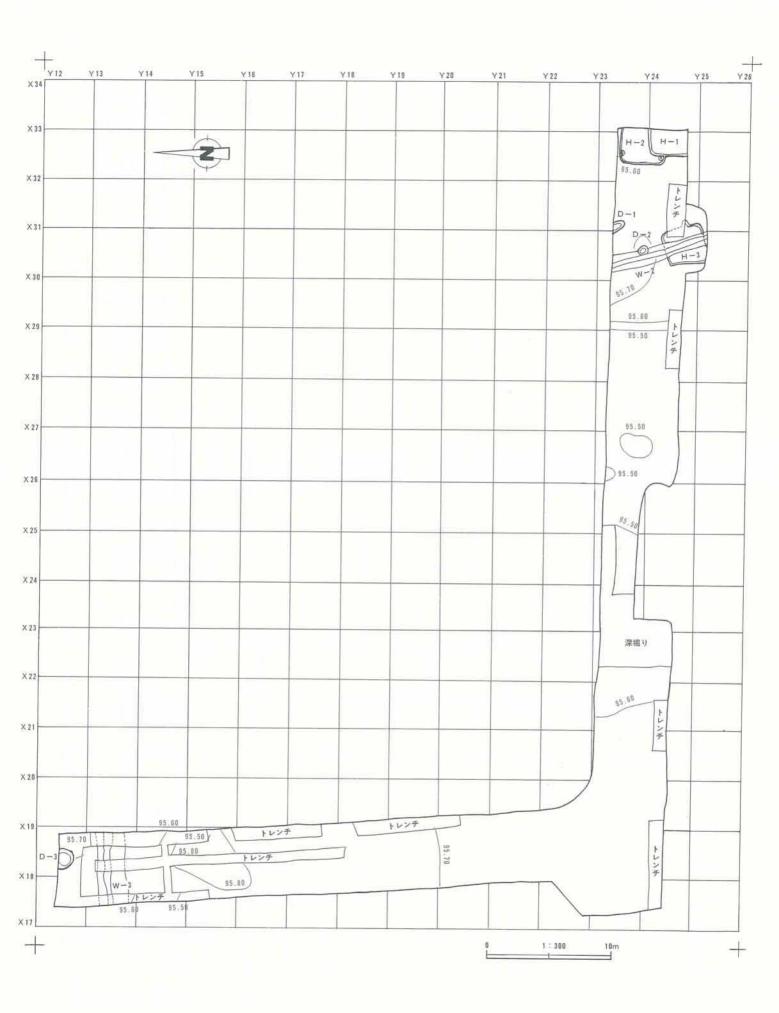


Fig. 25 六供下堂木Ⅲ遺跡B区全体図

1 遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構は、平安時代の竪穴住居址3軒、溝址4条、土坑4基、平安時代後期の水田址18枚である。

調査地は現在、主に水田として利用されており、開発等による攪乱などの影響はあまり見られず、遺構の残存 状態は比較的良好であった。試掘調査の結果では、A・B区とも水田が検出されることが予想されたが、B区の 東端部や南端部の微高地で住居址や土坑、溝址などが確認された。B区のそれ以外の地点は低地でありAs-Bの 堆積も認められたが、水田畦畔等の遺構は確認されなかった。A区は全面的にAs-B(浅間 B テフラ 1108年) 下水田(平安時代後期)で、東西方向 4 本、南北方向10本の畦畔が検出された。以下は、各遺構の概要である。

(1) 住 居 址

H-1号住居址(B区、Fig. 29·31、PL. 14·18)

位置 X32~33・Y24グリッド 面積 [6.69] m 方位 N-89°-W 形状 住居の南及び東側が調査区外のため不明。東西 [2.28] m、南北 [3.15] m、壁現高22cm。 床面 ほぼ平坦な床面。堅緻面は認められず。 電址 検出されず。 重複 H-2号住居址を切る。 遺物 総数212点。うち土器3点を図示した。 備考

覆土や出土遺物から本住居址は10世紀後半と考えられる。

H-2号住居址(B区、Fig. 29·31、PL. 14·18)

位置 X32~33・Y23~24グリッド 面積 [10.92] m 方位 N-88°-W 形状 住居の東側が調査区外のため不明。東西 [2.89] m、南北3.98 m、壁現高14cm。 床面 ほぼ平坦な床面。堅緻面は認められず。

竈址 検出されず。 **重複** H-1号住居址に切られる。 **遺物** 総数62点。うち土器1点を図示した。 **備 考** 覆土や出土遺物から本住居址は10世紀後半と考えられる。

H-3号住居址(B区、Fig. 29·31、PL. 15·18)

位置 X30~31・Y24~25グリッド 面積 9.70㎡ 方位 N-78°-E 形状 方形。東西3.81m、南北3.24mを測る。壁現高19㎝。 床面 ほぼ平坦で堅緻な床面。 電址 東壁やや南寄りに検出。 遺物 総数140点。うち土器 5 点を図示した。 備考 覆土や出土遺物から本住居址は10世紀前半と考えられる。

(2) 土 坑

D-1 号土坑 (B区、Fig. 29、PL. 16)

位置 X30~31・Y23グリッド 形状等 北側が調査区外のため形状は不明。長径 [94] cm、短径80 cm、深さ35 cmを測る。 遺物 総数9点。 備考 覆土や出土遺物から平安時代と考えられる。

D-2 号土坑 (B区、Fig. 29、PL. 16)

位置 X30・Y23~24グリッド **形状等** 楕円形。長径 85cm、短径62cm、深さ12cmを測る。 **重複** W-2 号溝址を切る。 **遺物** なし。 **備考** 層位からHr-FA降下以降、As-B降下以前と考えられる。

D-3 号土坑 (B区、Fig. 29、PL. 16)

位置 X18・Y12グリッド 形状等 北側が調査区外のため形状は不明。長径152cm、短径 [110] cm、深さ36 cmを測る。 遺物 総数43点。 備考 覆土や出土遺物から平安時代と考えられる。

D-4 号土坑 (A区、Fig. 29、PL. 16)

位置 X5・Y24グリッド 形状等 円形。長径86cm、短径77cm、深さ46cmを測る。 遺物 なし。

備考 層位からAs-B降下以降と考えられる。

(3) 溝 址

W-1号溝址(A区、Fig. 30、PL. 16)

位置 X48~49・Y23~25グリッド 形状等 A区西側に位置し、南北に走る。南及び北側は調査区外に出る。 断面は逆台形を呈し、幅0.40~0.48m、深さ21cm、長さ [5.88] mを測る。 遺物 総数1点。 備考 層位から As-B降下以降と考えられる。

W-2号溝址(B区、Fig. 30、PL. 16)

位置 X30・Y23~25グリッド 形状等 B区西端部に位置し南北に走る。南及び北側は調査区外に出る。断面は緩やかなU字形を呈し、幅0.94~1.50m、深さ0.29cm、長さ [7.74] m を測る。 重複 H-3号住居址を切り、D-2号土坑に切られる。 遺物 総数84点。 備考 覆土や出土遺物等から平安時代と考えられる。 W-3号溝址(B区、Fig. 30・31、PL. 16・18)

位置 X17~18・Y13グリッド 形状等 B区北端部に位置し、東西に走る。東及び西側は調査区外へ出る。 断面は緩やかな逆台形を呈し、幅2.17~2.37 m、深さ48cm、長さ [5.70] mを測る。 遺物 総数99点。うち土器 1点を図示した。 備考 覆土や出土遺物等から平安時代と考えられる。

W-4号溝址(A区、Fig. 30、PL. 16)

位置 X49・Y23~25グリッド **形状等** A区西側に位置し、南北に走る。南及び北側は調査区外に出る。断面は逆台形を呈し、幅0.30~0.35 m、深さ24 cm、長さ6.73 mを測る。 **遺物** なし。 **備考** 層位からAs-B降下以降と考えられる。

(4) 水 田 址

今回調査区A区において確認されたAs-B下水田址(平安時代)は計18枚で、東西方向4本、南北方向10本、計14本の畦畔に囲まれて検出された。As-B(浅間Bテフラ)の堆積は厚く、畦畔の残存状態は良好であった。 畦畔のうち3箇所からは水口も検出された。また各水田面の凹凸は少なくほぼ平坦であり、耕作痕、足跡等は検出されなかった(各水田址、畦畔のデータについてはTab. 5・6参照)。

2 成果と問題点

今回の発掘調査では、調査区A区のAs-B(浅間Bテフラ:1108年)下より水田址が、B区のAs-B混土層下の黒褐色土層から平安時代の住居址が検出された。As-B下水田址は、利根川西岸の高崎市日高遺跡群、西島遺跡、前橋市前箱田遺跡、柳橋遺跡、五反田遺跡、東岸の中大門遺跡、橳島・川端遺跡、公田池尻遺跡、公田東遺跡、宮地中田遺跡、六供下堂木田遺跡などで確認されている。また住居址に関しても、前項にて述べたとおり、多くの周辺遺跡の検出事例に加え、最寄りの六供下堂木田遺跡並びに六供中京安寺遺跡においてほぼ同時期の住居址の検出が確認されている。その両遺跡に北東、南西から挟まれるように位置するのが本遺跡であり、6m道路部分というごく限られた範囲の調査でありながら、水田址、住居址に加え、土坑、溝址等、内容の多い貴重な資料を提供してくれた。

以下、今回の調査によって明らかになったことを、時代区分、遺構種別にまとめてみたい。

(1) 水 田 址

①水田の形態

今回検出された水田面は計18枚、検出面西端部標高95.17mを最高点とし東端部標高94.67mを最低点とする東西比高差は0.5m、西から東へ約5.43/1000の勾配がある。また、北端部標高95.07mを最高点とし南端部標高94.95mを最低点とする南北比高差は0.12m、北から南へも約2.13/1000の勾配を持つ。したがって検出面には北西から南東にかけてごく緩やかな傾斜が認められることになる。検出畦畔は東西方向4本、南北方向10本の計14本、調査範囲が幅6mの道路部分に限られていたため、調査区を横切るものがほとんどであった。その走行方位は東西が東0°を基準に北へ16°南へ7°、南北が北0°を基準に東へ5°西へ12°の範囲でほぼ正方位を指している。交差部分は2箇所で認められ、うち1箇所はほぼ直交している。また形状は下幅59~89cm、上幅18~49cm、高さ4~9cmを測り、偏平な台形状もしくはカマボコ型を呈してる。後世の圧縮により変形したものとみられる。

水田区画は、完全な一区画をなすものは検出されなかったため推定の域を出ないが、No. 4、5、7、11の検出面は周囲の畦畔の走行方向から一区画の形は長方形を呈するものと想定できる。なお面積については、検出部分の測定にとどまった。

②配 水

検出水田面は西端から東端まで約5.43/1000、北端から南端まで約2.13/1000の勾配があり、北西から南東へごく緩やかに傾斜している。各水田の南、東側と接する水田もほとんどが $1 \sim 7$ cm低くなっており、この高低差を利用し各水田への給水を行っていたと考えられる。 3 箇所から検出された水口も東西もしくは南北いずれかの水田面に開口し、開口部の東側、南側で $1.5 \sim 4$ cm低くなっており、勾配を視野に入れた水田づくりがなされたことを物語っている。ただし、他に水口は確認されなかったことから、本遺跡における水田への給水方法は、標高の高い上流の水田が満水になった後、畦畔をオーバーフローして順次標高の低い水田方向へ流し込む「かけ流し」の方法をとっていた可能性が強いと考えられる。畦畔No. 8 と切り合って検出された溝址についてはその覆土から中世以降のものと考えられ、本水田址との関連性はうすいものとみられる。

本水田址のほぼ南に隣接する六供下堂木II遺跡のAs-B下水田址が、本水田址とほぼ同方位の畦畔と勾配を呈することから一連のものとみられ、その水源もさらにその北西に位置していたと推測される。いずれにしても、本遺跡地は地質的にみて低湿地、湧水帯であることから、耕作に必要な水の供給には事欠かなかったものと思われる。

③条里制について

県内の水田址の発掘調査は高崎・前橋を中心に近年盛んに行われてきている。最近北関東自動車道建設等、開

発に伴う発掘調査の急増が、さらにこの傾向に拍車をかけている。本遺跡周辺では、利根川西岸の高崎市日高から矢中地区にかけての高崎市東部地区がよく知られているが、その調査研究の中心は条里的地割の存在についてといってもさしつかえないであろう。高崎市では、日高遺跡、西島遺跡群を中心とした日高地区、矢中遺跡、宿大類遺跡群の位置する大類地区、長野北遺跡群のある浜川地区にAs-B下条里水田址の検出をみることができる。また前橋市では、1993~1995年に調査された同市東部の中原遺跡群で平安初期(818年:弘仁9年)の大地震に起因する洪水層に覆われた条里制水田址が確認された。さらに本遺跡の南東3.5kmに位置する宮地中田遺跡においても、昨年度の調査により条里制地割の存在が明らかにされた。

本遺跡は、6 m道路部分という限られた範囲ながら、その東西・南北は約154m、56mと比較的広範囲に及んでいる。また、南端にほぼ接する六供下堂木II遺跡からも条里制地割の可能性のあるAs-B下水田址が検出されていることから、条里的地割確認の決め手となり得る坪境畦畔検出に期待が持たれた。しかし、検出された畦畔14本は、うち最も大きいものでも上幅49cm、下幅89cm、高さ9cmの範囲を出なかった。また走行方位等から六供下堂木II遺跡で坪境と仮定された畦畔との関連性について検証を試みたが、特に繋がりを強調できるものは認めらず、本水田址では坪境畦畔とみられるものを確認することはできなかった。

坪境畦畔が確認されない以上、本水田址を条里的地割と断定することは難しい。しかし、その区画性、周辺遺跡の調査成果、迅速図や現地表における地割、地名等から、その可能性について検討を加えていくことはできる。まずその区画性に着目してみる。完全な一区画が検出されなかったため検証することはできないが、ほとんどの畦畔がほぼ正方位へ直線的に走行し、うち1箇所はほぼ直交していることから、計画的に区画された可能性がうかがえる。隣り合う畦畔の間隔は東西走行のもので17.52~21.74m、南北では4.6~13.03mの範囲にある。この数値をみるかぎり、そこに坪割における半折型、長地型等の条里制に起因する一定の規則性を見いだすことは難しい。しかし、このことが本水田址における条里的地割の可能性を否定する根拠となり得ない。例えば条里制水田址が確認された高崎市西島遺跡では、坪境畦畔並びに水路がつくる一町方格には高い規則性が認められるが、坪内の方格には、曲がった長地の長辺を小畦畔がさらに区切るなど不正規な坪割が目につく。本水田址では隣り合う南北畦畔間隔のうちN0、5・7間10.63m、N0、8・9間8.22mと部分的ではあるが長地型の規格にほぼ適う数値が得られた箇所もあり、上記の事例と考え併せれば長地型坪割の一部である可能性を残している。

ところで、地籍図、小字名調書によると本遺跡から北西約1kmには、「市之坪」の字名が見える。これは明らかに条里に由来する地名であり、「一ノ坪」との読み替えを想定できる。そして迅速図からこの「市之坪」の南境を通る道が東西方向に、小字中大門と小字中京安寺の境の道が南北に直線的に走っており、条里的地割の面影を残している。しかし、低地を流れる小河川は様々に屈曲し、それに応じて地割も規則性をもっておらず、条里的地割を踏襲していたかどうかについては疑問が残る。このことをさしひいても、少なくともこの地付近にまで条里制の及んでいた公算は強いと考えられる。また本遺跡から南西約500mに位置する中大門遺跡から検出された水田址は坪境畦畔こそ確認されなかったが、利根川西岸の条里水田址と同様な性格をもっており、利根川西岸に条里的地割が存在していた可能性を強く示唆している。さらに、坪境畦畔が確認された宮地中田遺跡をはじめとする本遺跡以南の周辺遺跡に展開する数々の検出例も、それを裏付けるようにそのほとんどが条里的性格を伴うものである。こうした周辺の状況と重ね合わせてみると、本遺跡にも条里的地割が及んでいた可能性は高いものと考えられる。

(2) 住 居 址

本遺跡で検出された竪穴住居址は3軒のみで、これらは全てB区東端部の微高地に集中している。年代は10世紀前半~10世紀後半(平安時代)であった。H-1号住居址はH-2と重複しており、H-1が新しいが、検出された土器からどちらも年代は10世紀後半と考えられるため、H-2を廃棄後、あまり期間を置かずにH-1が造られたと考えられる。H-2では住居南西隅と北西隅に柱穴が検出された。 $H-1\cdot2$ ともに一部のみの調査のため、竈・貯蔵穴等は確認されなかった。H-3は東壁に竈が設置された住居で、10世紀前半の遺物が出土し

た。W-2に住居の中心を切られてはいるが、唯一ほぼ全体が検出された住居である。床面は堅緻に締まっており、竈の燃焼部には灰の下に支柱穴が残存していた。規模はH-2の西辺と同様に一辺が4mにも満たないものであった。これらの住居は六供中京安寺遺跡B区の平安時代住居址群とほぼ同年代のものであり、本遺跡においても該期に生活の跡を認めることができた。

(3) 土 坑

検出された 4 基のうち D-1 ・ 3 号土坑は遺物や層位などから平安時代後期のものと想定される。 D-1 は住居と同様 B 区東端部に、 D-3 は北端部に位置する。これらの使用目的は不明だが住居址等との関連が考えられる。 D-2 ・ 4 は遺物も無く、正確な年代確定には至らなかった。

(4) 溝 址

合計 4 条の溝址を検出。A 区のW-1 · 4 号溝址はAs-B テフラ降下以降のもので、遺物等も少なく正確な年代は不明である。W-2 号溝址はB 区東端部に位置し、南北に流れる。H-3 号住居を壊して造られているため 10 世紀前半以降のものと考えられる。通水の痕跡が認められないことから、何らかの区画溝である可能性が高い。W-3 はB 区北端部の微高地に位置し、東西に流れる。年代は出土遺物や層位から平安時代後期と考えられる。これも通水の痕跡が無いため、何らかの区画溝と想定される。北端部は北方向に地形が低地から台地に移行する地点であり、D-3 やW-3 の周辺で土器片の散布が見られることなどから、北側の調査区外に集落跡が想定される。

(5) 水田址と住居址との関連性

水田址西端より道路をはさみ西、南へL字に広がる調査区B区では、その東端部のAs-B混土層直下から 3 軒の住居址が検出された。検出位置の標高は95.6~95.67mの範囲にあり、水田検出面の最大標高値より0.43~0.5 m高くなっている。掘削の際、As-Bの堆積がほとんど認められなかったことからも、これらの住居址は低湿地に広がる水田面よりわずかに高い微高地に立地していたことがわかる。この微高地に住居をつくり生活域とし、北西から南東にかけての低湿地を生産域として水田耕作を展開していた状況がうかがえる。もちろん、今回検出された水田址と住居址が直接結びつけられるものである否かは今回の調査データからは結論づけることはできず、今後も慎重な検討を要するところである。しかし、現地形においても微高地は宅地、畑として利用され、低地部は水田もしくは水がたまりやすい湿地となっていることから、この当時の地形利用が現在もほぼ踏襲されていると言える。

(6) ま と め

以上のことから本遺跡についてまとめてみる。

- ・調査区A区はAs-B(浅間Bテフラ:1108年)によって埋没した平安時代の水田址である。
- ・水田址から条里的地割は確認されなかったが、畦畔の走行性や周辺の状況から条里水田であることはほぼ間 違いないであろう。
- ・調査区B区より検出された3軒の住居址は10世紀代(平安時代)のものである。
- ・標高に合わせて低地を水田域、微高地を居住域に分けている。

今回の調査により、平安時代の水田址と住居址が検出されたことは、大きな成果であるといえる。その相互関係については確固たる根拠を導き出すことはできないが、ともにAs-B降下以前の遺構が区域別に隣接した形で検出されたことで、当時の人々の地形を利用した土地活用の様子の一端をうかがい知ることができた。本遺跡の北東にほぼ接する六供下堂木II遺跡、南西の六供中京安寺遺跡、中大門遺跡においてもほぼ同時期の水田址もしくは住居址が検出されており、それらとの関連性については今後の周辺発掘調査の動向と併せて検討していく必

要があるだろう。As-B下水田址については、条里的地割の確認には至らなかったが、畦畔の走行性や水田の区 画性、迅速図、現地表等から読みとれる周辺状況などから条里的地割存在の可能性があるため、周辺地域からの 調査例を集成検討すること、更に周辺の調査を進めて行く中でより確実な成果を期待したい。

今回の発掘調査は、調査範囲が限られ局部的な資料を得るにとどまった。しかし、成果とともに多くの課題点 を提供してくれた。これらの課題点が今後の周辺地域の発掘調査の進展により、ひとつでも多く解明されていく ことを願ってやまない。

《参考文献》

弥永 貞三 ほか

1967 『歴史時代(下)』「条里制の諸問題」

落合 重信

日本歴史叢書 『条里制』

『群馬県史』通史編 2

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1983 『中大門遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1995 『中原遺跡群』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1997 『宮地中田遺跡』

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1997 『六供下堂木Ⅱ遺跡』

Tab. 4 六供下堂木Ⅲ遺跡土器観察表

.15. E3	th 1 64 PP	00 W/	大き	\$ \$		成・	整 形 方 法	# */	
番号	出土位置	器影	口径	器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	口 縁・胴 部	底 部	備考	Fig.
1	H - 1	須恵高台碗	[14.7]	5.4	①中粒②良好③にぶい黄橙④3/4	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。	高台後付け。	31
2	H - 1	土 師 甕	[20.2]	(20.6)	①細粒②良好③にぶい橙④1/4	外反。横撫で。篦削り。	欠損。		.31
3	H - 1	須恵高台碗	[13.8]	4.4	①中粒②良好③灰白④1/2	端部外反。轆轤。	欠損。	高台後付け。	31
4	H - 2	須 恵 坏	13.4	4.1	①中粒②良好③灰①1/3	端部外反。轆轤。	回転糸切り未調整。	内外面に炭化物付着。	31
5	Н – 3	須恵高台碗	15.0	5.2	①細粒②良好③灰褐④3/4	端部外反。轆轤。	回転糸切り未調整。	高台後付け。内面にスス付着。	31
6	Н — 3	須恵高台碗	[14.2]	(4.7)	①粗粒②良好③灰白④2/3	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。	高台欠損。	31
7	H - 3	土 師 甕	[19.6]	(7.2)	①細粒②良好③赤褐④口縁部1/4	外反。横撫で。篦削り。	欠損。	口縁~胴部一部。	31
8	H - 3	土 師 甕	[20.6]	(6.0)	①細粒②良好③赤褐④口縁部1/5	外反。横撫で。篦削り。	欠損。	口縁~胴部一部。	. 31
9	H - 3	灰釉高台碗	[13.8]	4.9	①細粒②極良③灰白④1/4	外傾。轆轤。篦削り。撫で。	回転糸切り未調整。高台後付け。	丸石 2 号窯式。釉薬浸し浸け。	31
10	W - 3	須惠坏	[12.8]	3.7	①中粒②良好③灰①1/4	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		31
11	X17Y12	須惠坏	[14.2]	4.6	①中粒②良好③にぶい褐④1/5	外傾。轆轤。篦削り。	回転糸切り未調整。		31
12	X 17 Y 12	土 師 甕	[21.6]	(8.5)	①細粒②良好③橙④口縁部1/8	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。	頚部に沈線あり。	31
13	X 18 Y 12	土師坏	[11,1]	3.5	①中粒②良好③にぶい橙④1/3	外傾。横撫で。篦削り。	節削り 。		31
14	B区覆土	灰釉高台皿	[13.0]	(2.2)	①細粒②極良③黄灰④底部1/4	口縁部欠損。轆轤。	回転糸切り未調整。高台後付け。		31
15	X 19 Y 18	須 恵 坏	12.8	3.6	①細粒②良好③灰④1/2	外傾。聽轤。	回転糸切り未調整。		31
16	B区覆土	灰釉高台皿	[11.6]	(2.0)	①細粒②極良③灰白④底部1/4	口縁部欠損。轆轤。	回転糸切り未調整。高台後付け。		31

注)表の記載は以下の基準で行った。

①胎土は、細粒 (0.9mm以下)、中粒 (1.0~1.9mm以下)、粗粒 (2.0mm以上)とした。

②焼成は、極良・良好・不良の3段階。

③大きさの単位はcmであり、現存値を[]、復元値を()で示した。

Tab. 5 水田址計測表:平安時代(六供下堂木Ⅲ遺跡)

番号	面積	長 辺	短 辺	標	高	差 (m) .	形状	水 口
	(m²)	(m)	(m)	N W	ΝE	SW	SE	形机	水 口
1	(2.80)	(2.24)	(1.32)	95.14	95.07	95.11	95.08		-
2	(6.68)	(6.60)	(1.98)	95.07	_	95.07	95.03	-	_
3	(19.03)	(24.83)	(1.23)	95.09	95.09	_	95.04	_	_
4	(106.56)	21.74	(7.32)	95.05	95.03	95.00	95.00	方形	_
5	(93.98)	17.52	(5.56)	94.99	94.96	95.00	95.00	方形	_
6	(22.48)	(6.16)	(3.66)	95.17	95.16	95.12	95.11	_	E = 1
7	(55.06)	10.63	(5.96)	95.00	95.07	95.08	95.03	方形	W = 1 S = 1
8	(1.14)	(4.12)	(0.46)	95.11	95.06	_	95.04		N = 1
9	(33.34)	(6.13)	(5.69)	95.01	94.99	95.02	95.00	_	
10	(9.58)	(6.48)	(1.68)	94.99	95.02	94.96	94.94	_	_
11	(102.33)	(15.14)	8.22	95.00	94.98	94.95	94.95	方形	_
12	(40.93)	7.12	(5.90)	94.97	94.95	94.94	94.94	_	_
13	(35.12)	6.22	(5.96)	94.91	94.94	94.92	94.92	_	
14	(45.41)	(7.28)	(6.28)	94.89	94.86	94.88	94.87	_	_
15	(49.36)	(8.90)	(5.66)	94.85	94.78	94.80	94.71	_	E = 1
16	(73.90)	13.03	(5.58)	94.77	94.78	94.68	94.75	_	W = 1
17	(25.75)	(5.60)	4.60	94.70	94.68	94.70	94.70	_	_
18	(12.92)	(5.58)	(2.58)	94.68	94.67	94.68	94.67	_	

註)表の記載は以下の基準で行った。

Tab. 6 畦畔計測表:平安時代(六供下堂木Ⅲ遺跡)

番号	グリッド	方 位	上幅	下 幅	高さ	方 向	調査区
1	X 47 Y 11 ~ 19 G	N - 5 ° - E	48	89	5	南北	A区
2	X 48 ~ 51 Y 11	N - 78° - E	49	84	6	東西	A区
3	X 49 · 50 Y 17	N - 83° - W	42	78	7	東西	A区
4	X 4 9 · 5 0 Y 2 1	N - 74° - E	34	78	4	東西	A区
5	X 4 3 Y 2 3 ~ 2 5	N - 12° - W	36	68	6	南北	A区
6	$X44 \sim 46 Y24 \cdot 25$	N - 82° - E	46	73	5	東西	A区
7	X 4 6 Y 2 3 ~ 2 5	N - 3 ° - W	30	71	7	南北	A区
8	X 4 9 Y 2 3 ~ 2 5	N - 4 ° - W	42	70	6	南北	A区
9	.X 5 1 Y 2 3 ~ 2 5	N - 5 ° - W	36	86	6	南北	Α区
10	X 5 3 Y 2 3 ~ 2 5	N - 4 ° - E	32	88	9	南北	A区
11	$X54 \cdot 55 Y23 \sim 25$	N - 3 ° - W	26	68	7	南北	A区
12	X59.60 Y 24 · 25	N - 3 ° - E	34	76	4	南北	A区
13	X 6 3 Y 2 4 · 2 5	N - 2 ° - W	18	59	5	南北	A区
14	X 6 4 Y 2 4 · 2 5	N - 4 ° - W	28	68	7	南北	A区

註)表の記載は以下の基準で行った。

各項目の計測については1/40の縮尺で行った。

上幅、下幅、高さの単位はcmである。

①水田面積の算出については 1/40の縮尺でプラニメーター(ローラー極式・レンズ式)による 3 回計測平均値を使用した。なお、小数点以下 3 桁は四捨五入した。

②確認値は()で示した。

3 付編 六供下堂木Ⅲ遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

Ⅰ. 六供下堂木Ⅲ遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

群馬県域の後期更新世以降に形成された地層中には、浅間山、赤城山、榛名山など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の姶良カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出時代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの関係を遺跡で求めることで、遺構や遺物包含層の年代を知ることができるようになっている。

前橋台地上に位置する六供下堂木Ⅲ遺跡の発掘調査では、年代の不明な土層や畦畔遺構が検出された。そこで、土層の堆積年代に関する資料を得るために、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行い、地質層序を記載することになった。調査分析の対象となった地点は、B区東側深掘地点、B区L字角地点、A区駐車場西地点、A区西地点の4地点である。

2. 土層の層序

(1) B区東側深掘地点①

B区西側深掘地点では、下位より黄色砂質土(層厚14cm以上)、灰色軽石に富む暗灰色土(厚層 7 cm, 軽石の最大径 3 mm)、黒色土(層厚28cm)、黒褐色土(層厚11cm)、黒色土(層厚 8 cm)、黄色軽石を多く含む黒色土(層厚15cm,軽石の最大径11mm)、成層したテフラ層(層厚11cm)、暗灰色土(層厚 6 cm)、黄色細粒火山灰層(層厚0.8cm)、灰褐色土(層厚 5 cm)、暗灰褐色土(層厚 6 cm)、灰色がかった褐色砂質土(層厚 6 cm)、暗灰色土(層厚11cm)が認められる(図 1)。

これらの土層のうち、成層したテフラ層のすぐ下位の黒色土中に含まれる軽石は、スポンジ状に比較的よく発泡しており、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その層位や岩相などから、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間 C 軽石(As-C,新井,1979)に由来すると考えられる。

そのすぐ上位の成層したテフラ層は、下位より桃 褐色細粒火山灰層(層厚 2 cm)、かすかに成層した 黄灰色砂質細粒火山灰層(層厚 3 cm)、かすかに成 層した灰色砂質細粒火山灰層(層厚 6 cm)から構成 されている。このテフラ層は、その層相から6世紀 初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフ ラ層(Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、 1989、町田・新井、1992)に同定される。その上位 の黄色細粒火山灰層は、層位や層相から6世紀中葉 に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ層 (Hr-FP、新井、1962、坂口、1986、早田、1989、 町田・新井、1992)の最上部に同定される。 また、灰色がかった褐色砂質土中に多く含まれる灰

また、灰色がかった褐色砂質土中に多く含まれる灰色粗粒火山灰は、その層位や岩相から、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B,新井,1979)に由来すると考えられる。

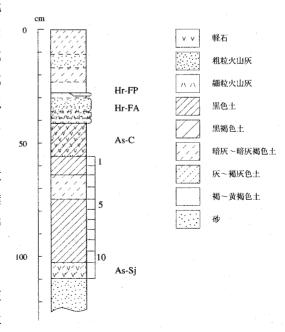


図1 B区東側深掘地点の土層柱状図 数字はテフラ分析の試料番号

(2) B区L字角地点②

B区L字角地点では、下位より黒色土 (層厚3cm 以上)、成層したテフラ層(層厚5.3cm)、黒灰色土 (層厚1cm)、黄白色細粒火山灰層(層厚0.2cm)、 黒色土 (層厚0.1cm)、黄色シルト層 (層厚3cm)、 灰色粘質土 (階厚19cm)、暗灰色粘質土 (層厚8cm) 、成層したテフラ層 (層厚12cm)、暗褐色砂質土 (層厚17cm)、黄褐灰色土(層厚4cm)、黄色がかっ た褐灰色土 (層厚13cm)、褐灰色土 (層厚12cm)、 暗灰色表土(層厚12cm)が認められる(図2)。 これらの土層のうち、成層したテフラ層は、下位よ り桃褐色細粒火山灰層(層厚 2 cm)、白色軽石混じ り黄灰色粗粒火山灰層(層厚0.3cm,軽石の最大径 4 mm)、かすかに成層した灰色砂質細粒火山灰層 (層厚3cm)から構成されている。このテフラ層は、 その層相からHr-FAに同定される。その上位の黄 色細粒火山灰層は、その層位や層相からHr-FPの 最上部に同定される。したがって、そのすぐ上位 にある黄色シルト層は、その層位や層相などから、 Hr-FPの堆積に伴って発生した火山泥流堆積物 (早田、1989) と考えられる。

また、上位の成層したテフラ層は、下位より青灰 色細粒火山灰層(層厚0.2cm)、黄色粗粒火山灰層 (層厚0.5cm)、青灰色細粒火山灰層(層厚0.3cm)、 暗灰色粗粒火山灰層(層厚2cm)、橙色粗粒火山灰 層(層厚3cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚4cm)、 桃色細粒火山灰層(層厚2cm)からなる。このテフ ラ層は、層相からAs-Bに同定される。

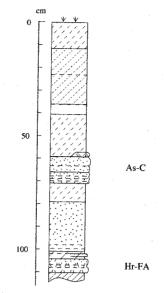


図2 B区L字角地点の土層柱状図

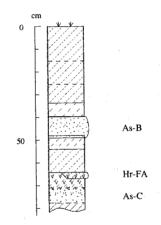


図3 A区駐車場西地点の土層柱状図

(3) A区駐車場西地点③

A区駐車場西地点では、下位より黒灰色粘質土(層厚3 cm以上)、黄灰色軽石に富む灰色砂質土(層厚7 cm, 軽石の最大径7 mm)、下位の黄灰色軽石混じり暗褐色土(層厚4 cm)、黄色砂質細粒火山灰層(層厚3 cm)、灰色粘質土(層厚10 cm)、色調が特に暗い暗灰色土(層厚5 cm)、青灰色細粒火山灰層(層厚0.2 cm)、層理が乱れた黄灰色粗粒火山灰層(層厚8 cm)、暗灰色土(層厚6 cm)、黄灰色土(層厚8 cm)、灰色土(層厚10 cm)、暗灰色表土(層厚15 cm)が認められる(図3)。発掘調査では、青灰色細粒火山灰層の直下から畦畔遺構が検出されている。

これらの土層のうち、灰色砂質土中に含まれる黄灰色軽石は、スポンジ状に比較的よく発泡しており、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その層位や岩相などから、As-Cに由来すると考えられる。また、黄色砂質細粒火山灰層は、層相からHr-FAに同定される。その上位の青灰色細粒火山灰層は、層相からAs-Bの最下部に同定される。したがって、発掘調査で検出された畦畔の層位は、As-Bの直下にある。なお、その直上の層理が乱れた黄灰色粗粒火山灰層は、As-B主体部が何らかの攪乱を受けたものと考えられる。

(4) A 区西地点(4)

A区西地点では、下位より黄灰色軽石に富む黒色土(層厚 5 cm,軽石の最大径 7 mm)、成層したテフラ層(層厚 2.8cm)、灰色土(層厚 13 cm)、黒褐色土(層厚 5 cm)、成層したテフラ層(層厚 2 cm以上)が認められる(図 4)。発掘調査では、青灰色細粒火山灰層の直下から畦畔遺構が検出されている。

黒色土中に含まれる黄灰色軽石は、スポンジ状に比較的よく発泡しており、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その層位や岩相などから、As-Cに由来すると考えられる。下位の成層したテフラ層は、下部の黄褐色細粒火山灰層(層厚0.8cm)と上部の黄灰色砂質細粒火山灰層(層厚2cm)から構成される。このテフラ層は、その層相からHr-FAに同定される。

上位の成層したテフラ層は、下部の青灰色細粒火山灰層(層厚0.3cm)と上部の灰色粗粒火山灰層(層厚2cm以上)からなる。このテフラ層は、層相からAs-Bの下部に同定される。したがって、本地点において検出された畦畔遺構の層位も、As-B直下にあると考えられる。

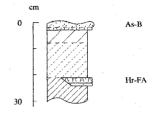


図4 A区西地点の土層柱状図

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

B区東側深掘地点において、暗灰色土中に多く含まれる軽石とAs-Cとの間に、ほかのテフラの降灰層準があるかどうかを確かめるために、基本的に5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきの5点についてテフラ検出分析を行った。

テフラ検出分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3)80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

表1 六供下堂木Ⅲ遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
B区西側深掘	1	+	灰白	3.2
	3	_	_	
	5	_	-	
	7	-	_	_
	. 9	_		_

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 最大径の単位は, mm.

表 2 六供下堂木Ⅲ遺跡の屈折率測定結果

地点	試 料	鉱物	斜方輝石(γ)
B区西側深掘	11	орх>срх	1.707-1.711 (1.708-1.710)
opx:斜方輝石	, cpx:	単斜輝石.	屈折率の測定は位相差法
(新井, 1972)	による	. () は,	modal rangeを示す.

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に表す。分析では、試料番号1を除いて、軽石粒子は検出されなかった。試料番号1には、スポンジ状に比較的よく発泡した灰白色軽石(最大径3.2mm)が少量含まれている。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その層位や岩相などから、上位に降灰層準のあるAs-Cに由来すると考えられる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

B区東側深掘地点の暗灰色土(試料番号11)中に多く含まれる軽石の起源を求めるために、屈折率測定を 行い、示標テフラとの同定を行った。測定は位相差法(新井, 1972)による。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表 2 に示す。B区東側深掘地点の試料番号11には、重鉱物として、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.707-1.711(modal range:1.708-1.710)である。このテフラは、腐植質土壌の基底部にあることを合わせて考慮すると、約1.1万年前に浅間火山から噴出した浅間総社軽石(As-Si, 早田, 1990, 1996)に由来すると考えられる。

5. 小 結

六供下堂木Ⅲ遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より、浅間総 社軽石(As-Sj, 1.1万年前)、浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀 初頭)榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)が検出された。発 掘調査で検出された畦畔遺構の層位は、As-Bの直下にある。

《文献》

新井 房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.

新井 房夫 (1962) 斜方軽石・角閃石の屈折率によるテフラの同定ーテフロクロノロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.

新井 房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.53, p41-

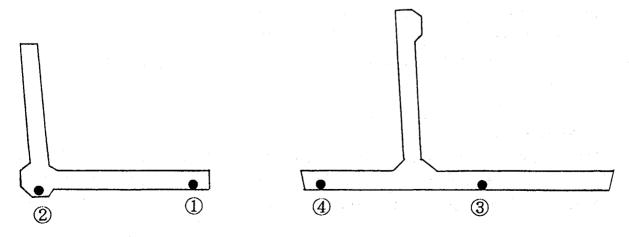
町田 洋・新井 房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒牧北原遺跡・今井神社 古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

早田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土、群馬県史通史編、1, p.37-129.

早田 勉 (1996) 関東地方〜東北地方南部の示標テフラの特徴-とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて-. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, W., p.256-267.

六供下堂木Ⅲ遺跡A・B区における調査対象地点①~④



Ⅱ. 六供下堂木Ⅲ遺跡におけるプラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である。(藤原・杉山、1984)

六供下堂木Ⅲ遺跡の発掘調査では、As-B直下から畦畔遺構が検出された。ここでは、同遺構における稲作の 検証を主目的として分析を行った。

2. 試 料

分析試料は、B区東側深掘地点、B区L字角地点、A区駐車場西地点、A区西地点の4地点から採取された計19点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原、1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間前後乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1 g に対して直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02 g 添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20μ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。 試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位: 10^5 g)をかけて、単位面積で層厚 1 cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ(赤米)の換算係数は2.94、ヒエ属(ヒエ)は8.40、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、タケ亜科(ネザサ節)は0.48である。

4. 分析結果

水田跡(稲作跡)の検討が主目的であることから、同定及び定量はイネ、ヒエ属科、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科(おもにネザサ節)の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図 $1\sim4$ に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

表1 前橋市、六供下堂木Ⅲにおけるプラント・オパール分析結果

検出密度(単位:×100個/g)

八紫百紫八 54 1		В	区東側	深掘	・レン・	チ		В	区L字	2角地	点		ΑD	区駐車 :	場西地	点		A区型	地点
分類群\試料	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	1	2
イ ネ								113	128	30	53	15	75	52	53	15		8	68
ヒエ属型	7	8	7														8		
ヨ シ 属	52	8	30	38	38	22		15	23		53	8	23		30		75	75	- 30
ススキ属型	60	15	15	15	61	7		23	15	30	15	8	8	7	15	23	15	15	8
タケ亜料	141	189	67	53	46	7		91	53	8	30	8	15	15	30		15	30	45

推定生産量(単位:kg/m²·cm)

イネ		3.33	3.77	0.88	1.55	0.44	2.22	1.54	1.55	0.45		0.22	2.01
ヒエ属型	0.63 0.63 0.63										0.63		
ョ シ 属	3.29 0.48 1.89 2.39 2.40 1.42	0.95	1.43		3.32	0.48	1.43		1.90		4.74	4.74	1.91
ススキ属型	0.74 0.19 0.19 0.19 0.75 0.09	0.28	0.19	0.37	0.19	0.09	0.09	0.09	0.19	0.28	0.19	0.19	0.09
タケ亜料	0.68 0.91 0.32 0.25 0.22 0.04	0.43	0.25	0.04	0.14	0.04	0.07	0.07	0.14		0.07	0.14	0.22

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

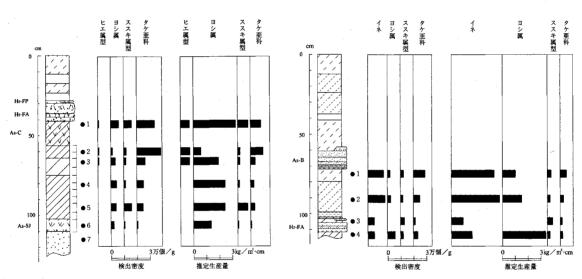


図1 六供下堂木Ⅲ、B区東側深掘地点における プラント・オパール分析結果

図2 六供下堂木Ⅲ、B区L字角地点における プラント・オパール分析結果

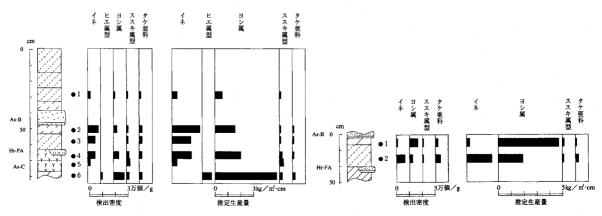


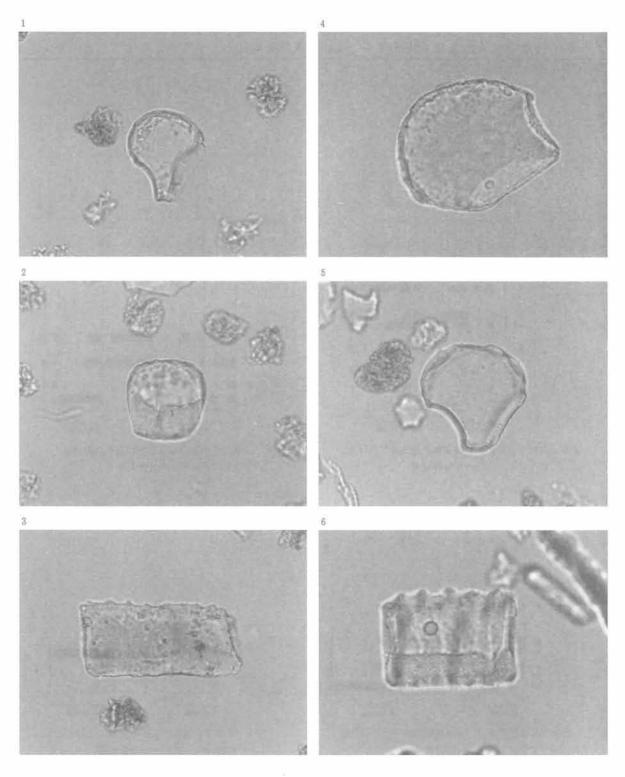
図3 六供下堂木Ⅲ、A区駐車場西地点における プラント・オパール分析結果

図4 六供下堂木Ⅲ、A区西側地点における プラント・オパール分析結果

植物珪酸体の顕微鏡写真

(倍率はすべて400倍)

No.	分 類 群	地 点	試料名
1	イネ	D区L字角	1
2	イネ(側面)	D区L字角	1
3	キ ビ 族 型	D区L字角	3
4	ョ シ 属	D区西壁	3
5	ススキ属型	D区L字角	3
6	ネザサ節型	D 区 西 壁	2



5. 考 察

(1) 水田跡の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料 1 g あたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断している。ただし、関東周辺では、密度が3,000個/g 程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/g として検討を行った。次表に各地点・各層準におけるイネの検出状況を示す。

表 2 六供下堂木皿遺跡におけるイネのプラント・オパールの検出状況 記号: ◎5,000個/g以上, ○3,000個/g以上, △3,000個/g未満 ×未検出, -該当試料なし

豆 淮 \ 加 占	В	<u>X</u>	ΑÞ	ζ
層準 \ 地 点	東側深掘	L字角	駐車場西	西
As-B直下層	_	0	0	Δ .
Hr-FA上層	_		0	\bigcirc
Hr-FA直下層	×	0	(_
As - C 混 層	×	_	Δ	_
As-C直下層	×	_	×	_

1) As-B直下層

B区L字角地点、A区駐車場西地点、A区西地点について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、B区L字角地点では、密度が11,300個/g、A区駐車場西地点でも7,500個/g とかなり高い値である。したがって、これらの地点では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

A区西地点では、密度が800個/gと低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層からの混入の可能性も否定できない。ここでは、ヨシ属が卓越していることから、同地点の周囲はヨシ属などが多く生育する湿地的な状況であったものと推定される。

2) Hr-FA上層

B区L字角地点、A区駐車場西地点、A区西地点について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、B区L字角地点では密度が12,800個/gとかなり高い値であり、その他の地点でも $5,200\sim6,800$ 個/gと高い値である。したがって、これらの地点では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

3)Hr-FA直下層

B区東側深掘地点、B区L字角地点、A区駐車場西地点について分析を行った。その結果、B区L字角地点とA区駐車場西地点からイネが検出された。密度はいずれも5,300個/gと高い値である。したがって、これらの地点では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。B区東側深掘地点では、イネは検出されなかった。

4) As-C混層

B区東側深堀地点とA区駐車場西地点について分析を行った。その結果、A区駐車場西地点からイネが検出された。密度は1,500個/gと低いことから、上層などからの混入の可能性が考えられる。

5) As-C直下層

B区東側深掘地点とA区駐車場西地点について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

(2) 堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。おもな分類群の推定生産量によると、イネ以外の分類群では全体的にヨシ属が優勢であり、とくにAs-C混層およびその下層では圧倒的に卓越していることが分かる。

以上のことから、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、Hr-FA直下層の時期にそこを利用して調査区の一部で水田耕作が開始されたものと推定される。

6.まとめ

プラント・オパール分析の結果、畦畔遺構が検出された浅間Bテフラ(As-B, 1108年)直下層からは、イネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA、6世紀初頭)直下層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、Hr-FA直下層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

《参考文献》

藤原 宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9, p.15-29

藤原 宏志・杉山 真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析 による水田址の探査-、考古学と自然科学,17,p.73-85

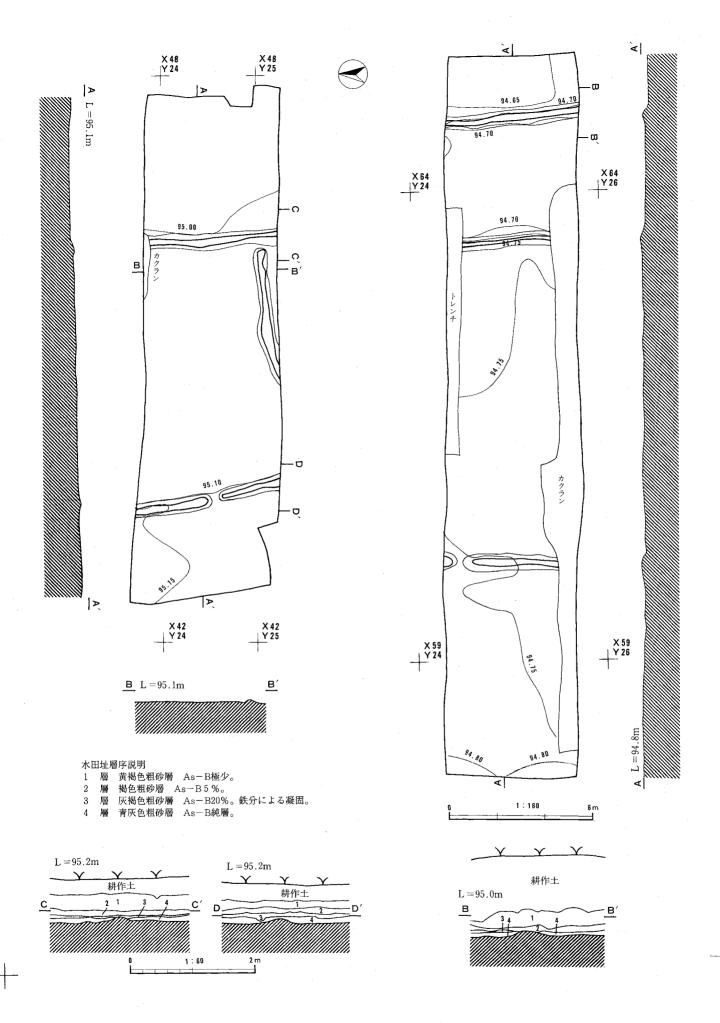


Fig. 26 水田址 (1)

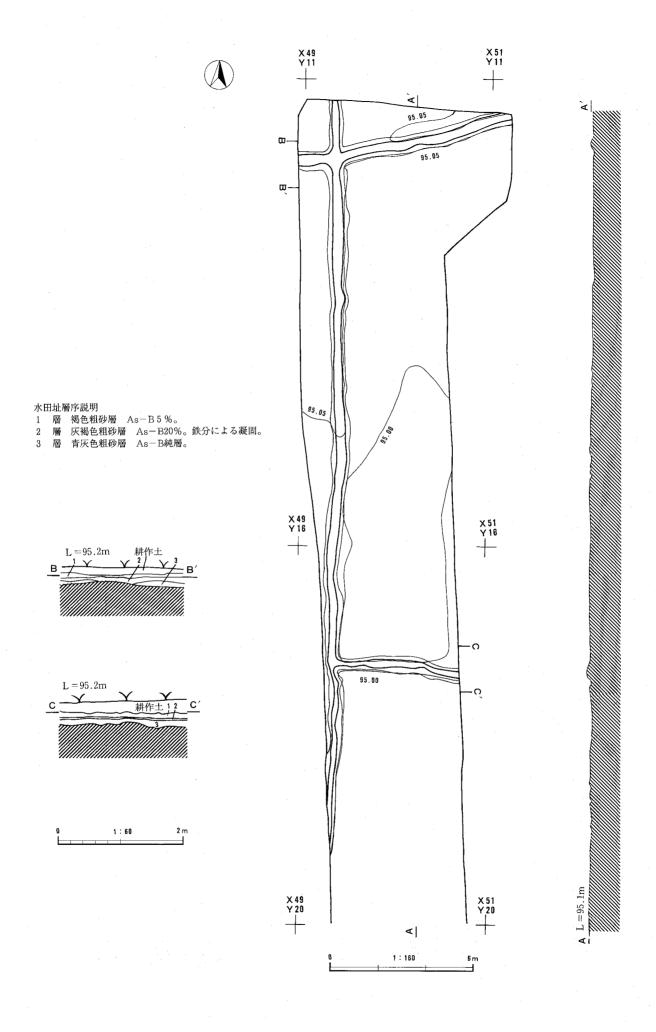


Fig. 27 水田址 (2)

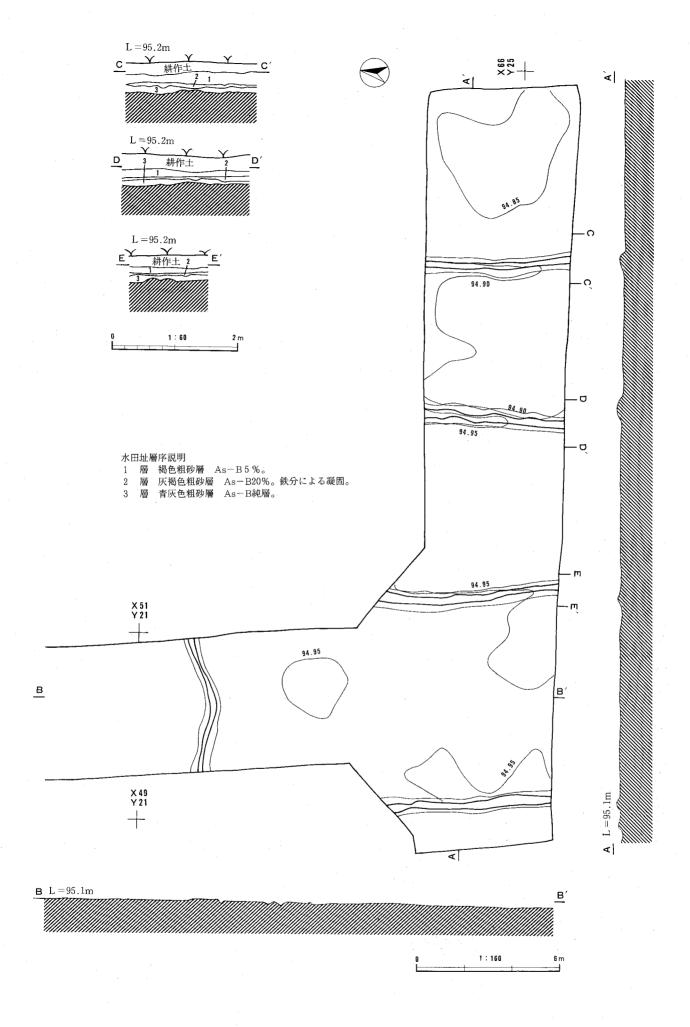


Fig. 28 水田址 (3)

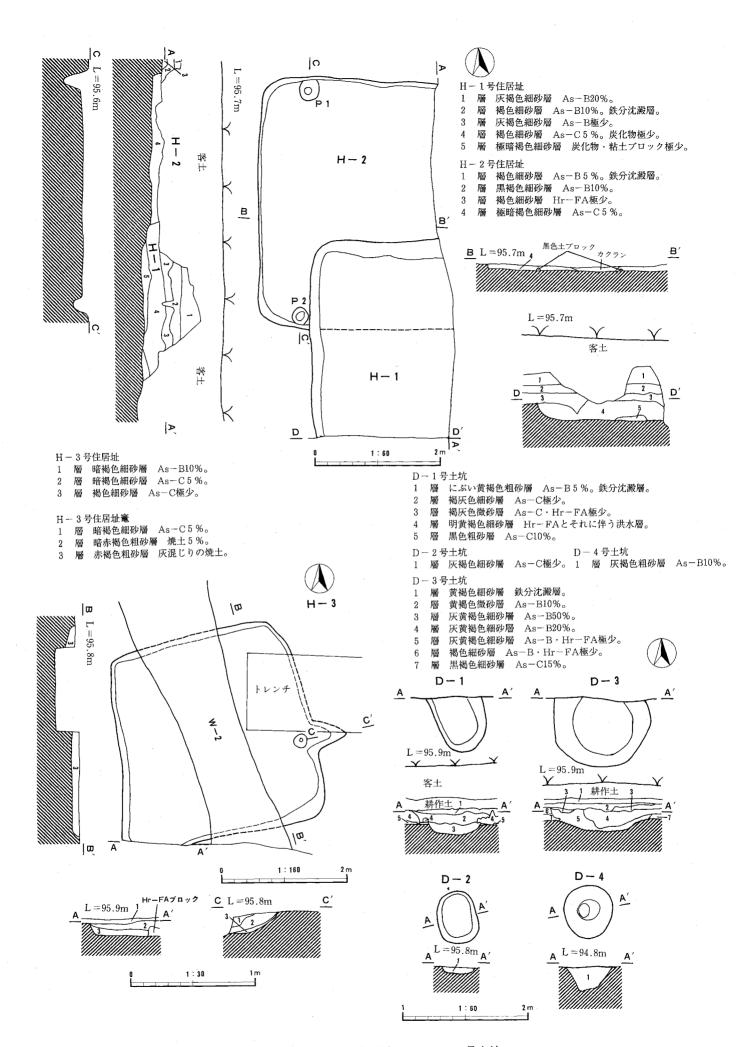


Fig. 29 H-1~3号住居址, D-1~4号土坑

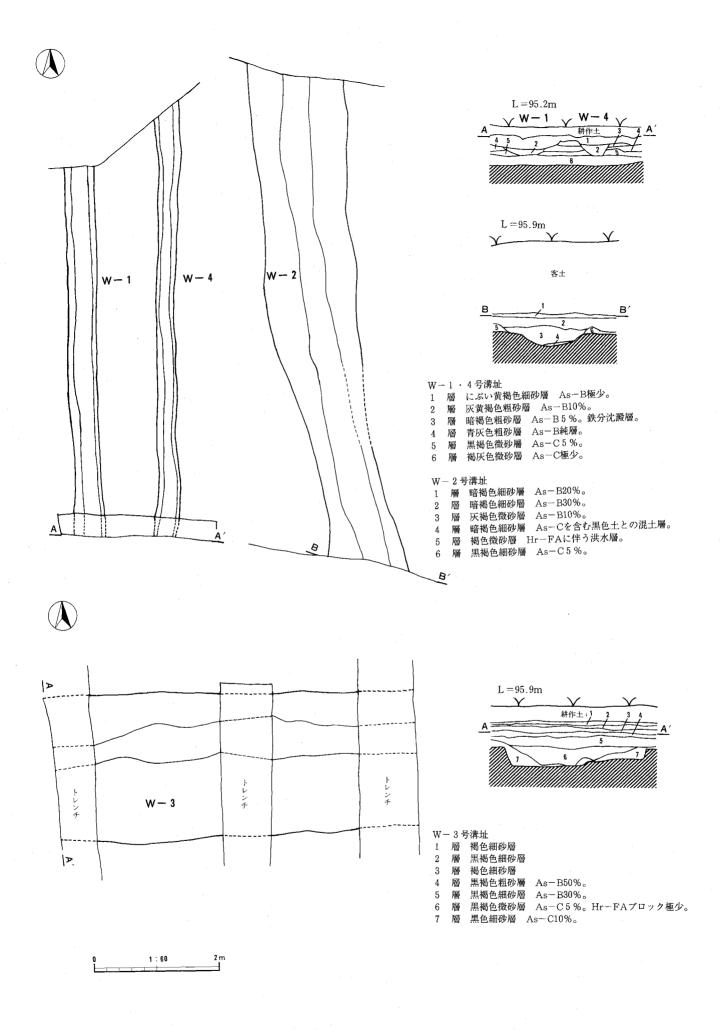


Fig. 30 W-1~4号溝址

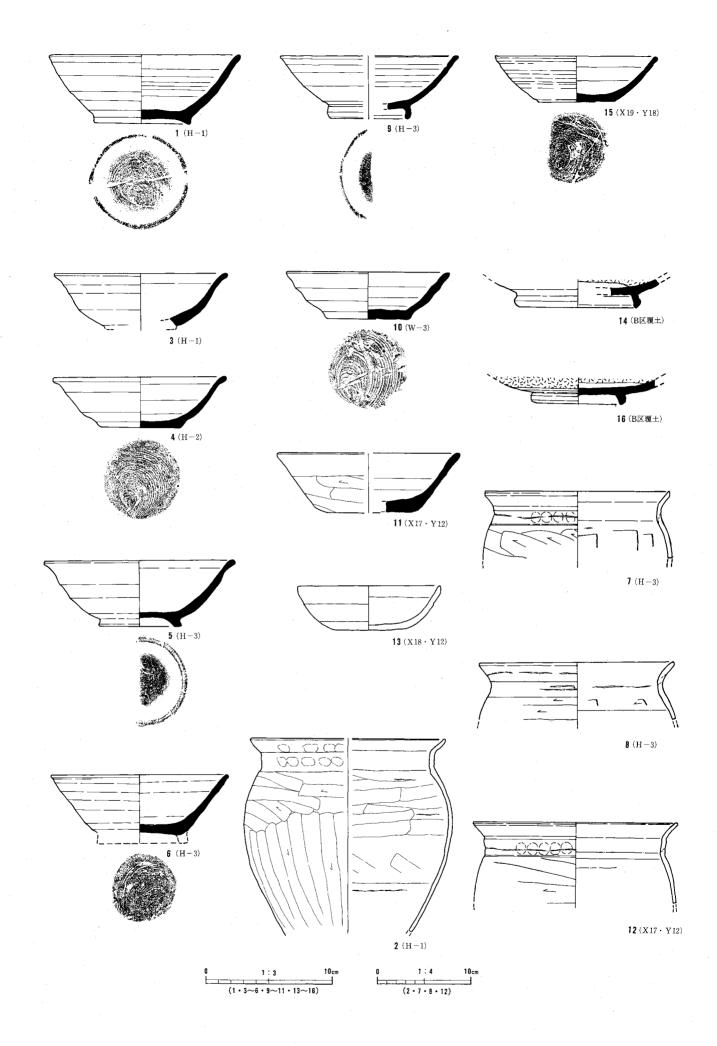


Fig. 31 六供下堂木Ⅲ遺跡出土の土器



A区全景(水田) (北から)



B区全景(住居群)(北東から)



H-1・2住居址全景(西から)



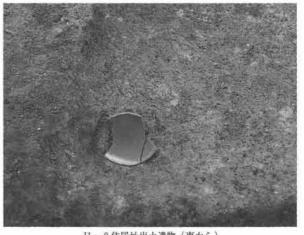
H-1住居址南北セクション (西壁)



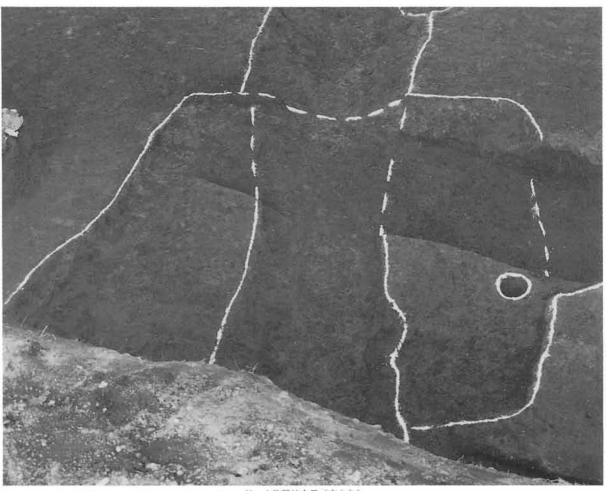
H-1住居址出土遺物 (西から)



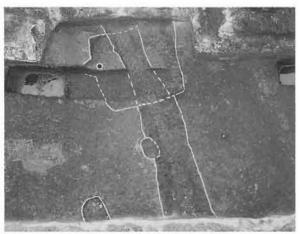
H-2住居址ベルト東西セクション (南壁)



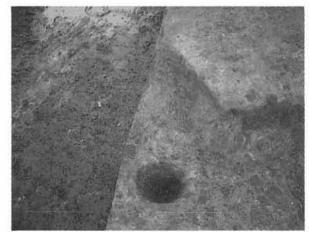
H-2住居址出土遺物(東から)



H-3住居址全景(南より)



H-3住居址、W-2溝址全景(北より)



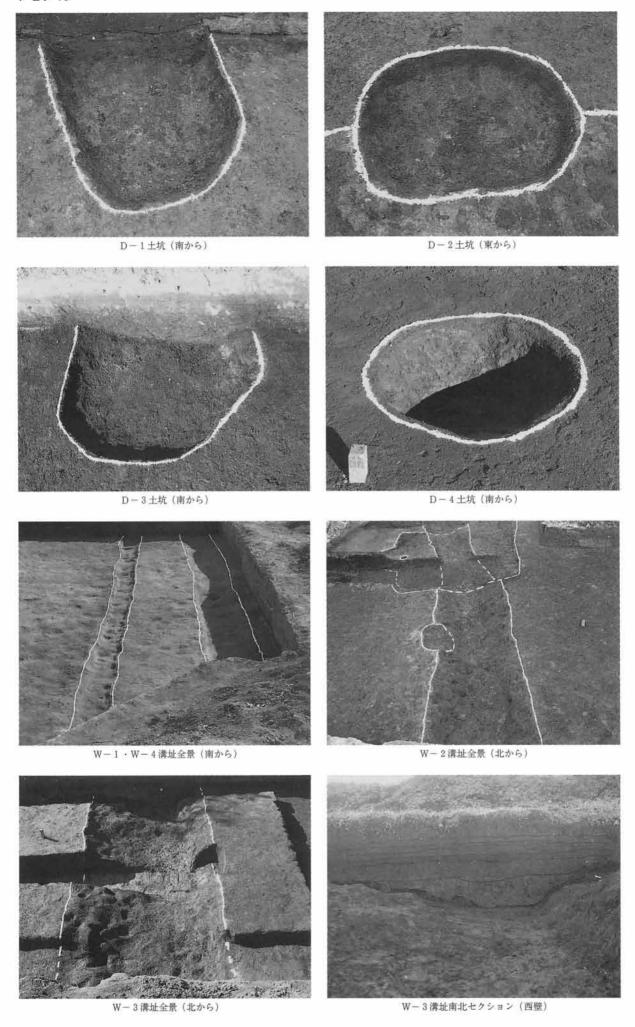
H-3住居址竈(西から)

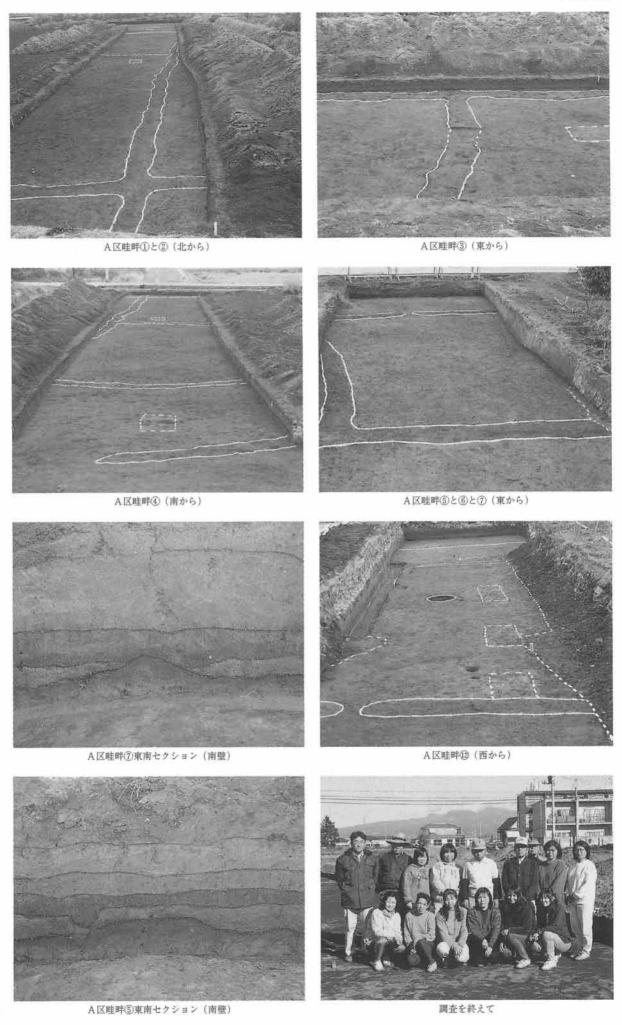


H-3住居址遺物出土状態(西から)



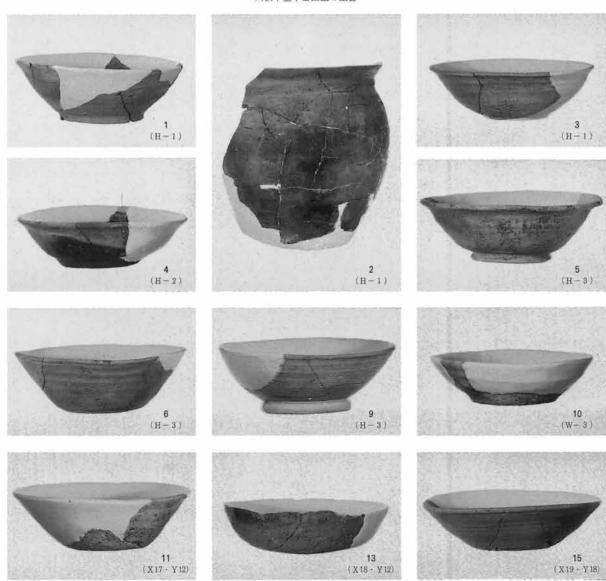
H-3住居址遺物出土状態(南西から)







六供下堂木Ⅲ出土の土器



フリガナ	ロックナカキョウアンジイセキ ・ ロックシモドウギサンイセキ
書 名	六供中京安寺遺跡・六供下堂木Ⅲ遺跡
副 書 名	前橋都市計画事業六供土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷 次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	吉田 聖二 林 信也
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0007 群馬県前橋市上泉町664-4
発行年月日	西暦1998年 3 月25日
	I

フリガナ	フリガナ	-	- F	位	置	超水 操門	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	北緯	東 経	調査機関	調宜即惧	調宜原囚
ロックナカキョウアンジ	マエバシシロックマチ	10001	0.11.0.0	00001/50//	100001/00//	19970520	0.000 2	前橋都市計画事業
六供中京安寺	前橋市六供町	10201	9 H 2 6	36° 21′ 56″	139°04′38″	19971017	6,800 m²	六供土地区画整理事業
ロックシモドウギサン	マエバシシロックマチ			0.00 0.1/ #.0//	100001/50//	19971106	4.500.3	前橋都市計画事業
六供下堂木Ⅲ	前橋市六供町	10201	9 H 2 7	36° 21′ 58″	139° 04′ 50″	19971222	1,700 m²	六供土地区画整理事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主な遺物
六供中京安寺	集落址	古墳時代 ~中·近世	古墳1基、周溝墓2基 竪穴住居址10軒 溝址13条、土坑10基 井戸址5基 他	土師器、須恵器、灰釉陶器、 石器・石製品 等
特 記 事 項				
六供下堂木皿	水田址集落址	平安時代	水田址18枚 竪穴住居址3基 土坑4基 溝址3条	土師器、須恵器、灰釉陶器 等
特 記 事 項				

六供中京安寺遺跡・六供下堂木Ⅲ遺跡

平成10年 3 月20日 印 刷 平成10年 3 月25日 発 行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 前橋市上泉町664-4 TEL 027-231-9531 印 刷 株式会社 開文社印刷所

